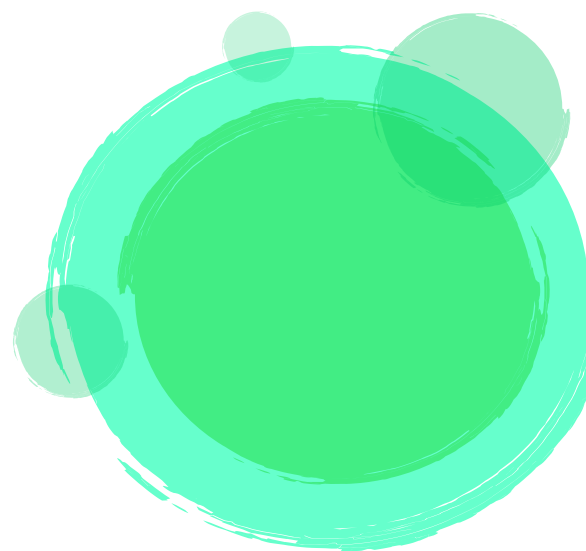


2026（令和8年度）
石巻専修大学 大学院

経営学研究科
〈シラバス〉



目次

経営学研究科

修士課程

経営学専攻	1
シラバス	2

博士後期課程

経営学専攻	84
シラバス	85

修士課程

経営学専攻

経営学特論 A (Advanced General Theory of Management A)

担当者	教授 工藤 周平
[単位・開講期] 2 単位・前期	
[授業概要] 企業を存続させるためには経営環境にうまく対応することが最も重要になる。現在は、政治的、経済的、社会的、技術的な要因によって経営環境が絶えず変化する。今日では予測困難な経営環境の変化もしばしば起こっており、企業は多くの経営問題に直面している。 本講義では、世界的に評価の高い学術雑誌である「ハーバード・ビジネス・レビュー」の経営戦略に関する重要論文を題材に、戦略の本質、業界構造分析、ビジネスモデル、戦略的マネジメント、意思決定手法等について学習する。授業で取り上げる論文の主張に基づいて、理論や分析枠組みの現代的意義や現代の企業経営に関する問題について議論を行う。	
[到達目標] 学生が、経営戦略を中心に経営学の基本的な考え方や分析枠組みを理解し、それらの活用方法を修得できる。経営学に関する重要論文の主張に基づき、現代の企業経営の問題について主体的に考え、実践的指針を示すことができる。	
<授業の方法>	
[授業形態]	
【対面形式】 板書とパワーポイントを活用しながら、講義形式ですすめる。	
[授業計画]	
(1) ガイダンス	
(2) 戦略の本質[対面]	
(3) 戦略の本質の現代的考察[対面]	
(4) 5つの競争要因[対面]	
(5) 5つの競争要因の現代的考察[対面]	
(6) ビジネスモデル・イノベーションの原則[対面]	
(7) ビジネスモデル・イノベーションの現代的考察[対面]	
(8) ブルー・オーシャン戦略[対面]	
(9) ブルー・オーシャン戦略の現代的考察[対面]	
(10) ストラテジック・プリンシプル[対面]	
(11) ストラテジック・プリンシプルの現代的考察[対面]	
(12) バランス・スコアカードによる戦略的マネジメントの構築[対面]	
(13) バランス・スコアカードによる戦略的マネジメントの現代的考察[対面]	
(14) 意思決定の RAPID モデル[対面]	
(15) RAPID モデルの現代的考察[対面]	
[アクティブラーニングの取り入れ状況] 毎回の講義内容について学生にプレゼンテーションを課す。講義のテーマについて、ディスカッションを行う。	
[課題に対するフィードバック方法] 提出課題にコメントを記入し返却する。	
[教科書・参考書等] 教科書：ハーバード・ビジネス・レビュー編集部、『戦略の教科書』、ダイヤモンド社、2019年。 参考書：必要に応じて講義中に紹介する。	

[評価方法]**(1)試験・テストについて**

試験やテストは実施しない

(2)試験以外の評価方法

学生の報告の内容、レポートなどの提出物、議論やグループワーク等を評価する

(3)成績の配分・評価基準等

報告内容の評価:40%、提出物の評価:30%、議論やグループワークの評価:30%

報告内容:各授業テーマの理解度、プレゼンテーションの内容を見る。

提出物の評価:レポートや課題について、指示通り作成されているか、深く考えられているか、思考を発展させてまとめられているかを見る。

議論やグループワークの評価:積極性、論理性、独創性などを見る。

[準備学習]

事前学習:次回の授業内容に該当する部分について調査し、疑問点などをまとめる。(150分)

事後学習:授業内容に関連した最近の企業経営の現象について学習した知識を用いて分析する。(90分)

[科目の位置づけと他科目との関連]

経営学、経営戦略、経営組織に関する基本的な理解が必要となる。経営学特論 B、経営管理論特論A・B、経営組織論特論 A・B と関連がある。

[担当教員へのアクセス]

研究室:3号館1階3116号室

メールアドレス:s3467012@edu.isenshu-u.ac.jp

[オフィスアワー]

時間帯:火曜5限(16時50分~18時20分)

場所:研究室(3号館1階3116室)

※オフィスアワーなどで研究室を訪問する際は、前もって連絡すること

経営学特論 B (Advanced General Theory of Management B)

担当者	教授 工藤 周平
[単位・開講期] 2 単位・後期	
[授業概要] 企業を存続・発展させるためには経営環境の変化に応じて企業を変革し、イノベーションを成功させなければならない。そして経営者はリーダーシップを発揮してそのための能力獲得を主導しなければならない。 本講義では、世界的に評価の高い学術雑誌である「ハーバード・ビジネス・レビュー」のイノベーション、企業変革、組織能力に関する重要論文を題材に、イノベーション、企業変革、マーケティング、コアコンピタンス獲得の方法について学習する。授業で取り上げる論文の主張に基づいて、理論や分析枠組みの現代的意義や現代の企業経営に関する問題について議論を行う。	
[到達目標] 学生が、経営システムを中心に経営学の基本的な考え方や分析枠組みを理解し、それらの活用方法を修得できる。経営学に関する重要論文の主張に基づき、現代の企業経営の問題について主体的に考え、実践的指針を示すことができる。	
<授業の方法>	
[授業形態]	
【対面形式】 板書とパワーポイントを活用しながら、講義形式ですすめる。	
[授業計画]	
(1) ガイダンス	
(2) イノベーションのジレンマへの挑戦[対面]	
(3) (2)の現代的考察と議論[対面]	
(4) イノベーションの罫[対面]	
(5) (4)の現代的考察と議論[対面]	
(6) 自己探求の時代[対面]	
(7) (6)の現代的考察と議論[対面]	
(8) マネジャーの仕事[対面]	
(9) (8)の現代的考察と議論[対面]	
(10) 企業変革の落とし穴[対面]	
(11) (10)の現代的考察と議論[対面]	
(12) マーケティング近視眼[対面]	
(13) (12)の現代的考察と議論[対面]	
(14) コア・コンピタンス経営[対面]	
(15) (14)の現代的考察と議論[対面]	
[アクティブラーニングの取り入れ状況] 毎回の講義内容について学生にプレゼンテーションを課す。講義のテーマについて、ディスカッションを行う。	
[課題に対するフィードバック方法] 提出課題にコメントを記入し返却する。	
[教科書・参考書等] 教科書：ハーバード・ビジネス・レビュー編集部、『世界の経営者が愛読するハーバード・ビジネス・レビュー BEST10 論文』、ダイヤモンド社、2018 年。 参考書：必要に応じて講義中に紹介する。	

[評価方法]**(1)試験・テストについて**

試験やテストは実施しない

(2)試験以外の評価方法

学生の報告の内容、レポートなどの提出物、議論やグループワーク等を評価する

(3)成績の配分・評価基準等

報告内容の評価:40%、提出物の評価:30%、議論やグループワークの評価:30%

報告内容:各授業テーマの理解度、プレゼンテーションの内容を見る。

提出物の評価:レポートや課題について、指示通り作成されているか、深く考えられているか、思考を発展させてまとめられているかを見る。

議論やグループワークの評価:積極性、論理性、独創性などを見る。

[準備学習]

事前学習:次回の授業内容に該当する部分について調査し、疑問点などをまとめる。(150分)

事後学習:授業内容に関連した最近の企業経営の現象について学習した知識を用いて分析する。(90分)

[科目の位置づけと他科目との関連]

経営学、経営戦略、経営組織に関する基本的な理解が必要となる。経営学特論 A、経営管理論特論A・B、経営組織論特論 A・B と関連がある。

[担当教員へのアクセス]

研究室:3号館1階3116号室

メールアドレス:s3467012@edu.isenshu-u.ac.jp

[オフィスアワー]

時間帯:火曜5限(16時50分~18時20分)

場所:研究室(3号館1階3116室)

※オフィスアワーなどで研究室を訪問する際は、前もって連絡すること

経営管理論特論 A (Advanced Business Management A)

担当者	准教授 稲葉 健太郎
[単位・開講期]	2 単位・前期
[授業概要]	<p>現在は、政治的、経済的、社会的、技術的な要因によって経営環境が絶えず変化する。企業はこのような経営環境の変化に応じて新しい企業経営の仕組みを構築し、それぞれの経営活動を管理しなければならない。</p> <p>本授業では、経営管理の内容として主に原価管理、販売管理、生産管理、人事管理に焦点を当てて経営の管理技法を学習する。さらに、新しい企業経営を発想するための手法としてシステム×デザイン思考とビジネスモデル・イノベーションに焦点を当てて、新しい企業経営の実現とその管理の方法について議論を進める。</p>
[到達目標]	<p>学生が、経営管理の内容と方法を理解し、それら経営管理について修得した知識に基づき、新しい企業経営とその継続的な改善について分析枠組みを使って主体的に思考できる。</p>
<授業の方法>	
[授業形態]	
【対面形式】	板書とパワーポイントを活用しながら、講義形式ですすめる。
[授業計画(前期)]	<ol style="list-style-type: none">(1) ガイダンス／経営管理研究の視座(古典理論から現代的潮流まで)(2) 企業を取り巻く環境変化(DX・不確実性・競争構造)(3) 戦略と組織の整合性(価値創造プロセスの理解)(4) 経営管理システムの全体像(管理プロセスと統制概念)(5) ケース分析①:現代企業の経営管理課題の構造化(6) 原価管理の理論(標準原価計算・活動基準原価計算)(7) 管理会計による意思決定支援(8) 業績評価システム(KPI・バランススコアカード)(9) 管理指標設計演習(定量分析ワーク)(10) ケース分析②:企業の収益構造と管理課題(11) 販売管理の理論(需要予測・チャンネル管理)(12) サービス業の事業システム分析(例:コンビニモデル)(13) 顧客価値創造とデータ活用(CRM・プラットフォーム)(14) ケース分析③:ビジネスモデルと販売戦略(15) 前期総括討論およびミニ研究報告
[アクティブラーニングの取り入れ状況]	<p>毎回の講義の内容について学生にプレゼンテーションを課す。講義のテーマについて、ディスカッションを行う。</p>
[課題に対するフィードバック方法]	提出課題にコメントを記入し返却する。
[教科書・参考書等]	<p>教科書: IT のプロ 46・三好康之、『ITエンジニアのための[業務知識]がわかる本 第5版』、翔泳社、2018年</p> <p>前野隆司、『システム×デザイン思考で世界を変える』、日経BP社、2014年</p> <p>野中郁次郎・徳岡晃一郎、『ビジネスモデル・イノベーション』、東洋経済新報社、2012年</p> <p>参考書: 必要に応じて講義中に紹介する</p>

[評価方法]**(1)試験・テストについて**

試験・テストは実施しない

(2)試験以外の評価方法

学生の報告の内容、レポートなどの提出物、議論やグループワーク等を評価する

(3)成績の配分・評価基準等

報告内容の評価:50%、提出物の評価:30%、議論の評価:20%

報告内容:各授業テーマの理解度、プレゼン資料などの発表方法を見る。

提出物の評価:レポートや課題を課し、それらが指示通りの内容か、深く考えられているか、思考を発展させてまとめられているか、を見る。

議論の評価:論理性、妥当性、意欲を見る。

[準備学習]

事前学習:次回の授業内容に該当する部分について調査し、疑問点などをまとめる。(90分)

事後学習:前回のノートや配布したプリント等を参考にして復習する。授業内容に関連したニュースに対して、学習した知識を用いて分析する。(150分)

[科目の位置づけと他科目との関連]

経営学特論や経営組織論特論を合わせて受講することが望ましい。

[担当教員へのアクセス]

研究室:3号棟1階3111室

メールアドレス: kinaba@isenshu-u.ac.jp

[オフィスアワー]

時間帯:随時受付

場所:研究室(3号棟1階3111室)

※研究室を訪問する際は、前もって連絡すること

経営管理論特論 B (Advanced Business Management B)

担当者	准教授 稲葉 健太郎
[単位・開講期]	2 単位・後期
[授業概要]	<p>現在は、政治的、経済的、社会的、技術的な要因によって経営環境が絶えず変化する。企業はこのような経営環境の変化に応じて新しい企業経営の仕組みを構築し、それぞれの経営活動を管理しなければならない。</p> <p>本授業では、経営管理の内容として主に原価管理、販売管理、生産管理、人事管理に焦点を当てて経営の管理技法を学習する。さらに、新しい企業経営を発想するための手法としてシステム×デザイン思考とビジネスモデル・イノベーションに焦点を当て、新しい企業経営の実現とその管理の方法について議論を進める。</p>
[到達目標]	<p>学生が、経営管理の内容と方法を理解し、それら経営管理について修得した知識に基づき、新しい企業経営とその継続的な改善について分析枠組みを使って主体的に思考できる。</p>
<授業の方法>	
[授業形態]	
【対面形式】	板書とパワーポイントを活用しながら、講義形式ですすめる。
[授業計画(後期)]	<ol style="list-style-type: none">(1) 品質管理の思想と方法(TQM・継続的改善)(2) QC 七つ道具の理論と応用分析(3) 生産計画・オペレーション管理(4) 在庫管理理論と最適化思考(5) 物流・サプライチェーンマネジメント(6) 人的資源管理の理論的基盤(7) モチベーション理論の発展(内容理論・過程理論)(8) 組織コミットメントとワークエンゲージメント(9) リーダーシップと組織成果(10) ケース分析④: 人的資源管理の制度設計(11) システム思考とデザイン思考による問題解決(12) ビジネスモデル・イノベーションの理論(13) 経営管理の統合フレームワーク構築演習(14) 最終研究報告プレゼンテーション(15) 総括討論: 持続的企業経営と管理の将来
[アクティブラーニングの取り入れ状況]	<p>毎回の講義の内容について学生にプレゼンテーションを課す。講義のテーマについて、ディスカッションを行う。</p>
[課題に対するフィードバック方法]	提出課題にコメントを記入し返却する。
[教科書・参考書等]	<p>教科書: IT のプロ 46・三好康之、『ITエンジニアのための[業務知識]がわかる本 第5版』、翔泳社、2018年</p> <p>前野隆司、『システム×デザイン思考で世界を変える』、日経 BP 社、2014年</p> <p>野中郁次郎・徳岡晃一郎、『ビジネスモデル・イノベーション』、東洋経済新報社、2012年</p> <p>参考書: 必要に応じて講義中に紹介する</p>

[評価方法]**(1)試験・テストについて**

試験・テストは実施しない

(2)試験以外の評価方法

学生の報告の内容、レポートなどの提出物、議論やグループワーク等を評価する

(3)成績の配分・評価基準等

報告内容の評価:50%、提出物の評価:30%、議論の評価:20%

報告内容:各授業テーマの理解度、プレゼン資料などの発表方法を見る。

提出物の評価:レポートや課題を課し、それらが指示通りの内容か、深く考えられているか、思考を発展させてまとめられているか、を見る。

議論の評価:論理性、妥当性、意欲を見る。

[準備学習]

事前学習:次回の授業内容に該当する部分について調査し、疑問点などをまとめる。(90分)

事後学習:前回のノートや配布したプリント等を参考にして復習する。授業内容に関連したニュースに対して、学習した知識を用いて分析する。(150分)

[科目の位置づけと他科目との関連]

経営学特論や経営組織論特論を合わせて受講することが望ましい。

[担当教員へのアクセス]

研究室:3号棟1階3111室

メールアドレス: kinaba@isenshu-u.ac.jp

[オフィスアワー]

時間帯:随時受付

場所:研究室(3号棟1階3111室)

※研究室を訪問する際は、前もって連絡すること

経営組織論特論 A (Business Organization A)

担当者	教授 杉田 博
[単位・開講期] 2 単位・前期	
[授業概要] 組織の内側に目を向けるマイクロ組織論、組織の外側に目を向けるマクロ組織論、このように経営組織論を二つの領域に分けることがあるが、本講義では両者を関連づけて扱う。それにより「人間－組織－社会－自然」のつながりを踏まえ、とくに「人間（私）」の立場から経営組織の基本的な考え方と重要な概念を理解する。	
[到達目標] 現実の経営事象を経営の理論・学説を用いて説明することができる。	
<授業の方法>	
[授業形態]	
【対面形式】 教科書を輪読し、その後、ディスカッションを行う。	
[授業計画]	
(1) ガイダンス：経営組織とはなにか [対面]	
(2) 組織の基本原理 [対面]	
(3) 経営の意思決定 [対面]	
(4) 組織メンバーの動機づけ [対面]	
(5) 組織メンバーのコミュニケーション [対面]	
(6) 組織のリーダーシップ I [対面]	
(7) 組織のリーダーシップ II [対面]	
(8) 組織文化の機能 [対面]	
(9) 組織分解の浸透 [対面]	
(10) 経営のイノベーション [対面]	
(11) オープンネットワーク [対面]	
(12) AIと経営組織 [対面]	
(13) あなたのキャリアデザイン I [対面]	
(14) あなたのキャリアデザイン II [対面]	
(15) まとめ [対面]	
[アクティブラーニング取り入れ状況] 発表とディスカッションを行う。	
[課題に対するフィードバック方法] 授業中に課題に対する説明を行う。	
[教科書・参考書等] 教科書：授業時に指示する。 参考書：授業時に指示する。	
[評価方法]	
(1) 試験・テストについて	
(2) 試験以外の評価方法	
(3) 成績の配分・評価基準等	

教科書を輪読する。発表担当者については、レジュメ、発表態度等を評価する。それ以外の学生については、質問の頻度等を評価する。出席重視。発表担当者の当日欠席は言語道断である。

[準備学習]

事前学習:発表レジュメ作成(120分)

事後学習:関連文献を読む(120分)

[授業以外の学習方法]

古典と呼ばれる書物を(難解だが)紐解いてみよう。

[科目の位置づけと他科目との関連]

本授業ではさまざまな学説を検討するが、それらは他の経営学関連科目でも取り上げられると思う。キーワードを見つけて科目と科目との関連を意識したい。

[担当教員へのアクセス]

研究室:3号館2階 3219号室

[オフィスアワー]

時間帯:木曜日 2 時限・昼休み・3 時限

場所:3号館2階 3219号室

[備考]

授業内容に関する質問は 3219 教室で随時受け付ける。

経営組織論特論 B (Business Organization B)

担当者	教授 杉田 博
[単位・開講期] 2 単位・後期	
[授業概要] 組織の内側に目を向けるマイクロ組織論、組織の外側に目を向けるマクロ組織論、このように経営組織論を二つの領域に分けることがあるが、本講義では両者を関連づけて扱う。具体的には「人間－組織－社会－自然」の視点から企業の組織と戦略の事例を取り上げて理論的に考察する。	
[到達目標] 経営の理論・学説を用いて事例(ケーススタディ)の問題点と解決策を説明することができる。	
<授業の方法>	
[授業形態]	
[対面形式] 教科書を輪読し、その後、ディスカッションを行う。	
[授業計画]	
(1) ガイダンス:組織とはなにか [対面]	
(2) 組織の合理性 [対面]	
(3) 組織の非合理性 [対面]	
(4) 組織は戦略に従う [対面]	
(5) 戦略は組織に従う [対面]	
(6) 組織構造の変革 [対面]	
(7) 経営プロセスの構築 [対面]	
(8) 経営プロセスの変革 [対面]	
(9) 環境変化と経営組織 [対面]	
(10) 環境適応と経営組織 [対面]	
(11) 環境創造と経営組織 [対面]	
(12) 企業と社会 I [対面]	
(13) 企業と社会 II [対面]	
(14) AIと企業経営、そして経営教育 [対面]	
(15) まとめ [対面]	
[アクティブラーニング取り入れ状況] 発表とディスカッションを行う。	
[課題に対するフィードバック方法] 授業中に課題に対する説明を行う。	
[教科書・参考書等] 教科書:授業時に指示する。 参考書:授業時に指示する。	
[評価方法]	
(1) 試験・テストについて	
(2) 試験以外の評価方法	
(3) 成績の配分・評価基準等	

教科書を輪読する。発表担当者については、レジュメ、発表態度等を評価する。それ以外の学生については、質問の頻度等を評価する。出席重視。発表担当者の当日欠席は言語道断である。

[準備学習]

事前学習:発表レジュメ作成(120分)

事後学習:関連文献を読む(120分)

[授業以外の学習方法]

古典と呼ばれる書物を(難解だが)紐解いてみよう。

[科目の位置づけと他科目との関連]

本授業ではさまざまな学説を検討するが、それらは他の経営学関連科目でも取り上げられると思う。キーワードを見つけて科目と科目との関連を意識したい。

[担当教員へのアクセス]

研究室:3号館2階 3219号室

[オフィスアワー]

時間帯:木曜日 2 時限・昼休み・3 時限

場所:3号館2階 3219号室

[備考]

授業内容に関する質問は 3219 教室で随時受け付ける。

マーケティング論特論 A (Advanced Marketing A)

担当者	教授 李 東勲
[単位・開講期] 2 単位・前期	
[授業概要] マーケティングは、もはや一部の大企業だけの課題ではなく、殆どの企業にとっても共通した課題となっている。本授業では、中小企業を対象とし、マーケティングに関する専門的な関心を通して理論的な側面と実践的な側面をバランスよく研究できるように指導する。具体的には、今日の中小企業のマーケティング活動を理論的に考察しながら、実践的な諸課題について研究していく予定である。特に、「学習・習得」から「調査・分析」へと段階的に進めることで、研究の土台を構築する。	
[到達目標] 本授業は、マーケティングの専門知識を研究することで、国際感覚を磨くと共に、世の中の変化を的確に把握し経営に反映させていく思考力の育成を目標とする。あわせて、修士論文研究における既存研究のレビューを正確に行うための基礎知識を養うことを到達目標とする。	
<授業の方法> [授業形態]:【対面形式】 教科書の輪読やケーススタディの際には、発表担当者を決め、担当部分の内容をまとめて説明してもらい、それを土台にグループワークを行う。	
[授業計画] 1. ガイダンスー研究の仕方について 2. 中小企業の経営戦略ー大企業との相違点と独自性 3. マーケティングの基本概念ー顧客価値と環境分析 4. 消費者行動とセグメンテーション、ターゲティング 5. マーケティング・ミックスの構築①ー製品戦略 6. マーケティング・ミックスの構築②ー価格戦略 7. マーケティング・ミックスの構築③ープロモーション戦略 8. マーケティング・ミックスの構築④ーコミュニケーション戦略 9. マーケティング・ミックスの構築⑤ー流通戦略 10. マーケティング・マインドの本質 11. 市場創造とイノベーターの役割 12. 中小企業の経営分析ー既存研究とデータの読み解き 13. 事例研究(1)ー製品・サービスにおける問題発見(調査・分析の実践) 14. 事例研究(2)ー解決策の導出と理論的整合性の検証 15. イノベーションの理論と中小企業への適用	
[アクティブラーニングの取り入れ状況] 修士課程において既存研究のレビューは研究を進める上で、必ず行わなければならない作業である。よって、本講義ではレビューにおいて絶対必要な「問題発見と解決能力」の養成を念頭におきながら、講義の理解度を確認するために「各企業が目まぐるしく変化する環境にどのように対応して成功したのか、または失敗したのか」などの事例を調査し、講義内容に基づいて分析・評価するレポートを課す予定である。	
[課題に対するフィードバック方法] 教科書やケーススタディの内容、さらにアクティブラーニングの課題などが現場ではどう利用されるのか、またどう応用すれば良いのかについて議論しながら解説する。	
[教科書・参考書等] 教科書:	

グロービス経営大学院 編著『[改訂4版]MBA マーケティング』ダイヤモンド社、2019年
田口冬樹 著『マーケティング・マインドとイノベーション』白桃書房、2017年

[評価方法]

(1)試験・テスト 筆記試験は実施しない。

(2)試験以外の評価方法

本授業の評価基準は参加状況と発言頻度、発言内容、発表レジュメなどを総合的に判断し評価する。よって、十分な準備をしていない場合や発言しない人は評価が低くなる。

(3)成績の配分・評価基準等

受講学生の分担によって授業を進めるため、以下の3つの視点を総合的に判断し、平常点として評価する。

①報告の内容(35%)、②ディスカッションの際の態度(35%)、③中間報告ならびに最終報告の内容(30%)

[準備学習]

事前学習:本授業は参加型の形式をとり、理解力だけではなく探究力や表現力を養うことを目指す。したがって、絶えず新聞、雑誌などに目を通して授業に参加することを求める。また、教科書をしっかり講読し、問題意識・質問を用意しなければならない。よって、教科書の内容を的確に理解するため、関連資料を調べることも求める。(120分)

事後学習:本授業では、理解力・探究力・行動力を身につけるために礎となる基本知識を学ぶので、その日勉強した内容をまず覚えるように努めなければならない。そして、授業内容と関連する事例を調べてその理解度を向上させるように取り組むことを求める。(120分)

[授業以外の学習方法]

教科書の内容を的確に理解するため、関連資料を調べることが必要である。特に、新聞・雑誌などは絶えず目を通して欲しい。

[科目の位置づけと他科目との関連]

マーケティングは、企業が持続的な成長を続ける上で、重要な戦略である。よって、マーケティング特論を受講するに当たっては、修士課程に配置されている科目を総合的に勉強する必要がある。

[担当教員へのアクセス]

研究室:3号館2階3210号室

※ Microsoft Teams のチャットを利用して随時コミュニケーションを取る。

[オフィスアワー]

3号館2階3210研究室で、随時対応する。但し、Microsoft Teams のチャットで事前に会う約束を取るようにして下さい。

[備考]

院生の研究関心によっては相談の上で、教科書や授業内容を決定する。よって、上述した授業計画は受講生の関心によって変更可能であり、一つの例である。

マーケティング論特論 B (Advanced Marketing B)

担当者	教授 李 東勲
<p>[単位・開講期] 2 単位・後期</p> <p>[授業概要] 本授業においても中小企業を対象とし、理論と実践の両側面をバランスよく研究できるよう指導する。具体的には、各企業が激変する環境にどのように対応して成功、あるいは失敗したのかという事例を調査し、講義内容に基づいて分析・評価を行う。このようなアクティブラーニングを通じて、理論が現場でどう利用・応用されるべきかについて議論を深める。</p> <p>[到達目標] 高度なマーケティング専門知識の習得を通じて国際感覚を養い、経営に資する思考力を定着させる。これに加え、事例分析や議論を通じて、修士論文執筆に不可欠な「既存研究のレビュー」を明確かつ正確に行える実践的な能力を身につけることを最終目標とする。</p> <p><授業の方法> [授業形態]:【対面形式】 教科書の輪読やケーススタディの際には、発表担当者を決め、担当部分の内容をまとめて説明してもらい、それを土台にグループワークを行う。</p> <p>[授業計画] 1. ガイダンスー後期研究課題の設定とレビューの精緻化 2. 中小企業マーケティングの特質 3. 起業家精神とマーケティング戦略の動態 4. 環境変化への対応事例分析(1)ー成功要因の特定 5. 環境変化への対応事例分析(2)ー失敗要因の分析 6. 価値共創時代の到来とブランド戦略 7. 顧客との共創プロセスとブランド構築 8. サービス・ドミナント・ロジックの理解 9. 事例調査ーブランド価値の変遷と環境適応 10. 経営目的からみる小零細小売業の分析 11. 日本における商店街の問題と活性化策 12. 【アクティブラーニング】地域ブランドと中小企業の連携ー現場での応用議論 13. 既存研究の精緻なレビュー(1)ー先行研究の批判的検討と論理構築 14. 既存研究の精緻なレビュー(2)ー修士論文における独自性の提示 15. 成果のまとめと今後の研究課題</p> <p>[アクティブラーニングの取り入れ状況] 修士課程において既存研究のレビューは研究を進める上で、必ず行わなければならない作業である。よって、本講義ではレビューにおいて絶対必要な「問題発見と解決能力」の養成を念頭におきながら、各企業が変化する環境にどう適応したかの事例調査を行い、講義で学んだ理論に基づいて分析・評価するレポートを課す。その際、現場で理論がどう利用・応用されているかを自ら調査・分析し、その有効性について受講生同士で議論を行うことで、実践的な問題解決能力を養成する。</p> <p>[課題に対するフィードバック方法] 毎回のディスカッションでの発言や発表内容に対し、その場で口頭による批評を行う。また、提出されたレポートやレジュメに対しては、理論の適用精度や事例分析の妥当性について、個別の添削または Microsoft Teams を通じたフィードバックを実施し、次回の分析への改善につなげる。</p>	

[教科書・参考書等]

教科書：田中道雄 著『中小企業マーケティング』中央経済社、2014 年
青木幸弘 編著『価値共創時代のブランド戦略』ミネルヴァ書房、2011 年

[評価方法]

(1)試験・テスト 筆記試験は実施しない。

(2)試験以外の評価方法

本授業の評価基準は参加状況と発言頻度、発言内容、発表レジュメなどを総合的に判断し評価する。よって、十分な準備をしていない場合や発言しない人は評価が低くなる。

(3)成績の配分・評価基準等

受講学生の分担によって授業を進めるため、以下の 3 つの基準に基づいたルーブリックを用いて、総合的に評価する。

①報告の内容(35%)：既存研究のレビューの正確性と論理的な分析能力、

②ディスカッションの際の態度(35%)：積極的な発言と建設的な問題提起・質疑、

③中間報告ならびに最終報告の内容(30%)：理論に基づいた分析・評価

[準備学習]

事前学習：本授業は参加型の形式をとり、理解力だけではなく探究力や表現力を養うことを目指す。したがって、絶えず新聞、雑誌などに目を通して授業に参加することを求める。また、教科書をしっかり講読し、問題意識・質問を用意しなければならない。よって、教科書の内容を的確に理解するため、関連資料を調べることも求める。(120分)

事後学習：本授業では、理解力・探究力・行動力を身につけるために礎となる基本知識を学ぶので、その日勉強した内容をまず覚えるように努めなければならない。そして、授業内容と関連する事例を調べてその理解度を向上させるように取り組むことを求める。(120分)

[授業以外の学習方法]

教科書の内容を的確に理解するため、関連資料を調べることが必要である。特に、新聞・雑誌などは絶えず目を通して欲しい。

[科目の位置づけと他科目との関連]

マーケティングは、企業が持続的な成長を続ける上で、重要な戦略である。よって、マーケティング特論を受講するに当たっては、修士課程に配置されている科目を総合的に勉強する必要がある。

[担当教員へのアクセス]

研究室：3号館2階3210号室

※ Microsoft Teams のチャットを利用して随時コミュニケーションを取る。

[オフィスアワー]

3号館2階3210号研究室で、随時対応する。但し、Microsoft Teams のチャットで事前に会う約束を取るようにして下さい。

[備考]

院生の研究関心によっては相談の上で、教科書や授業内容を決定する。よって、上述した授業計画は受講生の関心によって変更可能であり、一つの例である。

国際比較経営論特論 A (Advanced International Comparative Management A)

担当者	教授 丸岡 泰
<p>[単位・開講期] 2 単位・前期</p> <p>[授業概要] 本授業では、主に日本を含む東アジアと米州の多様な主要企業を取り上げる。議論の出発点として、前期にはレイモンド・ヴァーノンのプロダクト・サイクル論、後期には世界銀行の『東アジアの奇跡』を参加者の間で共有する。その後、それぞれの理論の適用できる企業の事例を選び精査する。企業の選択は、できるだけ参加者の関心に合わせるようにする。</p> <p>[到達目標] プロダクト・サイクル論と東アジアの奇跡の要点を理解する。東アジア諸国・ラテンアメリカ諸国の開発戦略と各国の代表的企業の成長との関連を理解する。</p> <p><授業の方法></p> <p>[授業形態] 【対面形式】を基本とするが、参加者との相談の上【非対面形式】の同時双方向型を取る場合もある。学生の報告と議論を中心に授業を進める。</p> <p>[授業計画(前期)] (1) ガイダンス[対面] (2)~(4) 教科書 (Vernon) の講読[対面] (5)~(14) 繊維、自動車など主に製造業から参加者の関心に応じて企業を選択・精査[対面] (15) 前期のまとめ[対面]</p> <p>[アクティブラーニングの取り入れ状況] 授業での報告・議論。</p> <p>[課題に対するフィードバック方法] 報告へのコメント・議論。</p> <p>[教科書・参考書等] Raymond Vernon “International Trade and International Investment in the Product Cycle,” Quarterly Journal of Economics, Volume 80, Issue 2, May 1966 World Bank East Asian Miracle: economic growth and public policy, 1993</p> <p>[評価方法] (1) 試験・テストについて 試験・テストは行わない。 (2) 試験以外の評価方法 授業での報告の質を評価する。 (3) 成績の配分・評価基準等 授業への準備と参加を重視する。</p> <p>[準備学習] 事前学習： 指定文献の指定箇所を読むとともに関心のある企業を選択し、報告の準備をすること。(120 分) 事後学習： 指定文献の内容と選択した企業の情報を復習すること。(120 分)</p> <p>[科目の位置づけと他科目との関連]</p>	

本科目は担当者の学部開講科目「国際経済論」など経済学関連科目の延長上にある。また、前期の議論は「産業観光論」でも紹介されている。未履修者はこれらの授業の教科書・参考文献に目を通し、基本的な議論を押さえておくこと。

[担当教員へのアクセス]

研究室:3号館2階 3215 号室

[オフィスアワー]

時間帯:メール等でのアポに応じ実施。

maruoka(a)isenshu-u.ac.jp <(a)はアットマークに>

場所:研究室。

国際比較経営論特論 B (Advanced International Comparative Management B)

担当者	教授 丸岡 泰
<p>[単位・開講期] 2 単位・後期</p> <p>[授業概要] 本授業では、主に日本を含む東アジアと米州の多様な主要企業を取り上げる。議論の出発点として、前期にはレイモンド・ヴァーノンのプロダクト・サイクル論、後期には世界銀行の『東アジアの奇跡』を参加者の間で共有する。その後、それぞれの理論の適用できる企業の事例を選び精査する。企業の選択は、できるだけ参加者の関心に合わせるようにする。</p> <p>[到達目標] プロダクト・サイクル論と東アジアの奇跡の要点を理解する。東アジア諸国・ラテンアメリカ諸国の開発戦略と各国の代表的企業の成長との関連を理解する。</p> <p><授業の方法></p> <p>[授業形態] 【対面形式】を基本とするが、参加者との相談の上【非対面形式】の同時双方向型を取る場合もある。学生の報告と議論を中心に授業を進める。</p> <p>[授業計画(後期)] (1) ガイダンス[対面] (2)~(4) 教科書 (Vernon) の講読[対面] (5)~(14) 繊維、自動車など主に製造業から参加者の関心に応じて企業を選択・精査[対面] (15) 後期のまとめ[対面]</p> <p>[アクティブラーニングの取り入れ状況] 授業での報告・議論。</p> <p>[課題に対するフィードバック方法] 報告へのコメント・議論。</p> <p>[教科書・参考書等] Raymond Vernon, "International Trade and International Investment in the Product Cycle," <i>Quarterly Journal of Economics</i>, Volume 80, Issue 2, May 1966 World Bank, <i>East Asian Miracle: economic growth and public policy</i>, 1993</p> <p>[評価方法] (1) 試験・テストについて 試験・テストは行わない。 (2) 試験以外の評価方法 授業での報告の質を評価する。 (3) 成績の配分・評価基準等 授業への準備と参加を重視する。</p> <p>[準備学習] 事前学習: 指定文献の指定箇所を読むとともに関心のある企業を選択し、報告の準備をすること。(120分) 事後学習: 指定文献の内容と選択した企業の情報を復習すること。(120分)</p>	

[科目の位置づけと他科目との関連]

本科目は担当者の学部開講科目「国際経済論」など経済学関連科目の延長上にある。また、前期の議論は「産業観光論」でも紹介されている。未履修者はこれらの授業の教科書・参考文献に目を通し、基本的な議論を押さえておくこと。

[担当教員へのアクセス]

研究室:3号館2階 3215号室

[オフィスアワー]

時間帯:メール等でのアポに応じ実施。

maruoka(a)isenshu-u.ac.jp <(a)はアットマークに>

場所:研究室。

地域経営論特論 A (Advanced Regional Management A)

担当者	教授 庄子 真岐
<p>[単位・開講期] 2 単位・前期</p>	
<p>[授業概要] 本授業では、地域経営に関する主要な理論や概念を体系的に学ぶ。人口減少社会における地域の課題を背景に、地域ガバナンス、地域資源論、地域経済循環、観光まちづくり、地域ブランドなどの理論を整理し、地域経営の基礎的枠組みを理解する。 また、地域社会における多様な主体（行政、企業、市民、大学等）の役割や協働のあり方について理論的視点から検討し、持続可能な地域づくりを考えるための分析視点を身につける。</p>	
<p>[到達目標] 地域経営に関する主要理論を理解し、地域課題を分析するための理論的枠組みを説明できるようになる。 また、地域経営をめぐる政策や実践を理論的視点から整理し、学術的に議論できる力を身につける。</p>	
<p><授業の方法></p>	
<p>[授業形態] 【対面形式】 テーマに基づいた内容の文献、調査資料を予習課題として提示する。</p>	
<p>[授業計画] (1) 地域経営の概念と人口減少社会の地域課題 [対面] (2) 地域経営研究の理論的枠組み [対面] (3) 地域ガバナンス論 [対面] (4) 地域資源論と地域価値創造 [対面] (5) 観光まちづくりの理論 [対面] (6) 地域ブランド論 [対面] (7) 地域経済循環とローカル経済論 [対面] (8) 地域政策と地方創生 [対面] (9) 地域交通と地域経済 [対面] (10) 地域コミュニティと市民参加 [対面] (11) 地域イノベーションと産業創出 [対面] (12) 持続可能な地域づくりの理論 [対面] (13) 海外における地域政策の理論 [対面] (14) 地域経営理論の統合的理解 [対面] (15) 地域経営の理論と今後の研究課題 [対面]</p>	
<p>[アクティブラーニングの取り入れ状況] 提示された文献や調査資料の内容を受講生がまとめ、発表する。 発表内容について教員が補足説明した後、ディスカッションを行う。</p>	
<p>[課題に対するフィードバック方法] 文献購読のまとめ、プレゼンテーション、レポート課題については、評価表（ルーブリック）を用いて相互評価を行い、講義内でフィードバックする。</p>	
<p>[教科書・参考書等] 教科書：なし。随時プリントを配布する。</p>	
<p>[評価方法] (1) 試験・テストについて 試験は実施しない。前期後期2回のレポートを課す。 (2) 試験以外の評価方法</p>	

プレゼンテーション、文献購読、授業への貢献度（ディスカッションへの積極的参加）により評価する。

(3)成績の配分・評価基準等

本科目は、プレゼンテーション（40%）・文献購読、レポート課題（40%）・授業への貢献度（20%）によって評価する。

[準備学習]

事前学習：提示された文献、調査資料を読み込み、発表資料としてまとめること。

事後学習：授業中の論点に応じた文献を紹介するので、しっかり読み込んでおくこと。

[科目の位置づけと他科目との関連]

経営学に類する科目の多くは、本科目の内容と関連する。とくに、「マーケティング論特論」は、関連性が強いと考えられる。

[担当教員へのアクセス]

研究室：3号館 1階 3104号室（事前にアポを取る）

Teams チャットで随時対応

[オフィスアワー]

時間帯：火から木 昼休み

場所：3号館 1階 3104号室、オンライン

地域経営論特論 B (Advanced Regional Management B)

担当者	教授 庄子 真岐
<p>[単位・開講期] 2 単位・後期</p>	
<p>[授業概要] 本授業では、「地域経営論特論 A」で学んだ理論を踏まえ、国内外の地域経営の事例を分析し、地域政策や地域プロジェクトの設計について検討する。地域活性化、観光地域づくり、地域ブランド、地域交通、地域経済循環などの具体的事例を取り上げ、その成功要因や課題を多面的に分析する。 さらに、地域課題を対象とした政策提案や事業モデルの構築を通じて、地域経営の実践的応用力を養う。</p>	
<p>[到達目標] 地域経営の具体的事例を理論的視点から分析し、成功要因と課題を整理できるようになる。 また、地域課題に対する政策や事業モデルを構想し、持続可能な地域経営の方策を提案できるようになる。</p>	
<p><授業の方法></p>	
<p>[授業形態]</p>	
<p>【対面形式】 テーマに基づいた内容の文献、調査資料を予習課題として提示する。</p>	
<p>[授業計画] (1) ガイダンス、地域経営のケース分析の方法 [対面] (2) 地方創生政策の事例分析 [対面] (3) 観光まちづくりの事例分析 [対面] (4) 地域ブランド戦略の事例分析 [対面] (5) 商店街再生の事例分析 [対面] (6) 地域交通政策の事例分析 [対面] (7) 地域経済循環の事例分析 [対面] (8) 地域コミュニティ再生の事例分析 [対面] (9) 地域イノベーションの事例分析 [対面] (10) 海外の地域再生事例の分析 [対面] (11) 震災復興と地域経営の事例分析 [対面] (12) 地域プロジェクトの政策設計 [対面] (13) 地域政策提案の方法 [対面] (14) 地域経営戦略の設計 [対面] (15) 持続可能な地域経営モデルの構築 [対面]</p>	
<p>[アクティブラーニングの取り入れ状況] 提示された文献や調査資料の内容を受講生がまとめ、発表する。 発表内容について教員が補足説明した後、ディスカッションを行う。</p>	
<p>[課題に対するフィードバック方法] 文献購読のまとめ、プレゼンテーション、レポート課題については、評価表(ルーブリック)を用いて相互評価を行い、講義内でフィードバックする。</p>	
<p>[教科書・参考書等] 教科書:なし。随時プリントを配布する。</p>	
<p>[評価方法] (1) 試験・テストについて 試験は実施しない。前期後期2回のレポートを課す。 (2) 試験以外の評価方法 プレゼンテーション、文献購読、授業への貢献度(ディスカッションへの積極的参加)により評価する。</p>	

(3)成績の配分・評価基準等

本科目は、プレゼンテーション(40%)・文献購読、レポート課題(40%)・授業への貢献度(20%)によって評価する。

[準備学習]

事前学習:提示された文献、調査資料を読み込み、発表資料としてまとめること。

事後学習:授業中の論点に応じた文献を紹介するので、しっかり読み込んでおくこと。

[科目の位置づけと他科目との関連]

経営学に類する科目の多くは、本科目の内容と関連する。とくに、「マーケティング論特論」は、関連性が強いと考えられる。

[担当教員へのアクセス]

研究室:3号館 1階 3104号室 (事前にアポを取る)

Teams チャットで随時対応

[オフィスアワー]

時間帯:火から木 昼休み

場所:3号館 1階 3104号室、オンライン

会社法特論 A (Corporation Law A)

担当者	教授 三森 敏正
[単位・開講期] 2 単位・前期	
[授業概要] 本講義は、会社法の重要判例を素材として、企業統治・取締役責任・株主権保護・組織再編などの主要論点を理論的かつ実務的に検討する大学院レベルの演習型講義である。テキストとして『会社法判例百選(最新版)』を用い、判例の事実関係、争点、判旨、判断枠組みを精密に分析する。さらに、関連する学説、立法動向、コーポレート・ガバナンス改革の議論、米国法(特に Business Judgment Rule)との比較も視野に入れて検討する。院生は判例報告および討論に参加し、会社法の研究能力と高度な法的分析能力を養う。	
[到達目標] ・会社法の主要制度を判例・学説の双方から体系的に理解できる。 ・重要判例の事実関係・争点・判旨を分析し、その法的意義を説明できる。	
<授業の方法>	
[授業形態] [対面形式](履修者の希望があれば一部オンライン併用) 演習方式。	
[授業計画] (1) ガイダンス・判例百選の使い方 (2) 会社の概念・種類と設立 (3) 法人格の否認 (4) 株式の意義・種類と株主平等原則 (5) 株式の譲渡と制限 (6) 自己株式・支配株式の取得 (7) 株主総会の権限・決議 (8) 株主総会決議の瑕疵 (9) 取締役の選任・解任・資格 (10) 取締役の義務(善管注意義務・忠実義務) (11) 競業禁止義務・利益相反取引 (12) 取締役の責任(対会社・第三者責任) (13) 監査役・監査等委員会・指名委員会等設置会社 (14) 会計・計算書類・配当規制 (15) 前期まとめ	
[アクティブラーニングの取り入れ状況] アクティブラーニングを取り入れている。	
[課題に対するフィードバック方法] レポートについて講評し、必要に応じて添削して返却する。	
[教科書・参考書等] 教科書:別冊ジュリスト 会社法判例百選[第4版] 参考書:田中亘著 会社法[第5版]東京大学出版会	
[評価方法] (1)試験・テストについて	

実施しない。

(2)試験以外の評価方法

毎回の授業における報告の準備状況および議論への貢献度。

(3)成績の配分・評価基準等

報告内容8割 レポート2割

[準備学習]

事前学習:履修者は、レポーターである与否とに関わらず、各自教科書に記載されている判例・文献に目を通した上で授業に出席すること。(150分)

事後学習:会社法は民法の特別法であるので、民法の知識は必須である。民法の知識が不十分な場合には、各自民法の基本書などを読むなどして理解しておくこと。(120分)

[科目の位置づけと他科目との関連]

学部において、一定の企業に関わる基礎知識を学んでいない履修者は企業論、会計学の基礎知識を独自で学修するとともに、関連科目を履修すること。

[担当教員へのアクセス]

研究室:3号館1階3123号室

[オフィスアワー]

時間帯:木曜日13:00~13:30

場所:3号館1階3123号室

会社法特論 B (Corporation Law B)

担当者	教授 三森 敏正
[単位・開講期] 2 単位・後期	
[授業概要] 本講義は、会社法の重要判例を素材として、企業統治・取締役責任・株主権保護・組織再編などの主要論点を理論的かつ実務的に検討する大学院レベルの演習型講義である。テキストとして『会社法判例百選(最新版)』を用い、判例の事実関係、争点、判旨、判断枠組みを精密に分析する。さらに、関連する学説、立法動向、コーポレート・ガバナンス改革の議論、米国法(特に Business Judgment Rule)との比較も視野に入れて検討する。院生は判例報告および討論に参加し、会社法の研究能力と高度な法的分析能力を養う。	
[到達目標] ・会社法の主要制度を判例・学説の双方から体系的に理解できる。 ・重要判例の事実関係・争点・判旨を分析し、その法的意義を説明できる。	
<授業の方法>	
[授業形態] 【対面形式】(履修者の希望があれば一部オンライン併用) 演習方式。	
[授業計画(前期)] (1) ガイダンス (2) 資金調達(株式・社債) (3) 新株予約権 (4) 合併 (5) 会社分割 (6) 株式交換・株式移転・株式交付 (7) 事業譲渡・譲受け (8) 敵対的買収と防衛策 (9) 株主代表訴訟 (10) 差止請求・違法行為差止め (11) 解散・清算 (12) 持分会社(合名・合資・合同会社) (13) コーポレートガバナンスと最新動向 (14) グループ会社法制・親子会社関係 (15) まとめ	
[アクティブラーニングの取り入れ状況] アクティブラーニングを取り入れている。	
[課題に対するフィードバック方法] レポートについて講評し、必要に応じて添削して返却する。	
[教科書・参考書等] 教科書:別冊ジュリスト 会社法判例百選[第4版] 参考書:田中亘著 会社法[第5版]東京大学出版会	
[評価方法] (1)試験・テストについて	

実施しない。

(2)試験以外の評価方法

毎回の授業における報告の準備状況および議論への貢献度。

(3)成績の配分・評価基準等

報告内容8割 レポート2割

[準備学習]

事前学習:履修者は、レポーターである与否とに関わらず、各自教科書に記載されている判例・文献に目を通した上で授業に出席すること。(150分)

事後学習:会社法は民法の特別法であるので、民法の知識は必須である。民法の知識が不十分な場合には、各自民法の基本書などを読むなどして理解しておくこと。(120分)

[科目の位置づけと他科目との関連]

学部において、一定の企業に関わる基礎知識を学んでいない履修者は企業論、会計学の基礎知識を独自で学修するとともに、関連科目を履修すること。

[担当教員へのアクセス]

研究室:3号館1階3123号室

[オフィスアワー]

時間帯:木曜日13:00~13:30

場所:3号館1階3123号室

経営学演習 (Seminar of Advanced Business Management)

担当者	専任教員
[単位・開講期]	
8 単位 (2 年間)	
[授業概要]	
<p>「経営学演習」では、「経営学」という専攻分野の枠内で、それぞれの演習担当教員が担当する授業科目と結びつく研究分野を中心としながらも限定されることなく、各担当教員の実際の研究領域に関連するテーマについて、修士論文作成のための研究指導を行う。学生には、志望する演習担当教員との面談機会を提供し、各教員の担当する授業科目を参考にしながら、自分の関心に対応する指導が受けられる教員を、指導教員として選べるような機会を提供する。</p>	
<p>各々のテーマを設定した学生は、演習担当教員の指導のもと、文献の講読、資料の収集、調査分析等を行い、適当な時期に発表・討論しながら、さらにその研究を深めていき、最終的には修士論文の作成へと繋げる。</p>	
[到達目標]	
研究書を読破し、プレゼンをできる。	
<授業の方法>	
[授業形態]	
【対面形式】【非対面形式】 指導教員の指示に基づく。	
[授業計画]	[授業計画]
1. 演習の初回に説明を行う。	2. 演習の初回に説明を行う。
[アクティブラーニングの取り入れ状況]	
報告とその質疑応答。	
[課題に対するフィードバック方法]	
質疑応答によるフィードバック。	
[教科書・参考書等]	
教科書：別途指示する。	
参考書：	
[評価方法]	
(1) 試験・テストについて 指導教員の指示に基づく。	
(2) 試験以外の評価方法 報告に関する質疑の内容。	
(3) 成績の配分・評価基準等 発表・討論等の状況を総合的に評価する。	
[準備学習]	
事前学習：論文テーマに関する文献調査、報告準備。(120 分)	
事後学習：報告した内容の精査。(120 分)	
[科目の位置づけと他科目との関連]	
経営学演習は、教員の指導の下、修士論文を仕上げるのが目的であり、教員と相談の上、他科目の受講等、行うべきである。	
[担当教員へのアクセス]	

研究室:指導教員の指示に基づく。

[オフィスアワー]

時間帯:指導教員の指示に基づく。

場所:指導教員の指示に基づく。

会計学原理特論 A (Advanced Accounting Theory A)

担当者	教授 関根 慎吾
<p>[単位・開講期] 2 単位・前期</p>	
<p>[授業概要] 一連の会計規制の改革で、簿記会計の世界は大きく様変わりしている。本授業ではこのような簿記会計を取り巻く環境の変化のなかで、特に会計に係る諸問題を、個別会計を前提に検討していく。とはいえ、簿記と会計は密接に関連しており、厳密に分けることは困難になっている。したがって授業では会計の諸問題に限らず、簿記の諸問題にも検討を加えていくことになろう。</p>	
<p>[到達目標] 高度な会計、特に財務諸表に関する諸問題について、特に個別会計におけるその処理方法のみならず、その考え方についても理解を深め、類似する他の諸問題への対処するためのアイデアを提示できるようになる。</p>	
<p><授業の方法></p>	
<p>[授業形態] [対面形式] 授業内容の説明と報告による質疑応答。</p>	
<p>[授業計画]</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) [対面] ガイダンス: 会計学の現代的課題 (2) [対面] 財務会計の機能と制度 (3) [対面] 利益計算の仕組み (4) [対面] 会計理論と会計基準 (5) [対面] 利益測定と資産評価の基礎概念 (6) [対面] 会計学総合演習(1)－財務諸表の作成プロセス (7) [対面] 現金預金と有価証券 (8) [対面] 売上高と売上債権 (9) [対面] 棚卸資産と売上原価 (10) [対面] 有形固定資産と減価償却 (11) [対面] 無形固定資産と繰延資産 (12) [対面] 負債 (13) [対面] 株主資本と純資産 (14) [対面] 会計学総合演習(2)－財務諸表の作成と公開 (15) [対面] まとめ 	
<p>[アクティブラーニングの取り入れ状況] 報告と質疑応答。</p>	
<p>[課題に対するフィードバック方法] 質疑応答によるフィードバック。</p>	
<p>[教科書・参考書等] 教科書: 桜井久勝著『財務会計講義』、中央経済社、4290 円 参考書: 随時指示する。</p>	
<p>[評価方法]</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 試験・テストについて 行わない。 (2) 試験以外の評価方法 報告に関する質疑の内容。 	

(3)成績の配分・評価基準等

日頃のレポートや各種の演習課題の成績によって、総合的に評価する。

[準備学習]

事前学習:報告準備のための文献調査。(120分)

事後学習:報告した内容の精査。(120分)

受講生には分担してテキストの内容を報告してもらおうが、報告者のみならず全ての受講者が報告者のつもりで、授業に望んでもらいたい。そのためには、テキストの予習および復習ならびに授業中にでたトピックスについての検討を行い、次回の授業で発表してもらおう。また、テキストとは別に、簿記会計の諸問題について、税理士試験財務諸表論レベルの問題に取り組む。

[科目の位置づけと他科目との関連]

簿記は会計の諸科目と密接な関連があることから、簿記論特論、管理会計論特論で勉強する内容もまた、会計学原理特論での勉強に役立つはずである。また、租税論特論は主に税務を扱うものであるが、会計に関する知識を有していることを前提に進められるので、本授業での学習は必要である。

[担当教員へのアクセス]

研究室:3号館2階 3218号室

[オフィスアワー]

時間帯:随時受け付ける。

場所:3号館2階 3218号室

会計学原理特論 B (Advanced Accounting Theory B)

担当者	教授 関根 慎吾
[単位・開講期]	2 単位・後期
[授業概要]	<p>一連の会計規制の改革で、簿記会計の世界は大きく様変わりしている。本授業ではこのような簿記会計を取り巻く環境の変化のなかで、特に会計に係る諸問題を、連結会計やその他の特殊問題を中心に検討していく。とはいえ、簿記と会計は密接に関連しており、厳密に分けることは困難になっている。したがって授業では会計の諸問題に限らず、簿記の諸問題にも検討を加えていくことになろう。</p>
[到達目標]	<p>高度な会計、特に財務諸表に関する諸問題について、特に連結会計に特有の問題を中心に、その処理方法のみならず、その考え方についても理解を深め、類似する他の諸問題への対処するためのアイデアを提示できるようにする。</p>
<授業の方法>	
[授業形態]	
[対面形式]	授業内容の説明と報告による質疑応答。
[授業計画]	<ol style="list-style-type: none">(1) [対面] ガイダンス: 連結財務諸表に関する会計学の現代的課題(2) [対面] 財務諸表の作成と公開(3) [対面] 連結財務諸表(1) 一連結貸借対照表の作成(4) [対面] 連結財務諸表(2) 一連結損益計算書の作成(5) [対面] 連結財務諸表(3) 一連結株主資本等変動計算書の作成(6) [対面] 連結財務諸表(4) 一持分法(7) [対面] 連結財務諸表(5) 一連結キャッシュ・フロー計算書の作成(8) [対面] 会計学総合演習(1) 一国内企業を対象とした連結財務諸表の作成(9) [対面] 外貨建取引等の換算(1) 一企業活動の国際化と会計問題(10) [対面] 外貨建取引等の換算(2) 一換算の諸方法(11) [対面] 外貨建取引等の換算(3) 一外貨建取引の換算(12) [対面] 外貨建取引等の換算(4) 一為替予約(13) [対面] 外貨建取引等の換算(5) 一在外支店の財務諸表項目の換算(14) [対面] 外貨建取引等の換算(6) 一在外子会社等の財務諸表項目の換算(15) [対面] 会計学総合演習(2) 一海外企業を含む連結財務諸表の作成
[アクティブラーニングの取り入れ状況]	報告と質疑応答。
[課題に対するフィードバック方法]	質疑応答によるフィードバック。
[教科書・参考書等]	教科書: 桜井久勝著『財務会計講義』、中央経済社、4290 円 参考書: 随時指示する。
[評価方法]	(1) 試験・テストについて 行わない。

(2)試験以外の評価方法

報告に関する質疑の内容。

(3)成績の配分・評価基準等

日頃のレポートや各種の演習課題の成績によって、総合的に評価する。

[準備学習]

事前学習:報告準備のための文献調査。(120分)

事後学習:報告した内容の精査。(120分)

受講生には分担してテキストの内容を報告してもらうが、報告者のみならず全ての受講者が報告者のつもりで、授業に望んでもらいたい。そのためには、テキストの予習および復習ならびに授業中にでたトピックスについての検討を行い、次回の授業で発表してもらおう。また、テキストとは別に、簿記会計の諸問題について、税理士試験財務諸表論レベルの問題に取り組む。

[科目の位置づけと他科目との関連]

簿記は会計の諸科目と密接な関連があることから、簿記論特論、管理会計論特論で勉強する内容もまた、会計学原理特論での勉強に役立つはずである。また、租税論特論は主に税務を扱うものであるが、会計に関する知識を有していることを前提に進められるので、本授業での学習は必要である。

[担当教員へのアクセス]

研究室:3号館2階 3218号室

[オフィスアワー]

時間帯:随時受け付ける。

場所:3号館2階 3218号室

管理会計論特論 A (Advanced Management Accounting A)

担当者	准教授 田村 真介
[単位・開講期] 2 単位・前期	
[授業概要] 伝統的管理会計の理論と技術を系統的に再確認し、管理会計上の新しい諸問題に挑戦するための手掛かりを身につけていただくべく授業を進めようと考えている。また管理会計における基礎的トピックスから応用的トピックスにわたる事項も随時授業に組み込んでゆこうと考えている。	
[到達目標] 経営管理および管理会計分野の修士論文の作成を志す学生諸君に役立つ知識を身につけるとともに、税理士、公認会計士等の会計専門職の資格をねらう学生諸君の計算能力の向上に資することを目標としている。	
<授業の方法>	
[授業形態]	
[対面形式] 教科書、授業計画の各テーマのレポート、およびテーマに関連する学術論文等をもとに授業を進めていく。	
[授業計画]	
(1) ガイダンスおよび管理会計の基礎[対面]	
(2) 管理会計総説[対面]	
(3) 管理会計の体系—過去と現在[対面]	
(4) 企業倫理と管理会計担当者の倫理的行動規範[対面]	
(5) 問題発見のための会計[対面]	
(6) 財務諸表分析—総説[対面]	
(7) 財務諸表分析—収益性・安全性・生産性分析[対面]	
(8) キャッシュフローの分析—総説[対面]	
(9) キャッシュフロー計算書の目的と構成[対面]	
(10) キャッシュフロー計算書の作成[対面]	
(11) 会社法と財務諸表分析[対面]	
(12) 短期利益計画のためのCVP分析[対面]	
(13) CVP分析の必要性[対面]	
(14) CVP分析の基本公式[対面]	
(15) 固定費と経営リスク[対面]	
[アクティブラーニングの取り入れ状況] アクティブラーニングは実施しない。	
[課題に対するフィードバック方法] フィードバックとしてレポートにコメントを返す。	
[教科書・参考書等] 教科書：岡本清・廣本敏郎・尾畑裕・挽文字子著『管理会計(第2版)』中央経済社 参考書：岡本清著『原価計算』国元書房	
[評価方法]	
(1) 試験・テストについて 実施しない。	
(2) 試験以外の評価方法 レポート、ディスカッション。	

(3)成績の配分・評価基準等

レポートと授業中のディスカッションを総合的に判断して評価する。

(レポート70%、ディスカッション30%)

[準備学習]

事前学習:事前に課題を提示し、その課題に対する自分なりの考えを纏めてもらい、

授業時にその結果をレポートとして提示してもらう。(120分)

事後学習:レポートの不足な点を補う。また、テーマに関連する学術論文等を読了する。(120分)

[科目の位置づけと他科目との関連]

本授業は、経営管理、財務管理、財務会計等の知識を基礎としているので、経営管理論特論、会計学原理特論等の授業をあわせて履修することが望ましい。

[担当教員へのアクセス]

研究室:3号館1階3108号室

[オフィスアワー]

時間帯:月曜日13:30~15:00

場所:3号館1階3108号室

管理会計論特論 B (Advanced Management Accounting B)

担当者	准教授 田村 真介
[単位・開講期] 2 単位・後期	
[授業概要] 伝統的管理会計の理論と技術を系統的に再確認し、管理会計上の新しい諸問題に挑戦するための手掛かりを身につけていただくべく授業を進めようと考えている。また管理会計における基礎的トピックスから応用的トピックスにわたる事項も随時授業に組み込んでゆこうと考えている。	
[到達目標] 経営管理および管理会計分野の修士論文の作成を志す学生諸君に役立つ知識を身につけるとともに、税理士、公認会計士等の会計専門職の資格をねらう学生諸君の計算能力の向上に資することを目標としている。	
<授業の方法>	
[授業形態]	
[対面形式] 教科書、授業計画の各テーマのレポート、およびテーマに関連する学術論文等をもとに授業を進めていく。	
[授業計画]	
(1) ガイダンスおよび企業予算[対面] (2) 予算管理システムのプロセス[対面] (3) 予算管理システムの役割[対面] (4) 予算システムの体系[対面] (5) 予算編成と予算統制[対面] (6) 企業予算の動向と留意点[対面] (7) 会社法と企業予算[対面] (8) 事業部の業績測定[対面] (9) 事業部の振替価格[対面] (10) 事業部の業績尺度[対面] (11) 経営意思決定会計—総説[対面] (12) 経営意思決定と差額原価収益分析[対面] (13) 業務的意思決定[対面] (14) 設備投資の意思決定[対面] (15) 経営戦略と管理会計[対面]	
[アクティブラーニングの取り入れ状況] アクティブラーニングは実施しない。	
[課題に対するフィードバック方法] フィードバックとしてレポートにコメントを返す。	
[教科書・参考書等] 教科書：岡本清・廣本敏郎・尾畑裕・挽文字子著『管理会計(第2版)』中央経済社 参考書：岡本清著『原価計算』国元書房	
[評価方法]	
(1) 試験・テストについて 実施しない。	
(2) 試験以外の評価方法 レポート、ディスカッション。	

(3)成績の配分・評価基準等

レポートと授業中のディスカッションを総合的に判断して評価する。

(レポート70%、ディスカッション30%)

[準備学習]

事前学習:事前に課題を提示し、その課題に対する自分なりの考えを纏めてもらい、

授業時にその結果をレポートとして提示してもらう。(120分)

事後学習:レポートの不足な点を補う。また、テーマに関連する学術論文等を読了する。(120分)

[科目の位置づけと他科目との関連]

本授業は、経営管理、財務管理、財務会計等の知識を基礎としているので、経営管理論特論、会計学原理特論等の授業をあわせて履修することが望ましい。

[担当教員へのアクセス]

研究室:3号館1階3108号室

[オフィスアワー]

時間帯:月曜日 13:30~15:00

場所:3号館1階3108号室

簿記論特論 A (Advanced Book-keeping Theory A)

担当者	教授 関根 慎吾
[単位・開講期] 2 単位・前期	
[授業概要] 一連の会計規制の改革で、簿記会計の世界は大きく様変わりしている。本授業ではこのような簿記会計を取り巻く環境の変化のなかで、特に資産に関する簿記に係る諸問題を検討していく。とはいえ、簿記と会計は密接に関連しており、厳密に分けることは困難になっている。したがって授業では簿記の諸問題に限らず、会計の諸問題にも検討を加えていくことになる。 また、コンピュータと簿記会計のかかわりについても検討する予定である。	
[到達目標] 高度な簿記の諸問題について、その処理方法のみならず、その考え方についても理解を深め、類似する他の諸問題への対処方法を身につける。	
<授業の方法>	
[授業形態]	
[対面形式] 授業内容の説明と報告による質疑応答。	
[授業計画]	
(1) [対面] ガイダンス:財務諸表の体系	
(2) [対面] 簿記一巡の手続き	
(3) [対面] 現金預金	
(4) [対面] 有価証券	
(5) [対面] デリバティブとヘッジ会計	
(6) [対面] キャッシュフロー計算書	
(7) [対面] 商品売買(1)―販売基準	
(8) [対面] 商品売買(2)―回収基準	
(9) [対面] 商品売買(2)―生産基準	
(10) [対面] 売上債権	
(11) [対面] 棚卸資産	
(12) [対面] 有形固定資産(1)―減価償却	
(13) [対面] 有形固定資産(2)―減損	
(14) [対面] リース会計	
(15) [対面] 無形固定資産	
[アクティブラーニングの取り入れ状況] 報告と質疑応答。	
[課題に対するフィードバック方法] 質疑応答によるフィードバック。	
[教科書・参考書等] 教科書:桜井久勝著『財務会計講義』、中央経済社、4290 円 参考書:随時指示する。	
[評価方法] (1)試験・テストについて 行わない。 (2)試験以外の評価方法	

報告に関する質疑の内容。

(3)成績の配分・評価基準等

日頃のレポートや各種の演習課題の成績によって、総合的に評価する。

[準備学習]

事前学習:報告準備のための文献調査。(120分)

事後学習:報告した内容の精査。(120分)

[授業以外の学習方法]

受講生には分担してテキストの内容を報告してもらおうが、報告者のみならず全ての受講者が報告者のつもりで、授業に望んでもらいたい。そのためには、テキストの予習および復習ならびに授業中にでたトピックスについての検討を行い、次回の授業で発表してもらいたい。また、テキストとは別に、簿記の諸問題について勉強しておくことを望む。

[科目の位置づけと他科目との関連]

簿記は会計の諸科目と密接な関連があることから、会計学特論、管理会計論特論で勉強する内容もまた、簿記論特論での勉強に役立つはずである。また、租税論特論は主に税務を扱うものであるが、簿記に関する知識を有していることを前提に進められるので、本授業での学習は必要である。

[担当教員へのアクセス]

研究室:3号館2階 3218号室

[オフィスアワー]

時間帯:随時受け付ける。

場所:3号館2階 3218号室

簿記論特論 B (Advanced Book-keeping Theory B)

担当者	教授 関根 慎吾
[単位・開講期] 2 単位・後期	
[授業概要] 一連の会計規制の改革で、簿記会計の世界は大きく様変わりしている。本授業ではこのような簿記会計を取り巻く環境の変化のなかで、特に負債並びに純資産に関する簿記に係る諸問題を検討していく。とはいえ、簿記と会計は密接に関連しており、厳密に分けることは困難になっている。したがって授業では簿記の諸問題に限らず、会計の諸問題にも検討を加えていくことになる。 また、コンピュータと簿記会計のかかわりについても検討する予定である。	
[到達目標] 高度な簿記の諸問題について、その処理方法のみならず、その考え方についても理解を深め、類似する他の諸問題への対処方法を身につける。	
<授業の方法>	
[授業形態]	
[対面形式] 授業内容の説明と報告による質疑応答。	
[授業計画]	
(1) [対面] ガイダンス:財務諸表の体系	
(2) [対面] 引当金	
(3) [対面] 税効果会計	
(4) [対面] 流動負債	
(5) [対面] 長期借入金	
(6) [対面] 退職給付引当金	
(7) [対面] 資産除去債務	
(8) [対面] 簿記論総合演習(1)－負債の簿記処理の論点整理	
(9) [対面] 純資産	
(10) [対面] スtock・オプション	
(11) [対面] 自己株式	
(12) [対面] 組織再編(1)－会社の結合	
(13) [対面] 組織再編(2)－会社の分割	
(14) [対面] 簿記論総合演習(2)－純資産の簿記処理の論点整理	
(15) [対面] まとめ	
[アクティブラーニングの取り入れ状況] 報告と質疑応答。	
[課題に対するフィードバック方法] 質疑応答によるフィードバック。	
[教科書・参考書等] 教科書:桜井久勝著『財務会計講義』、中央経済社、4290 円 参考書:随時指示する。	
[評価方法]	
(1)試験・テストについて 行わない。	
(2)試験以外の評価方法	

報告に関する質疑の内容。

(3)成績の配分・評価基準等

日頃のレポートや各種の演習課題の成績によって、総合的に評価する。

[準備学習]

事前学習:報告準備のための文献調査。(120分)

事後学習:報告した内容の精査。(120分)

[授業以外の学習方法]

受講生には分担してテキストの内容を報告してもらおうが、報告者のみならず全ての受講者が報告者のつもりで、授業に望んでもらいたい。そのためには、テキストの予習および復習ならびに授業中にでたトピックスについての検討を行い、次回の授業で発表してもらいたい。また、テキストとは別に、簿記の諸問題について勉強しておくことを望む。

[科目の位置づけと他科目との関連]

簿記は会計の諸科目と密接な関連があることから、会計学特論、管理会計論特論で勉強する内容もまた、簿記論特論での勉強に役立つはずである。また、租税論特論は主に税務を扱うものであるが、簿記に関する知識を有していることを前提に進められるので、本授業での学習は必要である。

[担当教員へのアクセス]

研究室:3号館2階 3218号室

[オフィスアワー]

時間帯:月曜日 4限目

場所:3号館2階 3218号室

租税法特論 A (Advanced Tax Law A)

担当者	教授 岡野 知子
[単位・開講期] 2 単位・前期	
[授業概要] ① 租税法の意義と性質の理解 ② 租税法の基本原則である租税法律主義、租税公平主義の内容の理解 ③ 租税実体法の課税要件の理解 ④ 租税判例研究 以上の 4 項目について下記の授業計画に従い修得する。	
[到達目標] 社会における租税の意義とその重要性を理解したうえで、理論と制度の両面から租税法を修得する	
<授業の方法>	
[授業形態] 【対面形式】 授業計画に沿った内容の説明と質疑応答。	
[授業計画] (1) 租税の意義 [対面] (2) 租税の根拠 [対面] (3) 租税法の意義 [対面] (4) 租税制度の沿革 [対面] (5) 租税法の基本原則 ① (租税法律主義) [対面] (6) 租税法の基本原則 ② (租税公平主義) [対面] (7) 租税法の基本原則 ③ (自主財政主義) [対面] (8) 租税法の法源 [対面] (9) 租税法の解釈と適用 [対面] (10) 租税実体法の意義 [対面] (11) 租税要件総論 (納税義務者) [対面] (12) 租税法の基本原則 (課税物件) [対面] (13) 租税法の基本原則 (課税標準と税率) [対面] (14) 課税要件各論① (総説) [対面] (15) 課税要件各論② (総説) [対面] *各授業では、事前学習 (授業のテーマに沿ったレジュメの作成および資料収集) 後、授業でディスカッションをおこない、事後学習 (授業で習得した内容の復習) をおこなうこと。	
[アクティブラーニングの取り入れ状況] 授業でレジュメ等をもとにディスカッションを行う。	
[課題に対するフィードバック方法] ディスカッション後の提出レポートにコメントを付し返却する。	
[教科書・参考書等] 教科書:金子 宏著 『租税法』第 23 版 弘文堂 6,500 円+税 参考書:適宜紹介する。	
[評価方法] (1) 試験・テストについて	

実施しない。

(2) 試験以外の評価方法

レジュメ、報告内容、ディスカッション内容・参加度による評価方法。

(3) 成績の配分・評価基準等

レジュメ、報告、ディスカッションにより総合的に評価する。

[準備学習]

事前学習: 授業のテーマに沿ったレジュメの作成および資料収集。(120分)

事後学習: 授業で習得した内容の復習。(120分)

[授業以外の学習方法]

・雑誌掲載論文、書籍、新聞等の資料収集

・レジュメおよび論文の作成方法の習得、Power Pointによる報告内容の作成およびプレゼンテーションの練習
ディスカッションへの活発な参加

[科目の位置づけと他科目との関連]

会計科目、民法、会社法と密接な関係があるので、併せて受講または研究してほしい。

[担当教員へのアクセス]

研究室: 3号館 2階 3209号室

[オフィスアワー]

時間帯: 授業終了後または昼休み

場所: 研究室(3号館 2階 3209号室)

[備考]

質問はメールにでも受け付ける。

租税法特論 B (Advanced Tax Law B)

担当者	教授 岡野 知子
[単位・開講期] 2 単位・後期	
[授業概要] ⑤ 租税法の意義と性質の理解 ⑥ 租税法の基本原則である租税法律主義、租税公平主義の内容の理解 ⑦ 租税実体法の課税要件の理解 ⑧ 租税判例研究 以上の 4 項目について下記の授業計画に従い修得する。	
[到達目標] 社会における租税の意義とその重要性を理解したうえで、理論と制度の両面から租税法を修得する	
<授業の方法>	
[授業形態] 【対面形式】 授業計画に沿った内容の説明と質疑応答。	
[授業計画] (1) 所得税総説 [対面] (2) 所得税の基本的仕組 [対面] (3) 各種所得の意義と範囲 [対面] (4) 法人税総説 [対面] (5) 法人所得の意義と計算 [対面] (6) 法人組織税制 [対面] (7) 国際取引と所得課税 [対面] (8) 相続税および贈与税総説① [対面] (9) 相続税および贈与税総説② [対面] (10) 財産評価 [対面] (11) 事業承継税制 [対面] (12) 消費税総説 [対面] (13) 消費税の基本的仕組 [対面] (14) 判例研究① [対面] (15) 判例研究② [対面]	
*各授業では、事前学習（授業のテーマに沿ったレジュメの作成および資料収集）後、授業でディスカッションをおこない、事後学習（授業で習得した内容の復習）をおこなうこと。	
[アクティブラーニングの取り入れ状況] 授業でレジュメ等をもとにディスカッションを行う。	
[課題に対するフィードバック方法] ディスカッション後の提出レポートにコメントを付し返却する。	
[教科書・参考書等] 教科書：金子 宏著 『租税法』第 23 版 弘文堂 6,500 円+税 参考書：適宜紹介する。	
[評価方法]	

- (1)試験・テストについて
実施しない。
- (2)試験以外の評価方法
レジュメ、報告内容、ディスカッション内容・参加度による評価方法。
- (3)成績の配分・評価基準等
レジュメ、報告、ディスカッションにより総合的に評価する。

[準備学習]

事前学習:授業のテーマに沿ったレジュメの作成および資料収集。(120分)

事後学習:授業で習得した内容の復習。(120分)

[授業以外の学習方法]

- ・雑誌掲載論文、書籍、新聞等の資料収集
- ・レジュメおよび論文の作成方法の習得、Power Pointによる報告内容の作成およびプレゼンテーションの練習
- ディスカッションへの活発な参加

[科目の位置づけと他科目との関連]

会計科目、民法、会社法と密接な関係があるので、併せて受講または研究してほしい。

[担当教員へのアクセス]

研究室:3号館2階3209号室

[オフィスアワー]

時間帯:授業終了後または昼休み

場所:研究室(3号館2階3209号室)

[備考]

質問はメールにでも受け付ける。

会計学演習 (Seminar in Accounting)

担当者	専任教員
<p>[単位・開講期] 8 単位 (2 年間)</p> <p>[授業概要] 「会計学演習」では、「会計学」という専攻分野の枠内で、それぞれの演習担当教員が担当する授業科目と結びつく研究分野を中心としながらも限定されることなく、各担当教員の実際の研究領域に関連するテーマについて、修士論文作成のための研究指導を行う。学生には、志望する演習担当教員との面談機会を提供し、各教員の担当する授業科目を参考にしながら、自分の関心に対応する指導が受けられる教員を、指導教員として選べるような機会を提供する。 各々のテーマを設定した学生は、演習担当教員の指導のもと、文献の講読、資料の収集、調査分析等を行い、適当な時期に発表・討論しながら、さらにその研究を深めていき、最終的には修士論文の作成へと繋げる。</p> <p>[到達目標] 会計学は会計という実務を研究対象とする学問である。したがって、会計の諸問題について、その処理方法自体の理解に努めることは当然のことである。しかしながら、個々の処理方法を理解するだけでは会計行為全体を整合的に理解したとは言えないし、そのようにして作成された財務諸表やその他の会計情報が有用であるとは言えない。有用な会計情報を作成するという観点から、各々の処理方法が持つ意味やその目的を、会計目的観や基礎的な考え方を踏まえて理解することが重要になってくるのである。本授業では、会計の基礎的概念に基づいて会計諸問題を理解することを目標としている。</p> <p><授業の方法></p> <p>[授業形態] 【対面形式】【非対面形式】指導教員の指示に基づく演習。</p> <p>[授業計画] 論文テーマの選定と論文作成のための質疑応答を毎回行う。</p> <p>[アクティブラーニングの取り入れ状況] 報告とその質疑応答。</p> <p>[課題に対するフィードバック方法] 質疑応答によるフィードバック。</p> <p>[教科書・参考書等] 別途指示する。</p> <p>[評価方法] (1) 試験・テストについて 行わない。 (2) 試験以外の評価方法 報告に関する質疑の内容。 (3) 成績の配分・評価基準等 発表・討論等の状況を総合的に評価する。</p> <p>[準備学習] 事前学習: 論文テーマに関する文献調査、報告準備。(120 分) 事後学習: 報告した内容の精査。(120 分)</p>	

[授業以外の学習方法]

近年、会計を取り巻く環境は大きく変わりつつある。特に IFRS による会計の国際的統合化の過程にあって、国内の会計制度も再構築を迫られている。この過程で導入されてくる新しい会計処理について、基本的な理解が授業の中で求められることになる。専門誌などでこれらの動向については把握しておく必要がある。

[科目の位置づけと他科目との関連]

会計関連の諸科目で学習した内容や会計観をどのように理解したかが、修士論文の作成過程で試されることになる。また、その他の科目でも経営学や金融論などに関する知識も、会計諸問題を理解する上で必要となりうる。

[担当教員へのアクセス]

研究室：指導教員の指示に基づく。

[オフィスアワー]

時間帯：指導教員の指示に基づく。

場所：指導教員の指示に基づく。

[備考]

本授業についての質問等は、各担当教員に直接問い合わせること。

経営情報論特論 A (Advanced Business Information Theory A)

担当者	教授 佐々木 万亀夫
[単位・開講期] 2 単位・前期	
[授業概要] 本講義は、企業経営の視点から経営情報の戦略的価値を正しく理解できる能力を養成することを目的とする。講義では、戦略経営論における企業情報システムの沿革、経営システムに及ぼす経営情報の影響、最新の経営情報活用の現状と将来の展望について学習する。	
[到達目標] 企業経営における経営情報の役割とその重要性を理解し、最新の経営情報活用の現状と課題を把握することを目標とする。	
<授業の方法>	
[授業形態]	
[対面形式] 文献講読、ディスカッションが中心の「授業・演習」形式である。	
[授業計画]	
(1) ガイダンス [対面]	
(2) マネジャーの仕事 [対面]	
(3) マネジャーの仕事についてディスカッション [対面]	
(4) AI を業務改善に活かす法 [対面]	
(5) AI を業務改善に活かす法についてのディスカッション [対面]	
(6) アルゴリズムを最大限に活用する法 [対面]	
(7) アルゴリズムを最大限に活用する法についてのディスカッション [対面]	
(8) AR 戦略: 拡張現実の並外れた可能性 [対面]	
(9) AR 戦略: 拡張現実の並外れた可能性についてのディスカッション [対面]	
(10) ブロックチェーンと企業戦略 [対面]	
(11) ブロックチェーンと企業戦略についてのディスカッション [対面]	
(12) バーチャル・ファクトリーを機能させる条件 [対面]	
(13) バーチャル・ファクトリーを機能させる条件についてのディスカッション [対面]	
(14) インターネット時代の製品開発 [対面]	
(15) インターネット時代の製品開発についてのディスカッション [対面]	
[アクティブラーニングの取り入れ状況] ディスカッションを行う。	
[課題に対するフィードバック方法] 授業中に適宜フィードバックをする。	
[教科書・参考書等] 教科書: 前期及び後期のガイダンスで適宜指示する。 参考書: 適宜指示する。	
[評価方法]	
(1) 試験・テストについて 実施しない。	
(2) 試験以外の評価方法 課題レポートの採点、ディスカッションへの取組み状況を評価する	

(3)成績の配分・評価基準等

課題レポートの採点(50%)、授業への取組み状況(50%)。

[準備学習]

教科書の予習および復習が必要である。

事前学習:教科書の予習、課題レポートの作成(180分)

事後学習:理解が出来なかった事項の復習(60分)

[科目の位置づけと他科目との関連]

学部および大学院の経営情報、経営情報システム、経営戦略などの科目と関連があるので、履修しておくことが望ましい。

[担当教員へのアクセス]

研究室:3号館1階3120号室

メールアドレス:msasaki@isenshu-u.ac.jp

[オフィスアワー]

時間帯:随時

場所:3号館1階3120号室

[備考]

特になし。

経営情報論特論 B (Advanced Business Information Theory B)

担当者	教授 佐々木 万亀夫
[単位・開講期] 2 単位・後期	
[授業概要] 本講義は、企業経営の視点から経営情報の戦略的価値を正しく理解できる能力を養成することを目的とする。講義では、戦略経営論における企業情報システムの沿革、経営システムに及ぼす経営情報の影響、最新の経営情報活用の現状と将来の展望について学習する。	
[到達目標] 企業経営における経営情報の役割とその重要性を理解し、最新の経営情報活用の現状と課題を把握することを目標とする。	
<授業の方法>	
[授業形態]	
[対面形式] 文献講読、ディスカッションが中心の「授業・演習」形式である。	
[授業計画]	
(1) ガイダンス [対面] (2) 企業活動と経営情報 [対面] (3) 企業情報システム発展史 [対面] (4) 情報の戦略的活用 [対面] (5) 競争戦略と経営情報 [対面] (6) ビジネスプロセスと経営情報 [対面] (7) サプライチェーンマネジメント(SCM) [対面] (8) 統合基幹業務システム(ERP) [対面] (9) 情報システム投資の効果 [対面] (10) 情報システム投資と競争優位 [対面] (11) 事業と ICT の整合 [対面] (12) Web サービスの活用 [対面] (13) 企業経営と人工知能(AI) [対面] (14) 企業経営と IoT [対面] (15) 授業全体のとりまとめ [対面]	
[アクティブラーニングの取り入れ状況] ディスカッションを行う。	
[課題に対するフィードバック方法] 授業中に適宜フィードバックをする。	
[教科書・参考書等] 教科書：前期及び後期のガイダンスで適宜指示する。 参考書：適宜指示する。	
[評価方法]	
(1) 試験・テストについて 実施しない。	
(2) 試験以外の評価方法 課題レポートの採点、ディスカッションへの取り組み状況を評価する	

(3)成績の配分・評価基準等

課題レポートの採点(50%)、授業への取組み状況(50%)。

[準備学習]

教科書の予習および復習が必要である。

事前学習:教科書の予習、課題レポートの作成(180分)

事後学習:理解が出来なかった事項の復習(60分)

[科目の位置づけと他科目との関連]

学部および大学院の経営情報、経営情報システム、経営戦略などの科目と関連があるので、履修しておくことが望ましい。

[担当教員へのアクセス]

研究室:3号館1階3120号室

メールアドレス:msasaki@isenshu-u.ac.jp

[オフィスアワー]

時間帯:随時

場所:3号館1階3120号室

[備考]

特になし。

経営統計学特論 A (Advanced Business Statistics A)

担当者	教授 岩浅 巧
<p>[単位・開講期] 2 単位・前期</p> <p>[授業概要] 本授業は、経営研究・実務におけるデータ分析の基礎として、データ収集（サンプリング）と記述統計の考え方を体系的に学ぶ科目である。度数分布と可視化、中心傾向、散布度、相関、単回帰分析を中心に、分析結果を「経営の言葉」で適切に解釈し、説明する能力を養う。あわせて、データの偏りや限界を批判的に検討し、分析結果を根拠に基づいて報告するための基礎を身につける。後続の特論 B で扱う推測統計・多変量分析の前提となる概念と技能を固める。</p> <p>[到達目標] ・経営データの種類（尺度・分布・欠測等）を理解し、課題に応じて適切な記述統計手法を選択できる。 ・サンプリングとデータ収集の基本を理解し、偏りや誤差の観点からデータの代表性と限界を説明できる。 ・相関・単回帰の結果を読み解き、相関と因果を区別しつつ、分析上の前提と限界を踏まえて実務上の示唆を論理的に文章化できる。</p> <p><授業の方法></p> <p>[授業形態] 【対面形式】 対面形式の授業を行う。</p> <p>[授業計画] (1) ガイダンス: 統計の役割、データと尺度、分析の基本手順 (2) データサンプリング(1): 母集団・標本、抽出の考え方 (3) データサンプリング(2): 代表性、標本誤差、バイアス (4) データサンプリング(3): 調査設計、欠測・外れ値の基礎 (5) 度数分布とグラフ(1): 度数分布表、ヒストグラム等 (6) 度数分布とグラフ(2): 要約と可視化による探索 (EDA) (7) 中心傾向の指標(1): 平均・中央値・最頻値 (8) 中心傾向の指標(2): 分位点、ロバスト性、歪度の直観 (9) 中心傾向の指標(3): 箱ひげ図、外れ値と要約の関係 (10) 散布度の指標(1): 範囲、四分位範囲、分散の導入 (11) 散布度の指標(2): 標準偏差、変動係数、標準化 (z) (12) 散布度の指標(3): 外れ値への対応と報告上の留意点 (13) 相関: 共分散・相関係数、相関と因果の混同、疑似相関 (14) 回帰(1): 単回帰モデル、推定と解釈 (傾き・切片) (15) 回帰(2): 予測と限界、因果解釈の留意点、分析結果の文章化・まとめ</p> <p>[アクティブラーニングの取り入れ状況] 演習課題、分析結果の討議、事例に基づく検討を通じて、アクティブラーニングを実施する。</p> <p>[課題に対するフィードバック方法] 課題提出後に解説を行う。</p> <p>[教科書・参考書等] 教科書: 使用しない。 参考書: 参考書籍や参考論文については、適宜講義中に紹介する。</p> <p>[評価方法] (1) 試験・テストについて 実施しない。 (2) 試験以外の評価方法</p>	

講義内での発表と事前課題、討論への参加等。

(3)成績の配分・評価基準等

講義内での発表と事前課題(60%)、討論への参加状況(40%)等を総合的に評価する。

[準備学習]

事前学習:予習として指定書籍や指定論文の該当箇所について事前読了を求め、かつレジュメにまとめて講義時に発表してもらうことがある。各回の予習には90分~120分かかると想定される。

事後学習:復習として、指定書籍や指定論文の該当箇所を再読し、必要に応じてレジュメにまとめることを求めることがある。各回の復習には90分~120分かかると想定される。

[科目の位置づけと他科目との関連]

統計学やプログラミングの基本的な考え方については、学部時代に習得できていることを前提とする。

[担当教員へのアクセス]

研究室:3号館2階 3214号室

[オフィスアワー]

時間帯:随時。授業終了後でも可。

場所:研究室3号館2階 3214号室

[備考]

講義内容に関する質問は、随時受け付ける。

経営統計学特論 B (Advanced Business Statistics B)

担当者	教授 岩浅 巧
[単位・開講期] 2 単位・後期	
[授業概要] 本授業は、特論 A で学んだ記述統計・相関・回帰の基礎を前提に、推測統計(推定・検定)および経営研究で頻用される多変量分析の初歩を学ぶ科目である。平均差の検定、分散分析、カテゴリデータ分析、重回帰、ロジスティック回帰、モデル診断、報告の作法を扱い、データに基づく意思決定および研究報告の質を高める。あわせて、統計的有意性のみならず、効果量、前提条件、頑健性、再現可能性に配慮しながら分析結果を解釈・報告する力を養う。	
[到達目標] ・推定・検定の枠組み(仮説、p 値、信頼区間、効果量)を理解し、結果を適切に解釈できる。 ・研究課題に応じて手法(t 検定、ANOVA、カイニ乗検定、重回帰、ロジスティック回帰等)を選択し、その前提条件と限界を説明できる。 ・分析結果を再現可能な形で整理し、経営上・学術上の示唆として論理的に記述できる。	
<授業の方法>	
[授業形態] 【対面形式】 対面形式の授業を行う。	
[授業計画] (1) ガイダンス:A の復習、推測統計の位置づけ (2) 確率と分布(1): 確率の基礎、二項分布・ポアソン分布 (3) 確率と分布(2): 正規分布と標準化、中心極限定理の直観 (4) 推定: 点推定と信頼区間(平均・比率の基本) (5) 検定の考え方: 帰無仮説、p 値、第一種・第二種の誤り、効果量 (6) 平均の検定(1): 1 標本・対応あり t 検定 (7) 平均の検定(2): 2 標本 + 検定、等分散性、ノンパラメトリック手法の導入 (8) カテゴリデータ: カイニ乗検定、クロス表の解釈 (9) 分散分析: 一元配置 ANOVA、多重比較の考え方 (10) 相関・回帰の再整理: 相関と因果、交絡の視点 (11) 重回帰(1): モデル化、回帰係数の解釈、決定係数 (12) 重回帰(2): 多重共線性、ダミー変数、交互作用(導入) (13) モデル診断: 残差、外れ値、頑健性、報告上の注意 (14) ロジスティック回帰: 二値アウトカムの分析と解釈(オッズ比) (15) 総合演習: 研究・実務テーマに基づく分析計画、結果の解釈、限界、再現可能な報告の作成(まとめ)	
[アクティブラーニングの取り入れ状況] 演習課題、分析結果の討議、事例に基づく検討を通じて、アクティブラーニングを実施する。	
[課題に対するフィードバック方法] 課題提出後に解説を行う。	
[教科書・参考書等] 教科書: 使用しない。 参考書: 参考書籍や参考論文については、適宜講義中に紹介する。	
[評価方法] (1) 試験・テストについて 実施しない。 (2) 試験以外の評価方法	

講義内での発表と事前課題、討論への参加等。

(3)成績の配分・評価基準等

講義内での発表と事前課題(60%)、討論への参加状況(40%)等を総合的に評価する。

[準備学習]

事前学習:予習として指定書籍や指定論文の該当箇所について事前読了を求め、かつレジュメにまとめて講義時に発表してもらうことがある。各回の予習には90分~120分かかると想定される。

事後学習:復習として、指定書籍や指定論文の該当箇所を再読し、必要に応じてレジュメにまとめることを求めることがある。各回の復習には90分~120分かかると想定される。

[科目の位置づけと他科目との関連]

統計学やプログラミングの基本的な考え方については、学部時代に習得できていることを前提とする。

[担当教員へのアクセス]

研究室:3号館2階 3214号室

[オフィスアワー]

時間帯:随時。授業終了後でも可。

場所:研究室3号館2階 3214号室

[備考]

講義内容に関する質問は、随時受け付ける。

情報経済学特論 A (Information Economics A)

担当者	准教授 稲葉 健太郎
[単位・開講期] 2 単位・前期	
[授業概要] 本講義では、情報の非対称性が企業活動や組織運営に及ぼす影響を理解することを目的とする。逆選択、シグナリング、モラルハザード、プリンシパル=エージェント理論といった主要理論の基本構造を学び、それらが採用、評価、報酬制度、情報共有などの経営現象にどのように関係するかを考察する。理論理解を基礎として、経営研究への応用的視点を養う。	
[到達目標] ① 情報の非対称性、不確実性、インセンティブといった情報経済学の主要概念および基本理論の構造を説明できる。 ② 逆選択、シグナリング、モラルハザード、プリンシパル=エージェント理論を用いて、採用、評価、報酬制度、情報共有などの経営現象を理論的に解釈できる。 ③ 情報問題が組織行動や人的資源管理、企業戦略に与える影響について、既存研究を踏まえて論理的に考察できる。 ④ 情報経済学の理論的視点を活用し、自身の研究関心に関連する課題設定や簡潔な研究計画の基礎的構想を示すことができる。	
<授業の方法>	
[授業形態] 【対面形式】	
[授業計画(前期)] (1) 情報経済学の基本視点と経営研究との関係 (2) 不確実性と意思決定(期待効用の直観) (3) 情報の価値と情報取得 (4) 情報の非対称性の基本構造 (5) 逆選択の理論(レモン市場モデル) (6) 逆選択の応用(労働市場・ブランド・採用) (7) シグナリング理論の基本構造 (8) 教育・資格・評判のシグナリング機能 (9) モラルハザードの基本理論 (10) 努力誘因と成果評価 (11) プリンシパル=エージェント理論の基礎 (12) インセンティブ契約の設計 (13) 組織における情報共有と統制 (14) 理論統合ディスカッション (15) 前期まとめ	
[アクティブラーニングの取り入れ状況] ディスカッション、ケース分析、ミニレポート作成および研究課題の検討などをアクティブラーニングとして取り入れる。	
[課題に対するフィードバック方法] 提出課題については講評コメントを付して返却するとともに、授業内で全体講評を行う。必要に応じて個別に口頭または書面により助言を行う。	
[教科書・参考書等] 授業時に指示をする。	

[評価方法]

(1)試験・テストについて

試験は行わない

(2)試験以外の評価方法

テキストの報告内容で評価する

(3)成績の配分・評価基準等

授業への参加状況およびディスカッションへの貢献(40%),文献講読・ミニレポート等の課題提出(30%),
期末レポート(理論の理解と研究的応用の考察)(40%)

[準備学習]

事前学習:指定文献の精読、及び理論の要点整理と論点整理(120分)

事後学習:講義内容を復習し理論の応用視点を整理(120分)

[科目の位置づけと他科目との関連]

経営管理論や経営組織論等と関連し、研究課題の理論的基盤を提供する。

[担当教員へのアクセス]

研究室:授業時に伝える。

[オフィスアワー]

時間帯:相談や質問には適宜応じる。

場所:3号館1階3111号室

[備考]

相談や質問には適宜応じる。

情報経済学特論 B (Information Economics B)

担当者	准教授 稲葉 健太郎
[単位・開講期] 2 単位・前期	
[授業概要] 本講義では、情報の非対称性が企業活動や組織運営に及ぼす影響を理解することを目的とする。逆選択、シグナリング、モラルハザード、プリンシパル=エージェント理論といった主要理論の基本構造を学び、それらが採用、評価、報酬制度、情報共有などの経営現象にどのように関係するかを考察する。理論理解を基礎として、経営研究への応用的視点を養う。	
[到達目標] ① 情報の非対称性、不確実性、インセンティブといった情報経済学の主要概念および基本理論の構造を説明できる。 ② 逆選択、シグナリング、モラルハザード、プリンシパル=エージェント理論を用いて、採用、評価、報酬制度、情報共有などの経営現象を理論的に解釈できる。 ③ 情報問題が組織行動や人的資源管理、企業戦略に与える影響について、既存研究を踏まえて論理的に考察できる。 ④ 情報経済学の理論的視点を活用し、自身の研究関心に関連する課題設定や簡潔な研究計画の基礎的構想を示すことができる。	
<授業の方法>	
[授業形態] 【対面形式】	
[授業計画(前期)] (1) プリンシパル=エージェント理論の発展 (2) チーム生産と組織インセンティブ (3) 相対業績評価と人事制度 (4) 権限委譲と組織設計 (5) 情報と企業戦略(評判・信頼・長期関係) (6) 情報開示とコーポレートガバナンス (7) 情報問題と人的資源管理研究 (8) 情報共有と組織行動(心理的安全性など) (9) ケース分析(企業組織の情報問題) (10) 研究論文講読①(基礎理論論文) (11) 研究論文講読②(組織経済学論文) (12) 研究テーマ構築ワーク (13) 研究計画発表① (14) 研究計画発表② (15) 総括	
[アクティブラーニングの取り入れ状況] ディスカッション、ケース分析、研究計画の検討などをアクティブラーニングとして取り入れる。	
[課題に対するフィードバック方法] 提出課題については講評コメントを付して返却するとともに、授業内で全体講評を行う。必要に応じて個別に口頭または書面により助言を行う。	
[教科書・参考書等] 授業時に指示をする。	

[評価方法]

(1)試験・テストについて

試験は行わない

(2)試験以外の評価方法

テキストの報告内容で評価する

(3)成績の配分・評価基準等

授業への参加状況およびディスカッションへの貢献(40%),文献講読・研究発表(30%),期末レポート(理論の理解と研究的応用の考察)(40%)

[準備学習]

事前学習:指定文献の精読、及び理論の要点整理と論点整理(120分)

事後学習:講義内容を復習し理論の応用視点を整理(120分)

[科目の位置づけと他科目との関連]

経営管理論や経営組織論等と関連し、研究課題の理論的基盤を提供する。

[担当教員へのアクセス]

研究室:授業時に伝える。

[オフィスアワー]

時間帯:相談や質問には適宜応じる。

場所:3号館1階3111号室

[備考]

相談や質問には適宜応じる。

情報ネットワーク論特論 A (Advanced Internet Programming A)

担当者	教授 佐々木 万亀夫
[単位・開講期] 2 単位・前期	
[授業概要] 情報ネットワークが関わる分野では次のような新しい技術が利用されるようになってきている。 ・ブロックチェーンによる分散型台帳管理システム ・IoTとクラウドによるデータ収集と分析のシステム ・人工知能のアルゴリズムを使用したデータ処理 今後も情報処理分野では新しい技術が登場してくることが予想される。このような技術をすぐに吸収するために必要な基礎の部分について授業や実習を行う。	
[到達目標] ・情報処理の基礎をしっかりと身につけることで最新の技術にも対応できるようになる ・問題を分析しシステムの設計について提案することができるようになる。	
<授業の方法>	
[授業形態]	
【対面形式】 文献講読が中心の「授業・演習」形式である。	
[授業計画] (1) The OSI Security Architecture [対面] (2) A Model for Internet Security [対面] (3) Internet Standards the Internet Society [対面] (4) Internet Web Resources [対面] (5) Symmetric Encryption Principles [対面] (6) Symmetric Block Encryption Algorithms [対面] (7) Cipher Block Modes of Operation [対面] (8) Location of Encryption Devices [対面] (9) Key Distribution [対面] (10) Approaches to Message Authentication [対面] (11) Secure Hash Functions [対面] (12) Public-Key Cryptography Principles [対面] (13) Public-Key Cryptography Algorithms [対面] (14) IP Security Overview [対面] (15) IP Security Architecture [対面]	
[アクティブラーニングの取り入れ状況] ディスカッションを適宜授業中に行う。	
[課題に対するフィードバック方法] 授業中に適宜フィードバックをする。	
[教科書・参考書等] 教科書:William Stallings, “NETWORK SECURITY ESSENTIALS”, Pearson Education, Inc.(2007) 参考書:適宜指示する。	
[評価方法]	

(1)試験・テストについて
実施しない。

(2)試験以外の評価方法
教科書の内容理解等の平常点。

(3)成績の配分・評価基準等

教科書の内容理解等の平常点(100%)で評価する。試験を行わない予定であるが、理解度が低い場合はレポートの提出をしてもらう。

[準備学習]

教科書の予習および復習が必要である。特に、テキストが洋書であるため、予習には多くの時間を割いてもらいたい。

事前学習:教科書の予習(180分)

事後学習:教科書の予習および復習(60分)

[科目の位置づけと他科目との関連]

英語の読解力養成のため、併せて外国語専門文献購読を履修することが望ましい。

[担当教員へのアクセス]

研究室:3号館1階3120号室

メールアドレス:msasaki@isenshu-u.ac.jp

[オフィスアワー]

時間帯:随時

場所:3120研究室

[備考]

特になし。

情報ネットワーク論特論 B (Advanced Internet Programming B)

担当者	教授 佐々木 万亀夫
[単位・開講期] 2 単位・後期	
[授業概要] 情報ネットワークが関わる分野では次のような新しい技術が利用されるようになってきている。 ・ブロックチェーンによる分散型台帳管理システム ・IoTとクラウドによるデータ収集と分析のシステム ・人工知能のアルゴリズムを使用したデータ処理 今後も情報処理分野では新しい技術が登場してくることが予想される。このような技術をすぐに吸収するために必要な基礎の部分について授業や実習を行う。	
[到達目標] ・情報処理の基礎をしっかりと身につけることで最新の技術にも対応できるようになる ・問題を分析しシステムの設計について提案することができるようになる。	
<授業の方法>	
[授業形態]	
【対面形式】 文献講読が中心の「授業・演習」形式である。	
[授業計画] (1) Authentication Header [対面] (2) Encapsulating Security Payload [対面] (3) Combining Security Associations [対面] (4) Web Security Requirements [対面] (5) Secure Sockets Layer(SSL) and Transport Layer Security(TLS) [対面] (6) Secure Electronic Transaction(SET) [対面] (7) Intruders [対面] (8) Intrusion Detection [対面] (9) Password Management [対面] (10) Viruses and Related Threats [対面] (11) Virus Countermeasures [対面] (12) Distributed Denial of Service Attacks [対面] (13) Firewall Design Principles [対面] (14) Trusted Systems [対面] (15) Commo Criteria for Information Technology Security Evaluation [対面]	
[アクティブラーニングの取り入れ状況] ディスカッションを適宜授業中に行う。	
[課題に対するフィードバック方法] 授業中に適宜フィードバックをする。	
[教科書・参考書等] 教科書:William Stallings, “NETWORK SECURITY ESSENTIALS”, Pearson Education, Inc.(2007) 参考書:適宜指示する。	
[評価方法]	

(1)試験・テストについて
実施しない。

(2)試験以外の評価方法
教科書の内容理解等の平常点。

(3)成績の配分・評価基準等

教科書の内容理解等の平常点(100%)で評価する。試験を行わない予定であるが、理解度が低い場合はレポートの提出をしてもらう。

[準備学習]

教科書の予習および復習が必要である。特に、テキストが洋書であるため、予習には多くの時間を割いてもらいたい。

事前学習:教科書の予習(180分)

事後学習:教科書の予習および復習(60分)

[科目の位置づけと他科目との関連]

英語の読解力養成のため、併せて外国語専門文献購読を履修することが望ましい。

[担当教員へのアクセス]

研究室:3号館1階3120号室

メールアドレス:msasaki@isenshu-u.ac.jp

[オフィスアワー]

時間帯:随時

場所:3120研究室

[備考]

特になし。

情報資源管理論特論 A (Security of Information Resources A)

担当者	教授 工藤 周平
[単位・開講期] 2 単位・前期	
[授業概要] 情報通信技術は発達を続けており、新しい情報資源が登場している。効率的かつ効果的な経営を通じて企業を発展させていくためには、新しい情報資源の導入と管理が必要不可欠となる。企業経営のための情報資源で近年重要性を増しているのが、Web、デジタルデータ、SNS、クラウド・コンピューティングである。 本講義では、クリエイティブ、テクノロジー、メディアのコンバージェンスに焦点を当て、コンバージェンスにおいて Web 技術、データ分析、SNS、クラウド・コンピューティングがどのように活用されているか、またどのように管理する必要があるのかを学習する。授業の各トピックについて現代的な考察を行い、情報資源管理の基本的な方法について理解を深める。	
[到達目標] 学生が、情報資源管理の基本的な方法を理解できる。最近の新しい情報資源を企業経営に活かす方法と管理方法を理解する。現代の情報資源管理の問題について主体的に考えることができる。	
<授業の方法>	
[授業形態]	
【対面形式】 板書とパワーポイントを活用しながら、講義形式ですすめる。	
[授業計画]	
(1) ガイダンス	
(2) メディア、テクノロジー、クリエイティブの融合[対面]	
(3) 次世代のブランド・ストーリーの伝え方[対面]	
(4) データに基づいた行動[対面]	
(5) 行動データの活用[対面]	
(6) Web API[対面]	
(7) クラウド・コンピューティング[対面]	
(8) マーケティング[対面]	
(9) 新しいメディアの利用方法[対面]	
(10) ユビキタス・コンピューティング[対面]	
(11) コンバージェンスの理念[対面]	
(12) 組織構造[対面]	
(13) 最高デジタル責任者[対面]	
(14) 組織改革プロセス[対面]	
(15) アジャイルの利用[対面]	
[アクティブラーニングの取り入れ状況] 毎回の講義の内容について学生にプレゼンテーションを課す。講義テーマについて、ディスカッションを行う。	
[課題に対するフィードバック方法] 提出課題にコメントを記入し返却する。	
[教科書・参考書等] 教科書:ボブ・ロード/レイ・ヴェレズ、『超先進企業が駆使するデジタル戦略』、日経 BP マーケティング、2014年。 参考書:必要に応じて講義中に紹介する。	

[評価方法]

(1)試験・テストについて

試験・テストは実施しない。

(2)試験以外の評価方法

学生の報告の内容、レポートなどの提出物、議論やグループワーク等を評価する。

(3)成績の配分・評価基準等

報告内容の評価:50%、提出物の評価:30%、議論の評価:20%

報告内容:各授業テーマの理解度、プレゼン資料などの発表方法を見る。

提出物の評価:レポートや課題を課し、それらが指示通りの内容か、深く考えられているか、思考を発展させてまとめられているか、を見る。

議論の評価:論理性、妥当性、意欲を見る。

[準備学習]

事前学習:次回の授業内容に該当する部分について調査し、疑問点などをまとめる。(120分)

事後学習:授業内容に関連した最近の企業経営の現象について学習した知識を用いて分析する。(120分)

[科目の位置づけと他科目との関連]

経営学、経営情報システムに関する基本的な理解が必要となる。

[担当教員へのアクセス]

研究室:3号館1階3116室

メールアドレス: s3467012@edu.isenshu-u.ac.jp

[オフィスアワー]

時間帯:火曜5限(16時50分~18時20分)

場所:研究室(3号館1階3116室)

※オフィスアワーなどで研究室を訪問する際は、前もって連絡すること

情報資源管理論特論 B (Security of Information Resources B)

担当者	教授 工藤 周平
[単位・開講期] 2 単位・後期	
[授業概要] 情報通信技術が広く浸透している現代社会において、情報はヒト・モノ・カネと同様に企業の重要な経営資源であり、情報資源の管理のあり方は企業経営の成功に大きく影響するようになっている。情報資源は単なる業務効率化の道具としてだけでなく、競争上の武器として管理する必要がある。 本講義では、情報資源を戦略的な経営資源と捉えるとき、どのようにそれを管理する必要があるのかを学習する。情報資源の戦略性、管理者、システム、アーキテクチャに焦点を当てながら、授業の各トピックについて現代的な考察を行い、戦略的な情報資源の管理方法について理解を深める。	
[到達目標] 学生が、情報資源の戦略的な価値を理解し、戦略的な情報資源の管理方法を理解する。現代の情報資源管理の問題について主体的に考え、実践的指針を示すことができる。	
<授業の方法>	
[授業形態]	
【対面形式】 板書とパワーポイントを活用しながら、講義形式ですすめる。	
[授業計画]	
(1) ガイダンス	
(2) 情報武器[対面]	
(3) 情報統括役員の台頭[対面]	
(4) 経営計画と情報計画の統合[対面]	
(5) 新情報技術事業[対面]	
(6) 競争システムの計画[対面]	
(7) 顧客支援システム[対面]	
(8) 経営支援システム[対面]	
(9) 情報事業[対面]	
(10) 生産性向上[対面]	
(11) 情報資源アーキテクチャ[対面]	
(12) データ・アーキテクチャ[対面]	
(13) 通信アーキテクチャ[対面]	
(14) 人的資源アーキテクチャ[対面]	
(15) 変化管理[対面]	
[アクティブラーニングの取り入れ状況] 毎回の講義の内容について学生にプレゼンテーションを課す。講義テーマについて、ディスカッションを行う。	
[課題に対するフィードバック方法] 提出課題にコメントを記入し返却する。	
[教科書・参考書等] 教科書:William R. Synnott、『戦略情報システムーCIO の任務と実務ー』、日刊工業新聞社、1988年。 参考書:必要に応じて講義中に紹介する	
[評価方法]	
(1)試験・テストについて	

試験・テストは実施しない

(2)試験以外の評価方法

学生の報告の内容、レポートなどの提出物、議論やグループワーク等の評価する

(3)成績の配分・評価基準等

報告内容の評価:50%、提出物の評価:30%、議論の評価:20%

報告内容:各授業テーマの理解度、プレゼン資料などの発表方法を見る。

提出物の評価:レポートや課題を課し、それらが指示通りの内容か、深く考えられているか、思考を発展させてまとめられているか、を見る。

議論の評価:論理性、妥当性、意欲を見る。

[準備学習]

事前学習:次回の授業内容に該当する部分について調査し、疑問点などをまとめる。(120分)

事後学習:授業内容に関連した最近の企業経営の現象について学習した知識を用いて分析する。(120分)

[科目の位置づけと他科目との関連]

経営学、経営情報システム、情報通信技術に関する基本的な理解が必要となる。

[担当教員へのアクセス]

研究室:3号館1階3116室

メールアドレス: s3467012@edu.isenshu-u.ac.jp

[オフィスアワー]

時間帯:火曜5限(16時50分~18時20分)

場所:研究室(3号館1階3116室)

※オフィスアワーなどで研究室を訪問する際は、前もって連絡すること

シミュレーション論特論 A (Advanced Simulation A)

担当者	教授 佐々木 万亀夫
<p>[単位・開講期] 2 単位・前期</p>	
<p>[授業概要] シミュレーションは、自然現象・社会現象を真似することである。モデルをうまく作るにより、実際に体験することのできない事象についても体験でき理解することができる。そのためには、今起きている現象を注意深く観察し、その本質を簡潔に表現できる手法を見つけ出す必要がある。 この授業では、シミュレーションの基本的な手法を実際のモデルを用いて説明し、理解を深めていく。さらに高等学校まででは学ばない高等数学についても解説し、シミュレーションのモデル化の選択の幅を広げていく。また、経営工学的な視点からオペレーションズ・リサーチの手法を取り入れ、経営分析、経営の最適化、需要予測などに役立つようなアルゴリズム、プログラムとして作り上げていきたい。さらに、データ保護の面から暗号についても取り上げ、いくつかの具体的なプログラムとして作り上げていく。</p>	
<p>[到達目標] シミュレーションにおける具体的なモデル化について理解し、実装を行う。</p>	
<p><授業の方法></p>	
<p>[授業形態] 【対面形式】 資料に基づいて説明をした後に実習を行う。</p>	
<p>[授業計画] (1) 大学教養程度の数学の復習1[対面] (2) 大学教養程度の数学の復習2[対面] (3) 大学教養程度の数学の復習3[対面] (4) 大学教養程度の数学の復習4[対面] (5) 微積分1[対面] (6) 微積分2[対面] (7) 整数論1[対面] (8) 整数論2[対面] (9) シミュレーションモデル研究1[対面] (10) シミュレーションモデル研究2[対面] (11) シミュレーションモデル研究3[対面] (12) シミュレーションモデル研究4[対面] (13) 暗号のアルゴリズム1[対面] (14) 暗号のアルゴリズム2[対面] (15) 暗号のアルゴリズム3[対面]</p>	
<p>[アクティブラーニングの取り入れ状況] ディスカッションを適宜授業中に行う。</p>	
<p>[課題に対するフィードバック方法] 課題提出後解説を行う。</p>	
<p>[教科書・参考書等] 教科書: 関根智明・高橋磐郎・若山邦紘著「シミュレーション」 日科技連 参考書: 石村園子著「やさしく学べる微分積分」 共立出版 結城浩著「暗号技術入門」ソフトバンクパブリッシング 森雅夫・森戸進 他著「オペレーションズ・リサーチ I、II」 朝倉書店</p>	

[評価方法]

(1)試験・テストについて
実施しない。

(2)試験以外の評価方法
レポートとプログラミングによる評価。

(3)成績の配分・評価基準等
課題のレポート(50%)と課題モデルプログラミング(50%)による。

[準備学習]

事前学習:線形代数学、統計学については、事前に大学時代の教科書を元に復習しておくこと。
(120分)

事後学習:授業時間内だけでは、課題の完成は難しいので、時間を見つけて自主的に作業を進めること。
(180分)

[科目の位置づけと他科目との関連]

基本的な考え方・プログラミングについては、学部時代に習得できていることを前提とする。

[担当教員へのアクセス]

研究室:3号館1階3120号室

メールアドレス:msasaki@isenshu-u.ac.jp

[オフィスアワー]

時間帯:随時

場所:3号館1階3120号室

[備考]

授業内容に関する質問は、随時受け付ける。

シミュレーション論特論 B (Advanced Simulation B)

担当者	教授 佐々木 万亀夫
[単位・開講期]	2 単位・後期
[授業概要]	<p>シミュレーションは、自然現象・社会現象を真似することである。モデルをうまく作るにより、実際に体験することのできない事象についても体験でき理解することができる。そのためには、今起きている現象を注意深く観察し、その本質を簡潔に表現できる手法を見つけ出す必要がある。</p> <p>この授業では、シミュレーションの基本的な手法を実際のモデルを用いて説明し、理解を深めていく。さらに高等学校まででは学ばない高等数学についても解説し、シミュレーションのモデル化の選択の幅を広げていく。また、経営工学的な視点からオペレーションズ・リサーチの手法を取り入れ、経営分析、経営の最適化、需要予測などに役立つようなアルゴリズム、プログラムとして作り上げて生きたい。さらに、データ保護の面から暗号についても取り上げ、いくつかの具体的なプログラムとして作り上げていく。</p>
[到達目標]	シミュレーションにおける具体的なモデル化について理解し、実装を行う。
<授業の方法>	
[授業形態]	
【対面形式】	資料に基づいて説明をした後に実習を行う。
[授業計画]	<ol style="list-style-type: none">(1) モデルとシミュレーション I [対面](2) 社員食堂モデル [対面](3) 道路交差点モデル [対面](4) 計算機室モデル [対面](5) バス停留所モデル [対面](6) タクシー乗場モデル [対面](7) 街路モデル [対面](8) 貨物列車組成モデル [対面](9) 回路設計のシミュレーション [対面](10) 論理設計のシミュレーション [対面](11) コンピュータ・システムのシミュレーション [対面](12) 道路交通管制システム [対面](13) 道路交通管制システム・シミュレータ [対面](14) 潮流シミュレーション [対面](15) 汚濁拡散シミュレーション [対面]
[アクティブラーニングの取り入れ状況]	ディスカッションを適宜授業中に行う。
[課題に対するフィードバック方法]	課題提出後解説を行う。
[教科書・参考書等]	教科書：中西俊男著、「コンピュータシミュレーション」、近代科学社、オーム社 参考書：津田孝夫著、「モンテカルロ法とシミュレーション」、培風館
[評価方法]	

- (1)試験・テストについて
実施しない。
- (2)試験以外の評価方法
レポートとプログラミングによる評価。
- (3)成績の配分・評価基準等
課題のレポート(50%)と課題モデルプログラミング(50%)による。

[準備学習]

事前学習:線形代数学、統計学については、事前に大学時代の教科書を元に復習しておくこと。
(120分)

事後学習:授業時間内だけでは、課題の完成は難しいので、時間を見つけて自主的に作業を進めること。
(180分)

[科目の位置づけと他科目との関連]

基本的な考え方・プログラミングについては、学部時代に習得できていることを前提とする。

[担当教員へのアクセス]

研究室:3号館1階 3120号室

メールアドレス:msasaki@isenshu-u.ac.jp

[オフィスアワー]

時間帯:随時

場所:3号館1階 3120号室

[備考]

授業内容に関する質問は、随時受け付ける。

経営情報システム論特論 A (Management Information System A)

担当者	教授 岩浅 巧
[単位・開講期] 2 単位・前期	
[授業概要] 本授業は、経営情報システム(MIS)の基本的な考え方を学ぶ科目である。企業経営において情報システムが果たす役割を、戦略、組織、業務プロセス、意思決定の観点から理解する。あわせて、情報システムの発展過程、ERP、IT 投資、ガバナンス、情報倫理・セキュリティ、意思決定支援などの基礎的内容を扱い、企業事例を通じて MIS を経営の視点から説明できる力を養う。	
[到達目標] ・企業経営における情報システムの役割を、戦略・組織・業務の観点から説明できる。 ・MIS の基本概念と発展の流れを理解し、現代企業における意義を述べることができる。 ・MIS や意思決定支援の基本的な枠組みを用いて、企業事例の課題を整理できる。	
<授業の方法>	
[授業形態]	
【対面形式】 対面形式の授業を行う。	
[授業計画] (1) ガイダンス (2) MIS の基本概念: 情報、組織、意思決定 (3) 情報システム発展史(1): 集中処理からクライアントサーバへ (4) 情報システム発展史(2): インターネット化とモバイル化 (5) 情報システム発展史(3): デジタル化と企業経営 (6) 業務プロセスと MIS: 可視化、標準化、改善 (7) 基幹系システム(ERP)と経営管理 (8) IT 投資の評価: 戦略との整合と効果 (9) IT ガバナンス: 統制、責任、リスク管理 (10) 情報倫理と法務: プライバシー、説明責任、ルール (11) 情報セキュリティ: 脅威、対策、経営への影響 (12) 意思決定支援システム(DSS)の基礎 (13) BIとデータ活用: 指標と意思決定 (14) 事例分析: MIS の課題と改善策の検討 (15) まとめ	
[アクティブラーニングの取り入れ状況] 演習課題、分析結果の討議、事例に基づく検討を通じて、アクティブラーニングを実施する。	
[課題に対するフィードバック方法] 課題提出後に解説を行う。	
[教科書・参考書等] 教科書: 使用しない。 参考書: 参考書籍や参考論文については、適宜講義中に紹介する。	
[評価方法] (1) 試験・テストについて 実施しない。	

(2)試験以外の評価方法

講義内での発表と事前課題、討論への参加等。

(3)成績の配分・評価基準等

講義内での発表と事前課題(60%)、討論への参加状況(40%)等を総合的に評価する。

[準備学習]

事前学習:予習として指定書籍や指定論文の該当箇所について事前読了を求め、かつレジュメにまとめて講義時に発表してもらうことがある。各回の予習には90分~120分かかると想定される。

事後学習:復習として、指定書籍や指定論文の該当箇所を再読し、必要に応じてレジュメにまとめることを求めることがある。各回の復習には90分~120分かかると想定される。

[科目の位置づけと他科目との関連]

実習ではビジネス上の問題を扱うため、経営学分野の授業を履修して基本知識を得ておくことが望ましい。

[担当教員へのアクセス]

研究室:3号館2階 3214号室

[オフィスアワー]

時間帯:随時。授業終了後でも可。

場所:研究室3号館2階 3214号室

[備考]

講義内容に関する質問は、随時受け付ける。

経営情報システム論特論 B (Management Information System B)

担当者	教授 岩浅 巧
[単位・開講期] 2 単位・後期	
[授業概要] 本授業は、特論 A で学んだ MIS の基礎を踏まえ、現代企業における情報システムの活用と課題を学ぶ科目である。DX、クラウド、データ活用、AI、プラットフォーム、サイバーリスクなどを取り上げ、企業が情報システムをどのように活用し、どのような課題に対応すべきかを検討する。事例分析や文献講読を通じて、現代的な経営課題を情報システムの視点から説明し、考察する力を養う。	
[到達目標] ・DX やデータ活用、AI 導入などの現代的課題を、経営の視点から説明できる。 ・企業事例をもとに、情報システム活用の成果と課題を整理できる。 ・文献やケースに基づいて、自分の考えをまとめ、論理的に報告できる。	
<授業の方法>	
[授業形態]	
【対面形式】 対面形式の授業を行う。	
[授業計画] (1) ガイダンス (2) DX の基本的な考え方: 業務変革と企業価値 (3) クラウド活用: SaaS、PaaS、IaaS の基礎 (4) システム開発の新しい考え方: アジャイルと DevOps (5) データ基盤とデータガバナンス (6) BI・アナリティクスと意思決定 (7) AI 活用の基礎: 導入領域と課題 (8) プラットフォーム戦略とエコシステム (9) 顧客データ活用とデジタルマーケティング (10) サイバーリスクと事業継続 (11) 情報倫理・規制・社会的責任 (12) IT 投資とポートフォリオ管理 (13) 事例研究: 企業の DX・情報システム改革 (14) 発表・討論: テーマ報告と相互検討 (15) まとめ	
[アクティブラーニングの取り入れ状況] ケース討論、文献講読に基づく論点提示、受講者発表と相互質疑を授業内で継続的に実施する。	
[課題に対するフィードバック方法] 課題の解説を次回の講義内に行う。	
[教科書・参考書等] 教科書: 使用しない。 参考書: 参考書籍や参考論文については、適宜講義中に紹介する。	
[評価方法] (1) 試験・テストについて	

試験は行わない

(2)試験以外の評価方法

事前課題・講義内課題等:40%・レポート:30%・講義参加への積極性等:30%

(3)成績の配分・評価基準等

事前課題・講義内課題は、指示に沿った作業の正確性、考察の妥当性、提出状況を評価する。レポートは、調査設計の適切性、データ処理・分析の正確性、結果の解釈と記述の論理性により評価する。講義参加への積極性は、演習・討議への参加状況および発言・協働の姿勢等を総合的に評価する。

[準備学習]

事前学習:予習として指定書籍や指定論文の該当箇所について事前読了を求め、かつレジュメにまとめて講義時に発表してもらうことがある。各回の予習には90分~120分かかると想定される。

事後学習:復習として、指定書籍や指定論文の該当箇所を再読し、必要に応じてレジュメにまとめることを求めることがある。各回の復習には90分~120分かかると想定される。

[科目の位置づけと他科目との関連]

実習ではビジネス上の問題を扱うため、経営学分野の授業を履修して基本知識を得ておくことが望ましい。

[担当教員へのアクセス]

研究室:3号館2階 3214号室

[オフィスアワー]

時間帯:随時。授業終了後でも可。

場所:研究室3号館2階 3214号室

[備考]

講義内容に関する質問は、随時受け付ける。

経営情報学演習 (Seminar of Business Information Theory)

担当者	専任教員																																
<p>[単位・開講期] 8 単位 (2 年間)</p> <p>[授業概要] 「経営情報学演習」では、「経営情報学」という専攻分野の枠内で、それぞれの演習担当教員が担当する授業科目と結びつく研究分野を中心としながらも限定されることなく、各担当教員の実際の研究領域に関連するテーマについて、修士論文作成のための研究指導を行う。学生には、志望する演習担当教員との面談機会を提供し、各教員の担当する授業科目を参考にしながら、自分の関心に対応する指導が受けられる教員を、指導教員として選べるような機会を提供する。 各々のテーマを設定した学生は、演習担当教員の指導のもと、文献の講読、資料の収集、調査分析等を行い、適当な時期に発表・討論しながら、さらにその研究を深めていき、最終的には修士論文の作成へと繋げる。</p> <p>[到達目標] 各演習担当教員の研究指導の下で研究を深め、各自が設定したテーマについて修士論文をまとめる。</p> <p><授業の方法> [授業形態] 【対面形式】を基本とする。 指導教員の指示に基づく。 文献講読、資料の分析、調査を行う。「授業・演習」形式である。</p> <p>[授業計画] 演習の初回に担当教員より説明があるが、概ね以下のような計画である。2年次には 1 年次の研究を踏まえ、修士論文執筆の指導を行なう。</p> <table border="0" data-bbox="183 1164 1324 1713"> <tr> <td style="vertical-align: top;">(前期)</td> <td style="vertical-align: top;">(後期)</td> </tr> <tr> <td>(1) 研究テーマの決定</td> <td>(16) 研究テーマの決定</td> </tr> <tr> <td>(2) 研究計画作成</td> <td>(17) 研究計画作成</td> </tr> <tr> <td>(3) 研究テーマに関する文献の講読1</td> <td>(18) 研究テーマに関する文献の講読1</td> </tr> <tr> <td>(4) 研究テーマに関する文献の講読2</td> <td>(19) 研究テーマに関する文献の講読2</td> </tr> <tr> <td>(5) 研究テーマに関する文献の講読3</td> <td>(20) 研究テーマに関する文献の講読3</td> </tr> <tr> <td>(6) 研究テーマに関する文献の講読4</td> <td>(21) 研究テーマに関する文献の講読4</td> </tr> <tr> <td>(7) 研究テーマに関する文献の講読5</td> <td>(22) 研究テーマに関する文献の講読5</td> </tr> <tr> <td>(8) 研究テーマに関する文献の講読6</td> <td>(23) 研究テーマに関する文献の講読6</td> </tr> <tr> <td>(9) 研究テーマに関する文献の講読7</td> <td>(24) 研究テーマに関する文献の講読7</td> </tr> <tr> <td>(10) 研究テーマに関する文献の講読8</td> <td>(25) 研究テーマに関する文献の講読8</td> </tr> <tr> <td>(11) 研究テーマに関する文献の講読9</td> <td>(26) 研究テーマに関する文献の講読9</td> </tr> <tr> <td>(12) 研究テーマに関する文献の講読 10</td> <td>(27) 研究テーマに関する文献の講読 10</td> </tr> <tr> <td>(13) 研究テーマに関する資料の精査1</td> <td>(28) 研究テーマに関する資料の精査1</td> </tr> <tr> <td>(14) 研究テーマに関する資料の精査2</td> <td>(29) 研究テーマに関する資料の精査2</td> </tr> <tr> <td>(15) 研究テーマに関する資料の精査3</td> <td>(30) 研究テーマに関する資料の精査3</td> </tr> </table> <p>ディスカッションを適宜授業中に行う。</p> <p>[アクティブラーニングの取り入れ状況] ディスカッション、資料の分析、調査は、アクティブラーニングそのものである。</p> <p>[課題に対するフィードバック方法] 授業中に適宜フィードバックをする。</p> <p>[教科書・参考書等]</p>		(前期)	(後期)	(1) 研究テーマの決定	(16) 研究テーマの決定	(2) 研究計画作成	(17) 研究計画作成	(3) 研究テーマに関する文献の講読1	(18) 研究テーマに関する文献の講読1	(4) 研究テーマに関する文献の講読2	(19) 研究テーマに関する文献の講読2	(5) 研究テーマに関する文献の講読3	(20) 研究テーマに関する文献の講読3	(6) 研究テーマに関する文献の講読4	(21) 研究テーマに関する文献の講読4	(7) 研究テーマに関する文献の講読5	(22) 研究テーマに関する文献の講読5	(8) 研究テーマに関する文献の講読6	(23) 研究テーマに関する文献の講読6	(9) 研究テーマに関する文献の講読7	(24) 研究テーマに関する文献の講読7	(10) 研究テーマに関する文献の講読8	(25) 研究テーマに関する文献の講読8	(11) 研究テーマに関する文献の講読9	(26) 研究テーマに関する文献の講読9	(12) 研究テーマに関する文献の講読 10	(27) 研究テーマに関する文献の講読 10	(13) 研究テーマに関する資料の精査1	(28) 研究テーマに関する資料の精査1	(14) 研究テーマに関する資料の精査2	(29) 研究テーマに関する資料の精査2	(15) 研究テーマに関する資料の精査3	(30) 研究テーマに関する資料の精査3
(前期)	(後期)																																
(1) 研究テーマの決定	(16) 研究テーマの決定																																
(2) 研究計画作成	(17) 研究計画作成																																
(3) 研究テーマに関する文献の講読1	(18) 研究テーマに関する文献の講読1																																
(4) 研究テーマに関する文献の講読2	(19) 研究テーマに関する文献の講読2																																
(5) 研究テーマに関する文献の講読3	(20) 研究テーマに関する文献の講読3																																
(6) 研究テーマに関する文献の講読4	(21) 研究テーマに関する文献の講読4																																
(7) 研究テーマに関する文献の講読5	(22) 研究テーマに関する文献の講読5																																
(8) 研究テーマに関する文献の講読6	(23) 研究テーマに関する文献の講読6																																
(9) 研究テーマに関する文献の講読7	(24) 研究テーマに関する文献の講読7																																
(10) 研究テーマに関する文献の講読8	(25) 研究テーマに関する文献の講読8																																
(11) 研究テーマに関する文献の講読9	(26) 研究テーマに関する文献の講読9																																
(12) 研究テーマに関する文献の講読 10	(27) 研究テーマに関する文献の講読 10																																
(13) 研究テーマに関する資料の精査1	(28) 研究テーマに関する資料の精査1																																
(14) 研究テーマに関する資料の精査2	(29) 研究テーマに関する資料の精査2																																
(15) 研究テーマに関する資料の精査3	(30) 研究テーマに関する資料の精査3																																

担当教員より別途指示する。

[評価方法]

(1) 試験・テストについて

担当教員より別途指示する。

(2) 試験以外の評価方法

担当教員より別途指示する。

(3) 成績の配分・評価基準等

討論の状況(20%)、論文内容(60%)、論文発表(20%)により評価する。

[準備学習]

担当教員より別途指示するが、合計で240分必要。

事前学習: 事後学習と合わせて240分。

事後学習: 事前学習と合わせて240分。

[授業以外の学習方法]

修士論文を執筆するにあたり、授業以外の時間を十分に活用して、必要な資料の収集、調査分析等を継続的に行なう必要がある。また、大学院生相互に研究に関する議論を活発に行なうこと。

[科目の位置づけと他科目との関連]

概ね「経営情報学」の分野に該当する科目を履修することが必要である。また、各学生が設定したテーマの修士論文作成のための研究指導を行うが、そのために履修が必要な科目については、指導教員より別途指示する。

[担当教員へのアクセス]

研究室: 担当教員より別途指示する。

メールアドレス: 担当教員より別途指示する。

[オフィスアワー]

時間帯: 担当教員より別途指示する。

場所: 担当教員より別途指示する。

[備考]

研究進行状況等について、各演習担当教員とのコミュニケーションを欠かさないこと。

外国語専門文献講読 A (Advanced Foreign Treatises A)

担当者	教授 丸岡 泰
<p>[単位・開講期] I 単位・前期</p> <p>[授業概要] 東日本大震災後の本学でも見られたように、災害後の被災地に多くのボランティアが集まる現象は世界的に観察される。それは被災者の便益になる一方で、場合によっては不利益ともなる。ボランティアという自発的・利他的・無償の労働力に最低限の秩序をもたらし、不利益が起こりにくくするための仕組みについて理論的な検討は必要である。この仕組みによる秩序化を管理と呼ぶことも可能だが、その用語自体、ボランティアからは嫌悪されるため使用が困難である。用語の是非はさておき、この授業では、必要な仕組みについて外国での災害事例から形成された理論を検討することで災害ボランティアについての諸問題を理解する。また、ボランティアに関連する NGO・NPO についても議論を行う。</p> <p>[到達目標] 災害ボランティアの特徴と「巻き込み／排除パラドックス」を理解する。</p> <p><授業の方法></p> <p>[授業形態] 【対面形式】を基本とするが、参加者との相談の上【非対面形式】の同時双方向型を取る場合もある。学生の報告と教員との議論を中心に授業を進める。</p> <p>[授業計画] (1) ガイダンス[対面] (2) ～(14) テキスト購読[対面] (15) 要点のまとめ[対面]</p> <p>[アクティブラーニングの取り入れ状況] 参加者の予習・報告と議論・意見交換。</p> <p>[課題に対するフィードバック方法] 参加者がテキストの割り当て部分をあらかじめ読み、その翻訳を用紙にまとめた発表骨子とともに行った口頭報告に対し、教員が論点を提示し、意見交換を行う。</p> <p>[教科書・参考書等] 教科書: Margaret Harris*, Duncan Shaw, Judy Scully, Chris M. Smith, Graham Hieke [2017] “The involvement/exclusion paradox of spontaneous volunteering: new lessons from winter flood episodes in England” <i>Nonprofit and Voluntary Sector Quarterly</i>, Volume 46, 2, 1 Apr 2017 (必要な範囲のコピーを配布) 参考書: 桜井政成編著[2013]『東日本大震災と NPO・ボランティア』ミネルヴァ書房</p> <p>[評価方法] (1) 試験・テストについて 実施しない。 (2) 試験以外の評価方法 予習と報告の質を評価する。 (3) 成績の配分・評価基準等 報告の質 (70%) と授業の理解状況 (30%)。</p> <p>[準備学習] 事前学習: 必ず予定範囲まで自分なりの翻訳を行ってくること。(120 分)</p>	

事後学習: 英文と翻訳を読み比べ、授業での論点と英文の意味を復習する。(120分)

[科目の位置づけと他科目との関連]

本科目は非営利組織経営論の延長に位置付けられる。

[担当教員へのアクセス]

研究室: 3号館2階 3215号館

[オフィスアワー]

時間帯: メール等でのアポに応じ実施。

maruoka(a)isenshu-u.ac.jp <(a)はアットマークに>

場所: 研究室

外国語専門文献講読 B (Advanced Foreign Treatises B)

担当者	教授 丸岡 泰
<p>[単位・開講期] I 単位・後期</p> <p>[授業概要] 東日本大震災後の本学でも見られたように、災害後の被災地に多くのボランティアが集まる現象は世界的に観察される。それは被災者の便益になる一方で、場合によっては不利益ともなる。ボランティアという自発的・利他的・無償の労働力に最低限の秩序をもたらし、不利益が起こりにくくするための仕組みについて理論的な検討は必要である。この仕組みによる秩序化を管理と呼ぶことも可能だが、その用語自体、ボランティアからは嫌悪されるため使用が困難である。用語の是非はさておき、この授業では、必要な仕組みについて外国での災害事例から形成された理論を検討することで災害ボランティアについての諸問題を理解する。また、ボランティアに関連する NGO・NPO についても議論を行う。</p> <p>[到達目標] 災害ボランティアの特徴と「巻き込み／排除パラドックス」を理解する。</p> <p><授業の方法></p> <p>[授業形態] 【対面形式】を基本とするが、参加者との相談の上【非対面形式】の同時双方向型を取る場合もある。学生の報告と教員との議論を中心に授業を進める。</p> <p>[授業計画] (1) ガイダンス[対面] (2)～(14) テキスト購読[対面] (15) 要点のまとめ[対面]</p> <p>[アクティブラーニングの取り入れ状況] 参加者の予習・報告と議論・意見交換。</p> <p>[課題に対するフィードバック方法] 参加者がテキストの割り当て部分をあらかじめ読み、その翻訳を用紙にまとめた発表骨子とともに行った口頭報告に対し、教員が論点を提示し、意見交換を行う。</p> <p>[教科書・参考書等] 教科書: Margaret Harris*, Duncan Shaw, Judy Scully, Chris M. Smith, Graham Hieke [2017] “The involvement/exclusion paradox of spontaneous volunteering: new lessons from winter flood episodes in England” <i>Nonprofit and Voluntary Sector Quarterly</i>, Volume 46, 2, 1 Apr 2017 (必要な範囲のコピーを配布) 参考書: 桜井政成編著[2013]『東日本大震災と NPO・ボランティア』ミネルヴァ書房</p> <p>[評価方法] (1) 試験・テストについて 実施しない。 (2) 試験以外の評価方法 予習と報告の質を評価する。 (3) 成績の配分・評価基準等 報告の質 (70%) と授業の理解状況 (30%)。</p> <p>[準備学習] 事前学習: 必ず予定範囲まで自分なりの翻訳を行ってくること。(120 分)</p>	

事後学習: 英文と翻訳を読み比べ、授業での論点と英文の意味を復習する。(120分)

[科目の位置づけと他科目との関連]

本科目は非営利組織経営論の延長に位置付けられる。

[担当教員へのアクセス]

研究室: 3号館2階 3215号館

[オフィスアワー]

時間帯: メール等でのアポに応じ実施。

maruoka(a)isenshu-u.ac.jp <(a)はアットマークに>

場所: 研究室

博士後期課程

経営学専攻

経営学特殊研究 A (Advanced General Theory of Management A)

担当者	教授 工藤 周平
[単位・開講期] 2 単位・前期	
[授業概要] 企業が存続・発展していくためには企業を進化させなければならない。不確実性の高い経営環境では、企業は主体的に情報を創造し、環境に対して積極的な提案をしていかなければならない。つまり不確実性の高い経営環境における企業進化の重要な起動力になるのが情報創造である。経営者は情報創造のための組織の土壌を作らなければならない。 本講義では、企業における情報創造を促進させるようなマネジメントの方法を学習する。授業の各トピックについて現代的な考察を行い、情報創造マネジメントの実践について理解を深める。	
[到達目標] 学生が、情報創造のマネジメントを通じた企業進化の方法を理解する。現代の情報創造のマネジメントの問題について主体的に考え、実践的指針を示すことができる。	
<授業の方法>	
[授業形態]	
【対面形式】 板書とパワーポイントを活用しながら、講義形式ですすめる。	
[授業計画]	
<ul style="list-style-type: none"> (1) ガイダンス (2) 偉人に学ぶ戦略の実践[対面] (3) パラダイムとアンラーニング[対面] (4) 戦略の科学化[対面] (5) エクセレント・カンパニー[対面] (6) 企業文化[対面] (7) セルフ・オーガニゼーション[対面] (8) たえず進化する組織の条件[対面] (9) 過剰適応[対面] (10) 文化大革命[対面] (11) 組織のリズムと引き込み現象[対面] (12) 自己革新のマネジメント[対面] (13) 情報創造の意義[対面] (14) 情報創造のマネジメント[対面] (15) 脱マネジメントへの探索[対面] 	
[アクティブラーニングの取り入れ状況] 毎回の講義の内容について学生にプレゼンテーションを課す。講義テーマについて、ディスカッションを行う。	
[課題に対するフィードバック方法] 提出課題にコメントを記入し返却する。	
[教科書・参考書等] 教科書:野中郁次郎、『企業進化論』、日本経済新聞社、1985 年。 参考書:必要に応じて講義中に紹介する	
[評価方法]	

(1)試験・テストについて

試験・テストは実施しない

(2)試験以外の評価方法

学生の報告の内容、レポートなどの提出物、議論やグループワーク等を評価する

(3)成績の配分・評価基準等

報告内容の評価:50%、提出物の評価:30%、議論の評価:20%

報告内容:各授業テーマの理解度、プレゼン資料などの発表方法を見る。

提出物の評価:レポートや課題を課し、それらが指示通りの内容か、深く考えられているか、思考を発展させてまとめられているか、を見る。

議論の評価:論理性、妥当性、意欲を見る。

[準備学習]

事前学習:次回の授業内容に該当する部分について調査し、疑問点などをまとめる。(120分)

事後学習:授業内容に関連した最近の企業経営の現象について学習した知識を用いて分析する。(120分)

[科目の位置づけと他科目との関連]

経営学、経営戦略、経営組織に関する基本的な理解が必要となる。

[担当教員へのアクセス]

研究室:3号館1階3116室

メールアドレス: s3467012@edu.isenshu-u.ac.jp

[オフィスアワー]

時間帯:火曜5限(16時50分~18時20分)

場所:研究室(3号館1階3116室)

※オフィスアワーなどで研究室を訪問する際は、前もって連絡すること

経営学特殊研究 B (Advanced General Theory of Management B)

担当者	教授 工藤 周平
[単位・開講期] 2 単位・後期	
[授業概要] 企業の競争力の源泉の 1 つに知識がある。日本企業の国際競争力の最も重要な源泉は組織的知識創造にある。組織的知識創造とは、新しい知識を創り出し、組織全体に広め、製品やサービスあるいは業務システムに具体化する組織全体の能力のことである。 本講義では、知識とは何か、企業組織の知識創造の方法、知識創造のためのマネジメント・プロセスを学習する。授業の各トピックについて現代的な考察を行い、知識創造マネジメントの実践について理解を深める。	
[到達目標] 学生が、組織的知識創造の方法や知識創造のためのマネジメント・プロセスを理解する。現代の知識創造のマネジメントの問題について主体的に考え、実践的指針を示すことができる。	
<授業の方法>	
[授業形態]	
【対面形式】 板書とパワーポイントを活用しながら、講義形式ですすめる。	
[授業計画]	
(1) ガイダンス	
(2) 組織における知識[対面]	
(3) 知識とは何か[対面]	
(4) 日本における知の伝統[対面]	
(5) 経済・経営理論における知識[対面]	
(6) 知識と情報[対面]	
(7) 知識変換[対面]	
(8) 知識の内容と知識スパイラル[対面]	
(9) 知識創造の実例[対面]	
(10) 知識創造のためのマネジメント・プロセス[対面]	
(11) 3 つの経営モデル[対面]	
(12) 新しい組織構造[対面]	
(13) グローバルな組織的知識創造[対面]	
(14) 実践的提言[対面]	
(15) 理論的発見[対面]	
[アクティブラーニングの取り入れ状況] 毎回の講義の内容について学生にプレゼンテーションを課す。講義テーマについて、ディスカッションを行う。	
[課題に対するフィードバック方法] 提出課題にコメントを記入し返却する。	
[教科書・参考書等] 教科書:野中郁次郎・竹内弘高、『知識創造企業』、東洋経済新報社、1996 年。 参考書:必要に応じて講義中に紹介する。	
[評価方法] (1) 試験・テストについて	

試験・テストは実施しない

(2)試験以外の評価方法

学生の報告の内容、レポートなどの提出物、議論やグループワーク等の評価する

(3)成績の配分・評価基準等

報告内容の評価:50%、提出物の評価:30%、議論の評価:20%

報告内容:各授業テーマの理解度、プレゼン資料などの発表方法を見る。

提出物の評価:レポートや課題を課し、それらが指示通りの内容か、深く考えられているか、思考を発展させてまとめられているか、を見る。

議論の評価:論理性、妥当性、意欲を見る。

[準備学習]

事前学習:次回の授業内容に該当する部分について調査し、疑問点などをまとめる。(120分)

事後学習:授業内容に関連した最近の企業経営の現象について学習した知識を用いて分析する。(120分)

[科目の位置づけと他科目との関連]

経営学、経営戦略、経営組織に関する基本的な理解が必要となる。

[担当教員へのアクセス]

研究室:3号館1階3116室

メールアドレス: s3467012@edu.isenshu-u.ac.jp

[オフィスアワー]

時間帯:火曜5限(16時50分~18時20分)

場所:研究室(3号館1階3116室)

※オフィスアワーなどで研究室を訪問する際は、前もって連絡すること

経営管理論特殊研究 A (Advanced Research in the Business Management A)

担当者	教授 杉田 博
<p>[単位・開講期] 2 単位・前期</p> <p>[授業概要] 経営管理とは、組織の維持・存続を目的として、社会に必要な財とサービスを継続的に提供するという事業に対する管理者の活動である。C.I.バーナードによれば、それらはコミュニケーション、意思決定、モチベーション、リーダーシップからなり、それぞれの方法は、人間・組織・社会（環境）をいかに把握するかという管理者の価値観に依存している。本講義では、経営管理論史に目を向けることで、マネジメントの文脈における組織と人間の関わりについて理解する。</p> <p>[到達目標] 経営とは何か、そして経営者の役割とは何かを経済合理的かつ価値倫理的に考えることができる。</p> <p><授業の方法></p> <p>[授業形態] 【対面形式】 教科書を輪読し、その後、ディスカッションを行う。</p> <p>[授業計画]</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) ガイダンス [対面] (2) 経営管理論史Ⅰ(テイラー) [対面] (3) 経営管理論史Ⅱ(ファヨール) [対面] (4) 経営管理論史Ⅲ(メイヨー) [対面] (5) 経営管理論史Ⅳ(フォレット) [対面] (6) 経営管理論史Ⅴ(バーナード) [対面] (7) 経営管理論史Ⅵ(サイモン) [対面] (8) 経営管理論史Ⅶ(ドラッカー) [対面] (9) 経営のトライアングル:人間性 [対面] (10) 経営のトライアングル:経済性 [対面] (11) 経営のトライアングル:社会性 [対面] (12) マネジメントの人間観 [対面] (13) マネジメントの組織観 [対面] (14) マネジメントの社会観 [対面] (15) あたなとマネジメント [対面] (16) まとめ [対面] <p>[アクティブラーニングの取り入れ状況] 受講者のプレゼンテーションの後に全員でディスカッションを行う。</p> <p>[課題に対するフィードバック方法] 提出課題にコメントを記入し返却する。</p> <p>[教科書・参考書等] 教科書:必要に応じて講義中に紹介する。 参考書:経営学史学会編『経営学史叢書』文眞堂。</p> <p>[評価方法] (1)試験・テストについて 試験・テストは実施しない</p>	

(2)試験以外の評価方法

学生の報告の内容、レポートなどの提出物、議論やグループワーク等の評価する

(3)成績の配分・評価基準等

報告内容の評価:50%、議論の評価:50%

報告内容:各授業テーマの理解度、プレゼン資料などの発表方法を評価する。

議論の評価:論理性、妥当性、意欲を評価する。

[準備学習]

事前学習:次回の授業内容について調査し、疑問点などをまとめる。(90分)

事後学習:教科書の熟読、関連文献を読む。(150分)

[科目の位置づけと他科目との関連]

経営学、経営戦略、経営組織に関する基本的な理解が必要となる。

[担当教員へのアクセス]

メールアドレス s3454236@edu.isenshu-u.ac.jp

[オフィスアワー]

時間帯:木曜日 2 時限・昼休み・3 時限

場所:3 号館 2 階 3219 号室

[備考]

授業内容に関する質問は 3219 教室で随時受け付ける。

経営管理論特殊研究 B (Advanced Research in the Business Management B)

担当者	教授 杉田 博
[単位・開講期] 2 単位・後期	
[授業概要] 経営管理とは、組織の維持・存続を目的として、社会に必要な財とサービスを継続的に提供するという事業に対する管理者の活動である。C.I.バーナードによれば、それらはコミュニケーション、意思決定、モチベーション、リーダーシップからなり、それぞれの方法は、人間・組織・社会（環境）をいかに把握するかという管理者の価値観に依存している。このことは現代企業のカバナンスやコンプライアンスといった問題に他ならない。本講義では、組織の外側に目を向けてマクロと称される経営管理を取り上げることとする。	
[到達目標] 現代企業のカバナンスや社会的責任を踏まえ、経営者の役割は何かを経済合理的かつ価値倫理的に考えることができる。	
<授業の方法>	
[授業形態]	
【対面形式】 教科書を輪読し、その後、ディスカッションを行う。	
[授業計画]	
(1) ガイダンス [対面]	
(2) 企業とは何か I [対面]	
(3) 企業とは何か II [対面]	
(4) 企業組織の形態 I [対面]	
(5) 企業組織の形態 II [対面]	
(6) ネットワークの企業形態 I [対面]	
(7) ネットワークの企業形態 II [対面]	
(8) 経営のイノベーション I [対面]	
(9) 経営のイノベーション II [対面]	
(10) 企業の社会的責任 I [対面]	
(11) 企業の社会的責任 II [対面]	
(12) コーポレートガバナンス I [対面]	
(13) コーポレートガバナンス II [対面]	
(14) 企業経営のコンプライアンス [対面]	
(15) まとめ [対面]	
[アクティブラーニングの取り入れ状況] 受講者のプレゼンテーションの後に全員でディスカッションを行う。	
[課題に対するフィードバック方法] 提出課題にコメントを記入し返却する。	
[教科書・参考書等] 教科書：必要に応じて講義中に紹介する。 参考書：必要に応じて講義中に紹介する。	
[評価方法] (1) 試験・テストについて 試験・テストは実施しない	

(2)試験以外の評価方法

学生の報告の内容、レポートなどの提出物、議論やグループワーク等の評価する

(3)成績の配分・評価基準等

報告内容の評価:50%、議論の評価:50%

報告内容:各授業テーマの理解度、プレゼン資料などの発表方法を評価する。

議論の評価:論理性、妥当性、意欲を評価する。

[準備学習]

事前学習:次回の授業内容について調査し、疑問点などをまとめる。(90分)

事後学習:教科書の熟読、関連文献を読む。(150分)

[科目の位置づけと他科目との関連]

経営学、経営戦略、経営組織に関する基本的な理解が必要となる。

[担当教員へのアクセス]

メールアドレス s3454236@edu.isenshu-u.ac.jp

[オフィスアワー]

時間帯:木曜日 2 時限・昼休み・3 時限

場所:3 号館 2 階 3219 号室

[備考]

授業内容に関する質問は 3219 教室で随時受け付ける。

経営組織論特殊研究 A (Advanced Business Organization A)

担当者	教授 杉田 博
[単位・開講期]	2 単位・前期
[授業概要]	H.A.サイモンの論理実証主義やコンティンジェンシー論者の研究スタイルに代表されるように、経営学は客観的な機能主義の立場にある。しかし、19 世紀から 20 世紀初頭の欧米では、主観的なプロセス思想が芽生え、それをもとにした組織研究も行われたし、また 1970 年以降になると機能主義的発想に対するアンチテーゼとして、経営組織の解釈主義的研究が数多く登場した。本授業では、まず経営学の目指すものは何かを捉え、次いで、機能主義と解釈主義の経営学とその意義について学ぶことを目的としたい。
[到達目標]	各自の博士論文を経営学方法論の観点からデザインすることができる。
<授業の方法>	
[授業形態]	
【対面形式】	教科書を輪読し、その後、ディスカッションを行う。
[授業計画(前期)]	<ol style="list-style-type: none">(1) ガイダンス [対面](2) 論理実証主義(3) 批判的合理主義 [対面](4) 社会構成主義 [対面](5) 構造主義とポスト構造主義 [対面](6) 機能主義と経営組織論 [対面](7) 解釈主義と経営組織論 [対面](8) ポストモダンと経営組織論 [対面](9) アクションリサーチ [対面](10) 量的研究とは何か [対面](11) 量的研究の方法 [対面](12) 質的研究とは何か [対面](13) 質的研究の方法 [対面](14) あなたの研究方法は何か [対面](15) まとめ [対面]
[アクティブラーニング取り入れ状況]	発表とディスカッションを行う。
[課題に対するフィードバック方法]	授業中に課題に対する説明を行う。
[教科書・参考書等]	教科書:高橋正泰監修(2020)『組織のメソドロジー』学文社。 参考書:授業時に指示する。
[評価方法]	<ol style="list-style-type: none">(1) 試験・テストについて(2) 試験以外の評価方法

(3)成績の配分・評価基準等

教科書を輪読する。発表担当者については、レジュメ、発表態度等を評価する。それ以外の学生については、質問の頻度等を評価する。出席重視。発表担当者の当日欠席は言語道断である。

[準備学習]

事前学習:発表レジュメ作成(120分)

事後学習:関連文献を読む(120分)

[授業以外の学習方法]

古典と呼ばれる書物を(難解だが)紐解いてみよう。

[科目の位置づけと他科目との関連]

本授業ではさまざまな学説を検討するが、それらは他の経営学関連科目でも取り上げられると思う。キーワードを見つけて科目と科目との関連を意識したい。

[担当教員へのアクセス]

メールアドレス s3454236@edu.isenshu-u.ac.jp

[オフィスアワー]

時間帯:木曜日 2 時限・昼休み・3 時限

場所:3号館2階 3219 号室

[備考]

授業内容に関する質問は 3219 教室で随時受け付ける。

経営組織論特殊研究 B (Advanced Business Organization B)

担当者	教授 杉田 博
[単位・開講期] 2 単位・後期	
[授業概要] 本講義では、現代経営学の「主流」である「科学としての経営学」と対比する形で「哲学としての経営学」を提示したい。哲学史を概観すると、テキスト解釈の技法として誕生した解釈学が、人間存在の意味を問い、さらには人間の社会性や歴史性を問うものに進化したように、わが国における学説理論系の経営学は単なる文献解釈に止まらない。その大きな貢献は経営学の射程に表れている。科学を志向する経営学が捨象してしまう価値的な側面を丁寧に取り扱うことで、合理性、人間性、社会性を同時に問う経営学を構築させた。本講義は、こうした経営学の歴史に焦点を当てる。	
[到達目標] 経営組織の機能主義的研究と解釈主義的研究の双方の研究方法を理解することができる。	
<授業の方法>	
[授業形態] 【対面形式】 教科書を輪読し、その後、ディスカッションを行う。	
[授業計画] (1) ガイダンス [対面] (2) 解釈学的経営思想の視座 [対面] (3) 経営思想の 100 年史 [対面] (4) フォレットの組織と管理 [対面] (5) フォレットとドイツ観念論哲学 [対面] (6) フォレットとプラグマティズム [対面] (7) フォレットと有機体の哲学 [対面] (8) フォレットの解釈学的特性 [対面] (9) フォレットとコミュニタリアニズム [対面] (10) フォレットと物語論 [対面] (11) 物語論的経営思想 [対面] (12) 解釈学的経営思想の現代的意義 [対面] (13) 解釈学的経営思想の現代的意義 [対面] (14) あなたの科学観と哲学観 [対面] (15) まとめ [対面]	
[アクティブラーニング取り入れ状況] 発表とディスカッションを行う。	
[課題に対するフィードバック方法] 授業中に課題に対する説明を行う。	
[教科書・参考書等] 教科書:杉田博(2021)『フォレットの解釈学的経営思想』文眞堂。 参考書:授業時に指示する。	
[評価方法] (1)試験・テストについて	

(2)試験以外の評価方法

(3)成績の配分・評価基準等

教科書を輪読する。発表担当者については、レジュメ、発表態度等を評価する。それ以外の学生については、質問の頻度等を評価する。出席重視。発表担当者の当日欠席は言語道断である。

[準備学習]

事前学習:発表レジュメ作成(120分)

事後学習:関連文献を読む(120分)

[授業以外の学習方法]

古典と呼ばれる書物を(難解だが)紐解いてみよう。

[科目の位置づけと他科目との関連]

本授業ではさまざまな学説を検討するが、それらは他の経営学関連科目でも取り上げられると思う。キーワードを見つけて科目と科目との関連を意識したい。

[担当教員へのアクセス]

メールアドレス s3454236@edu.isenshu-u.ac.jp

[オフィスアワー]

時間帯:木曜日 2 時限・昼休み・3 時限

場所:3号館2階 3219 号室

[備考]

授業内容に関する質問は 3219 教室で随時受け付ける。

マーケティング論特殊研究 A (Advanced Marketing A)

担当者	教授 李 東勲
[単位・開講期] 2 単位・前期	
[授業概要] 博士後期課程においては、研究者自身の独自のモデルを創出することが求められる。本授業ではその前提条件として、マーケティング論および流通論に関連する諸理論の「学習・確認」を徹底的に行う。具体的には、各理論の成立背景や論理構成を深く理解した上で、それらを自分独自に「分析・評価」することに重点を置く。既存研究の批判的検討を通じて、自身の独自研究を位置づけるための理論的基盤を構築する。	
[到達目標] マーケティングおよび流通に関する専門的な関心を通して、理論的な側面と実践的な側面の両方をバランスよく理解し、各自の問題意識を独自モデルの構築へと発展させる能力を習得する。既存理論を自らの視点で再構築し、分析・評価できるレベルに到達することを目指す。	
<授業の方法> [授業形態]:【対面形式】 教科書の講読やケース・スタディの際には、発表担当者を決め、担当部分の内容をまとめて説明してもらい、それを土台にグループワークを行う。	
[授業計画] 1. ガイダンスー博士論文における独自モデル創出の意義と要件 2. マーケティング理論の変遷ーパラダイム・シフトの分析 3. グローバル・マーケティングにおける制度的要因の評価 4. 消費者行動研究の高度化ー情報処理理論と心理学的アプローチ 5. 流通チャネル論の再編ー取引コスト理論と資源依存理論 6. デジタル変革 (DX) におけるプラットフォーム戦略の分析 7. サービス・ドミナント・ロジック (S-DL) の理論的検討 8. 関係性マーケティングとネットワーク論の評価 9. ブランド理論の展開ー記号論的アプローチと共創プロセス 10. 中小企業マーケティングの独自性に関する理論的考察 11. 地域マーケティングと社会活性化の相互作用 12. 先行研究のレビュー技法ー理論的整合性の検証 13. 既存理論の評価ー独自モデルに向けた予備的分析 14. リサーチ・ギャップの特定と独自仮説の導出 15. 独自モデル構築のための理論的基盤の確定	
[アクティブラーニングの取り入れ状況] 毎回の講義では、複数の先行研究を比較分析することで、既存知見の欠落部分である「リサーチ・ギャップ」を特定する作業を課す。また、受講生が自身の独自モデルの核となる理論的ポジションを提示し、それに対して他の受講生や教員が高度な学術的視点から質疑・批評を行う「ピア・レビュー形式」の討議を徹底する。これにより、博士論文の論理的障壁を乗り越えるための高度な批判的思考力と、独自モデル構築の前提となる理論的整合性を検証する能力を養成する。	
[課題に対するフィードバック方法] 教科書やケーススタディの内容、さらにアクティブラーニングの課題などが現場ではどう利用されるのか、またどう応用すれば良いのかについて議論しながら解説する。	
[教科書・参考書等] ・教科書は、使用しない。	

・参考書:

栗木契、水越康介、吉田満梨 編

『マーケティング・リフレーミング- 視点が変わると価値が生まれる』有斐閣、2012年

水越康介 著

『企業と市場と観察者 - マーケティング方法論研究の新地平』有斐閣、2011年

[評価方法]

(1)試験・テストについて

筆記試験は実施しない。

(2)試験以外の評価方法

本授業の評価基準は参加状況と発言頻度、発言内容、発表レジュメなどを総合的に判断し評価する。よって、十分な準備をしていない場合や発言しない人は評価が低くなる。

(3)成績の配分・評価基準等

テキストや文献資料を中心とした担当部分の報告とディスカッションを踏まえて成績の評価を行う。詳しくは、担当部分の報告内容・報告資料の提出(60%)、ディスカッションの展開力(30%)、授業への貢献度(10%)で評価を行う。

[準備学習]

事前学習:関連する国内外の学術論文を自主的に探索し、問題意識を持って授業に参加する。また、教科書を精読し、質問を用意する。(120分)

事後学習:授業での議論を踏まえ、自らの研究モデルや先行研究レビューを精緻化する。(120分)

[授業以外の学習方法]

教科書の内容を的確に理解するため、関連資料を調べることが必要である。特に、新聞・雑誌などは絶えず目を通してほしい。

[科目の位置づけと他科目との関連]

マーケティングは、企業のみならず組織が持続的な成長を続ける上で、重要な戦略である。よって、マーケティング論特殊研究 A を受講するに当たっては、博士後期課程に配置されている科目を総合的に勉強する必要がある。

[担当教員へのアクセス]

研究室:3号館2階3210号室

※ Microsoft Teams のチャットを利用して随時コミュニケーションを取る。

[オフィスアワー]

3号館2階3210研究室で、随時対応する。但し、Microsoft Teams のチャットで事前に会う約束を取るようにして下さい。

[備考・オフィスアワー]

院生の研究関心によっては相談の上で、教材や授業内容を決定する。よって、上述した授業計画は受講生の関心によって変更可能であり、一つの例である。

マーケティング論特殊研究 B (Advanced Marketing B)

担当者	教授 李 東勲
[単位・開講期] 2 単位・前期	
[授業概要] 本講義では、博士後期課程における独自の研究モデル構築を最終目標とする。前期のマーケティング論特殊研究 A で、習得した理論的枠組みをいかに実証データへと落とし込むか、その「橋渡し」となるリサーチ・デザインを深化させる。具体的には、石巻や東松島などの地域資源（海苔ブランド等）や流通構造を対象とした実証研究を念頭に、質的調査（インタビュー、参与観察）およびケース・スタディの論理をマーケティング学や流通論の文脈から体系的に教授する。	
[到達目標] 独自の研究モデルを裏付けるための仮説立案、調査設計、データ分析、および検証の一連のプロセスを自律的に遂行できる。先行研究に基づいた「問題発見と解決能力」を高度なレベルで実践し、学術的に評価される独自モデルを提示できる能力を身につける。	
[授業計画] 1. ガイダンスー理論仮説とリサーチ・クエスションの整合性 2. マーケティングにおける質的調査の意義ー消費者の意味世界と現場の論理 3. インタビュー法の深化ー地域ステークホルダーへのアプローチ 4. 参与観察とフィールドワークー道の駅や復興商店街における流通・消費行動の観察 5. 記述的ケース・スタディから理論構築へー単一事例と複数事例の比較分析 6. 量的調査方法ー理論実証のためのサンプリングと尺度構成 7. 質的調査方法ーインタビューデータに基づく消費者心理の動態把握 8. 研究倫理とフィールドへのフィードバックー地域活性化に資する研究者の役割 9. 論文構成のブラッシュアップー分析結果の提示と理論的インプリケーション 10. 独自モデルの提示ー理論的貢献と調査デザインの整合性 11. データの分析と評価ーマーケティング現象の特異性と一般性の検証 12. モデルの検証(1)ー実証結果による仮説の判定と理論へのフィードバック 13. モデルの検証(2)ー独自モデルの有用性と理論的インプリケーションの導出 14. 理論的背景と分析結果の再統合 15. 全体の総括ー独自モデルの展望・完成	
[アクティブラーニングの取り入れ状況] 受講生は自らの研究テーマに即した市場や企業を対象に予備調査を実施し、専門理論に基づいてその結果を分析・評価する。そのプロセスを受講生同士で議論し、理論が現場でどう機能しているか、自らのモデルが現実をどう説明できるかを相互に検証することで、実証研究の質を高める。	
[課題に対するフィードバック方法] 院生の研究計画および分析結果に対し、ゼミナール形式で理論的整合性と実証精度の観点から詳細な批評を実施する。また、Microsoft Teams を活用し、個別の進捗に応じた専門文献の紹介や、高度な分析手法に関する技術的指導を随時行う。	
[教科書・参考書等] ・教科書は、使用しない。 ・参考書： 大谷尚 著『質的研究の考え方 - 研究方法論からSCATによる分析まで』 名古屋大学出版会、2019 年 岸政彦、石岡丈昇、丸山里美 著 『質的社会調査の方法 - 他者の合理性の理解社会学』有斐閣、2016 年	

[評価方法]

(1)試験・テストについて
筆記試験は実施しない。

(2)試験以外の評価方法

本授業の評価基準は参加状況と発言頻度、発言内容、発表レジュメなどを総合的に判断し評価する。よって、十分な準備をしていない場合や発言しない人は評価が低くなる。

(3)成績の配分・評価基準等

テキストや文献資料を中心とした担当部分の報告とディスカッションを踏まえて成績の評価を行う。また、各自の研究報告も求める。詳しくは、以下の3つの基準に基づいたルーブリックを用いて総合的に判断し、評価する。

- ①報告の内容(理論的解釈の深度と独自モデルの論理性):35%
- ②ディスカッションの際の態度(学術的議論への貢献):35%
- ③中間報告ならびに最終報告の内容(研究デザインの完成度):30%

[準備学習]

事前学習:関連する国内外の学術論文を自律的に探索し、問題意識を持って授業に参加する。また、教科書を精読し、質問を用意する。(120分)

事後学習:授業での議論を踏まえ、自らの研究モデルや先行研究レビューを精緻化する。(120分)

[授業以外の学習方法]

教科書の内容を的確に理解するため、関連資料を調べることが必要である。特に、新聞・雑誌などは絶えず目を通してほしい。

[科目の位置づけと他科目との関連]

マーケティングは、企業のみならず組織が持続的な成長を続ける上で、重要な戦略である。よって、マーケティング論特殊研究 B を受講するに当たっては、博士後期課程に配置されている科目を総合的に勉強する必要がある。

[担当教員へのアクセス]

研究室:3号館2階3210号室

※ Microsoft Teams のチャットを利用して随時コミュニケーションを取る。

[オフィスアワー]

3号館2階3210研究室で、随時対応する。但し、Microsoft Teams のチャットで事前に会う約束を取るようにして下さい。

[備考・オフィスアワー]

院生の研究関心によっては相談の上で、教科書や授業内容を決定する。よって、上述した授業計画は受講生の関心によって変更可能であり、一つの例である。

国際比較経営論特殊研究 A (Advanced International Comparative Management A)

担当者	教授 丸岡 泰
<p>[単位・開講期] 2 単位・前期</p> <p>[授業概要] 日本と海外における雇用慣行について比較検討を行う。</p> <p>[到達目標] 日本の雇用慣行の国際比較経営の観点からの特徴について理解を深める。 海外の雇用慣行や参加者の関心に応じた国・産業・企業の雇用事情の知識を広げる。</p> <p><授業の方法></p> <p>[授業形態] 【対面形式】を基本とするが、参加者との相談の上【非対面形式】の同時双方向型を取る場合もある。 学生の報告と議論を中心に授業を進める。</p> <p>[授業計画] (1)ガイダンス[対面] (2)～(14)日本的雇用慣行[対面] (15) 日本的雇用慣行のまとめ[対面]</p> <p>[アクティブラーニングの取り入れ状況] 授業での報告・議論。</p> <p>[課題に対するフィードバック方法] 授業中にコメント。</p> <p>[教科書・参考書等] 教科書：開講時に参加者と協議して、決めたい。 海外の雇用事情については、英語での情報収集を行いたい。 参考書：八代尚宏[1997]『日本的雇用慣行の経済学』日本経済新聞出版</p> <p>[評価方法] (1)試験・テストについて 試験・テストは実施しない。 (2)試験以外の評価方法 授業の準備と口頭報告・レジメの質に基づき評価する。 (3)成績の配分・評価基準等 報告回数(70%)、報告の質(30%)。</p> <p>[準備学習] 事前学習：問題提起するだけの深い読み方をしておくこと。(120分) 事後学習：問題提起するだけの深い読み方をしておくこと。(120分)</p> <p>[科目の位置づけと他科目との関連] 経済学関連の授業が前提となる。</p> <p>[担当教員へのアクセス] 研究室：3号館2階 3215 号館</p>	

[オフィスアワー]

時間帯:メール等でのアポに応じ実施。

maruoka(a)isenshu-u.ac.jp <(a)はアットマークに>

場所:研究室

国際比較経営論特殊研究 B (Advanced International Comparative Management B)

担当者	教授 丸岡 泰
<p>[単位・開講期] 2 単位・後期</p> <p>[授業概要] 日本と海外における雇用慣行について比較検討を行う。</p> <p>[到達目標] 日本の雇用慣行の国際比較経営の観点からの特徴について理解を深める。 海外の雇用慣行や参加者の関心に応じた国・産業・企業の雇用事情の知識を広げる。</p> <p><授業の方法></p> <p>[授業形態] 【対面形式】を基本とするが、参加者との相談の上【非対面形式】の同時双方向型を取る場合もある。 学生の報告と議論を中心に授業を進める。</p> <p>[授業計画] (1)ガイダンス[対面] (2)～(13)海外の雇用慣行[対面] (14)～(15)日本的雇用慣行と海外の雇用慣行のまとめ[対面]</p> <p>[アクティブラーニングの取り入れ状況] 授業での報告・議論。</p> <p>[課題に対するフィードバック方法] 授業中にコメント。</p> <p>[教科書・参考書等] 教科書：開講時に参加者と協議して、決めたい。 海外の雇用事情については、英語での情報収集を行いたい。 参考書：八代尚宏[1997]『日本的雇用慣行の経済学』日本経済新聞出版</p> <p>[評価方法] (1)試験・テストについて 試験・テストは実施しない。 (2)試験以外の評価方法 授業の準備と口頭報告・レジメの質に基づき評価する。 (3)成績の配分・評価基準等 報告回数(70%)、報告の質(30%)。</p> <p>[準備学習] 事前学習：問題提起するだけの深い読み方をしておくこと。(120分) 事後学習：問題提起するだけの深い読み方をしておくこと。(120分)</p> <p>[科目の位置づけと他科目との関連] 経済学関連の授業が前提となる。</p> <p>[担当教員へのアクセス] 研究室：3号館2階 3215 号館</p>	

[オフィスアワー]

時間帯:メール等でのアポに応じ実施。

maruoka(a)isenshu-u.ac.jp <(a)はアットマークに>

場所:研究室

地域経営論特殊研究 A (Advanced Study in the Regional Management A)

担当者	教授 庄子 真岐
<p>[単位・開講期] 2 単位・前期</p>	
<p>[授業概要] 人口減少、少子高齢化、産業の空洞化など地域経済を取り巻く環境は厳しさを増している。このような状況下において、域外の資本に依存せず、ある程度自立しながら、地域を活性化していくためには、何が必要であるかを様々な角度から考察していく。</p>	
<p>[到達目標] 本科目の到達目標は、以下3つである。 1. 地域社会の現状を把握する力を身に付ける。 2. 地域における産業政策が産業構造に与える影響を分析し、政策提言できる力を身に付ける。 3. 地域におけるマネジメントの課題を認識し、解決方法を考える力を身に付ける。</p>	
<p><授業の方法> [授業形態] 【対面形式】 テーマに基づいた内容の文献を予習課題として提示する。 提示された文献の内容を受講生がまとめ、発表する。 発表内容について教員が補足説明した後、ディスカッションを行う。</p>	
<p>[授業計画] (1) 授業ガイダンス、地域社会の現状(1)人口[対面] (2) 地域社会の現状(2)産業[対面] (3) 地域の状況に関する分析(1)[対面] (4) 地域の状況に関する分析(2)[対面] (5) 地域の状況に関する分析(3)[対面] (6) 地域経済分析システム(1)[対面] (7) 地域経済分析システム(2)[対面] (8) 地域経済分析システム(3)[対面] (9) 地域産業システム(1)[対面] (10) 地域産業システム(2)[対面] (11) 地域産業システム(3)[対面] (12) 産業集積と産業クラスター(1)[対面] (13) 産業集積と産業クラスター(2)[対面] (14) 産業集積と産業クラスター(3)[対面] (15) 発表会と中間まとめ[対面]</p>	
<p>[アクティブラーニングの取り入れ状況] 毎回、学生によるプレゼンテーションもしくはディスカッションを行う。</p>	
<p>[課題に対するフィードバック方法] 文献購読のまとめ、プレゼンテーション、レポート課題については、評価表(ルーブリック)を用いて相互評価を行い、講義内でフィードバックする。</p>	
<p>[教科書・参考書等] 参考書:枝廣淳子(2018)「地元経済を創りなおす―分析・診断・対策―」岩波新書 藤田 昌久他(2018)「復興の空間経済学:人口減少時代の地域再生」日本経済新聞社 大野健一(2013)「産業政策のつくり方」有斐閣</p>	

R.フロリダ(2008)「クリエイティブ資本論 新たな経済階級の台頭」ダイヤモンド社

[評価方法]

(1)試験・テストについて

試験は実施しない。前期後期2回のレポートを課す。

(2)試験以外の評価方法

プレゼンテーション、文献購読、授業への貢献度(ディスカッションへの積極的参加)により評価する。

(3)成績の配分・評価基準等

本科目は、プレゼンテーション(40%)・文献購読、レポート課題(40%)・授業への貢献度(20%)によって評価する。

[準備学習]

事前学習:授業中に論点に応じた文献を紹介するので、しっかり読み込み、次週までにレジュメにまとめておくこと。

事後学習:授業中に論点に応じた文献を紹介するので、しっかり読み込み、次週までにレジュメにまとめておくこと。

[科目の位置づけと他科目との関連]

経営学に類する科目の多くは、本科目の内容と関連する。マネジメント、人的資源管理、マーケティングなどは、特に関連性が強い科目であると考えられる。

[担当教員へのアクセス]

研究室:3号館1階3104号室(事前にアポを取る)

Teams チャットで随時対応

[オフィスアワー]

時間帯:火から木 昼休み

場所:3号館1階3104号室、オンライン

[備考]

授業内容に関する質問は随時受け付ける。

地域経営論特殊研究 B (Advanced Study in the Regional Management B)

担当者	教授 庄子 真岐
<p>[単位・開講期] 2 単位・後期</p>	
<p>[授業概要] 人口減少、少子高齢化、産業の空洞化など地域経済を取り巻く環境は厳しさを増している。本科目では、「地域経営論特殊研究 A」で学んだ地域社会の現状分析や地域産業の構造理解を踏まえ、地域経営に関する理論的枠組みおよび政策手法について検討する。 特に、地域資源の活用、地域経済循環、観光まちづくり、地域ブランド、産業クラスターなどの観点から、国内外の研究成果や政策事例を分析し、地域政策の効果や課題について学術的に検討する。さらに、地域課題に対する政策提言や地域マネジメントのあり方について議論し、博士論文研究へと発展させることを目指す。</p>	
<p>[到達目標] 本科目の到達目標は、以下3つである。 1. 地域経営に関する理論や研究成果を理解し、地域課題を学術的に分析する力を身に付ける。 2. 地域政策や地域産業政策の効果を多面的に検討し、理論と実証の両面から評価できる力を身に付ける。 3. 地域経営に関する研究課題を設定し、博士論文につながる研究構想を構築できる力を身に付ける。</p>	
<p><授業の方法> [授業形態] 【対面形式】 テーマに基づいた内容の文献を予習課題として提示する。 提示された文献の内容を受講生がまとめ、発表する。 発表内容について教員が補足説明した後、ディスカッションを行う。</p>	
<p>[授業計画(前期)] (1) 授業ガイダンス、地域経営研究の理論的枠組み [対面] (2) 地域経営研究の主要理論(地域ガバナンス) [対面] (3) 地域経営研究の主要理論(地域資源論) [対面] (4) 地域経営研究の主要理論(地域経済循環) [対面] (5) 地域経営研究の主要理論(観光まちづくり) [対面] (6) 地域政策と地方創生政策の研究① [対面] (7) 地域政策と地方創生政策の研究② [対面] (8) 地域産業政策と地域イノベーション [対面] (9) 地域ブランドと地域価値創造① [対面] (10) 地域ブランドと地域価値創造② [対面] (11) 海外における地域経営研究① [対面] (12) 海外における地域経営研究② [対面] (13) 地域コミュニティと市民参加① [対面] (14) 地域コミュニティと市民参加② [対面] (15) 地域政策評価と政策提言 [対面]</p>	
<p>[アクティブラーニングの取り入れ状況] 毎回、学生によるプレゼンテーションもしくはディスカッションを行う。</p>	
<p>[課題に対するフィードバック方法] 文献購読のまとめ、プレゼンテーション、レポート課題については、評価表(ルーブリック)を用いて相互評価を行い、講義内でフィードバックする。</p>	

[教科書・参考書等]

参考書:枝廣淳子(2018)「地元経済を創りなおす—分析・診断・対策—」岩波新書
藤田 昌久他(2018)「復興の空間経済学:人口減少時代の地域再生」日本経済新聞社
大野健一(2013)「産業政策のつくり方」有斐閣
R.フロリダ(2008)「クリエイティブ資本論 新たな経済階級の台頭」ダイヤモンド社

[評価方法]

(1)試験・テストについて

試験は実施しない。前期後期2回のレポートを課す。

(2)試験以外の評価方法

プレゼンテーション、文献購読、授業への貢献度(ディスカッションへの積極的参加)により評価する。

(3)成績の配分・評価基準等

本科目は、プレゼンテーション(40%)・文献購読、レポート課題(40%)・授業への貢献度(20%)によって評価する。

[準備学習]

事前学習:授業中に論点に応じた文献を紹介するので、しっかり読み込み、次週までにレジュメにまとめておくこと。

事後学習:授業中に論点に応じた文献を紹介するので、しっかり読み込み、次週までにレジュメにまとめておくこと。

[科目の位置づけと他科目との関連]

経営学に類する科目の多くは、本科目の内容と関連する。マネジメント、人的資源管理、マーケティングなどは、特に関連性が強い科目であると考えられる。

[担当教員へのアクセス]

研究室:3号館 1階 3104号室(事前にアポを取る)

Teams チャットで随時対応

[オフィスアワー]

時間帯:火から木 昼休み

場所:3号館 1階 3104号室、オンライン

[備考]

授業内容に関する質問は随時受け付ける。

会社法特殊研究 A (corporation Law A)

担当者	教授 三森 敏正
[単位・開講期] 2 単位・前期	
[授業概要] 本科目は、博士後期課程における会社法の高度な研究能力を涵養するための研究指導型セミナーである。修士課程の「会社法特論」において習得した会社法の基礎的理解を前提として、より深化した理論的・比較法的・立法論的な考察を行う。	
[到達目標] ・会社法上の問題を比較法的視点(英・米・独・EU 法等)から分析し、日本法の特質と課題を多角的に論じることができる。 ・会社法上の問題を比較法的視点(英・米・独・EU 法等)から分析し、日本法の特質と課題を多角的に論じることが ・博士論文に値する独創的な研究課題を設定し、先行研究の批判的検討を踏まえた上で、オリジナルな学術的貢献を提示できる。	
<授業の方法>	
[授業形態] 【対面形式】(履修者の希望があれば一部オンライン併用) 演習方式。	
[授業計画(前期)] (1) ガイダンス:博士研究としての会社法学 (2) 法人格論の深化:法人格否認・濫用の理論 (3) 株式制度の理論的基礎:種類株式・属人的定め (4) 株式譲渡の規制と流通市場:譲渡制限・承認機関 (5) 株主総会の権限論:機関権限配分の理論 (6) 株主総会決議の瑕疵論:訴訟制度の理論的検討 (7) 取締役の義務論(1):善管注意義務・経営判断原則 (8) 取締役の義務論(2):忠実義務・利益相反規制の理論 (9) コーポレートガバナンスの理論(1):監督機能の比較的分析 (10) コーポレートガバナンスの理論(2):株主アクティビズムと機関投資家 (11) 計算規制・配当規制の理論的基礎 (12) 非公開会社法の理論的課題:閉鎖会社・中小企業法制 (13) 前期研究発表:博士論文中間報告 (14) 博士論文テーマの構成の確認 (15) 前期まとめ	
[アクティブラーニングの取り入れ状況] アクティブラーニングを取り入れる。	
[課題に対するフィードバック方法] 毎回のレポートについて講評し、必要に応じて添削して返却する。	
[教科書・参考書等] 教科書:別冊ジュリスト 会社法判例百選[第4版] 参考書:田中亘著 会社法[第5版]東京大学出版会	
[評価方法]	

(1)試験・テストについて
実施しない。

(2)試験以外の評価方法
毎回の授業における報告の準備状況および研究の進捗度。

(3)成績の配分・評価基準等
報告内容9割、課題についての考察度2割

[準備学習]

事前学習:授業計画に基づき、可能な限り、国内外の判例・学説等の確認と理解を深めておくこと(180分)。

事後学習:関連論点について考察を深める(120分)。

[科目の位置づけと他科目との関連]

博士論文執筆の必要となる科目等について積極的に学修することが必要である。

[担当教員へのアクセス]

研究室:3号館1階3123号室

[オフィスアワー]

時間帯:木曜日13:00~13:30

場所:3号館1階3123号室

会社法特殊研究 B (corporation Law B)

担当者	教授 三森 敏正
[単位・開講期] 2 単位・後期	
[授業概要] 本講では判例の詳細な分析および英独の会社法との比較を通じて、2020 年に改正された会社法の理解を深めていくことを目的とする。授業は演習方式で、毎週担当者が課題についてレポートを行い、それをもとに議論を行う形式で行う。この他、履修者の研究状況を鑑みて対応する。	
[到達目標] 会社法の主要な論点についての比較法的考察が可能となる知識の修得。	
<授業の方法>	
[授業形態] 【対面形式】 (履修者の希望があれば一部オンライン併用) 演習方式。	
[授業計画(前期)] (1) 資金調達法制の理論(1):株式発行・公募増資の規制 (2) 資金調達法制の理論(2):新株予約権・転換社債型約権付社債 (3) 合併法制の理論的基盤 (4) 会社分割・事業譲渡の理論的課題 (5) M&A 法制の総合的考察:株式交換・TOB・MBO (6) 株主代表訴訟の理論的構造 (7) グループ会社法制の理論的課題 (8) コーポレートガバナンス改革の批判的考察 (9) 会社法と資本市場法制の交錯 (10) 会社法と倒産法の交錯:倒産局面における経営者の義務 (11) 会社法の経済分析:法と経済学のアプローチ (12) 比較会社法の方法論①:米・英法制の比較 (13) 比較会社法の方法論②:独・EU 法制の比較 (14) 博士論文テーマの構成の確認 (15) 総括	
[アクティブラーニングの取り入れ状況] アクティブラーニングを取り入れる。	
[課題に対するフィードバック方法] 毎回のレポートについて講評し、必要に応じて添削して返却する。	
[教科書・参考書等] 教科書:別冊ジュリスト 会社法判例百選[第4版] 参考書:田中亘著 会社法[第5版]東京大学出版会	
[評価方法] (1)試験・テストについて 実施しない。 (2)試験以外の評価方法 毎回の授業における報告の準備状況および研究の進捗度。	

(3)成績の配分・評価基準等

報告内容9割、課題についての考察度2割

[準備学習]

事前学習:授業計画に基づき、可能な限り、国内外の判例・学説等の確認と理解を深めておくこと(180分)。

事後学習:関連論点について考察を深める(120分)。

[科目の位置づけと他科目との関連]

博士論文執筆の必要となる科目等について積極的に学修することが必要である。

[担当教員へのアクセス]

研究室:3号館1階3123号室

[オフィスアワー]

時間帯:時間帯:木曜日13:00~13:30

場所:3号館1階3123号室

経営学演習 (Seminar of Advanced Business Management)

担当者	専任教員
<p>[単位・開講期] 12 単位 (3 年間)</p> <p>[授業概要] 博士論文の研究課題に関係する文献の調査、演習および討論等を行う。</p> <p>[到達目標] 研究書を読破し、プレゼンをできる。</p> <p><授業の方法></p> <p>[授業形態] 【対面形式】【非対面形式】 指導教員の指示に基づく演習。</p> <p>[授業計画] 演習の初回に説明を行う。</p> <p>[アクティブラーニングの取り入れ状況] 報告とその質疑応答。</p> <p>[課題に対するフィードバック方法] 質疑応答によるフィードバック。</p> <p>[教科書・参考書等] 教科書：別途指示する。 参考書：</p> <p>[評価方法] (1) 試験・テストについて 指導教員の指示に基づく。 (2) 試験以外の評価方法 報告に関する質疑の内容。 (3) 成績の配分・評価基準等 発表・討論等の状況を総合的に評価する。</p> <p>[準備学習] 事前学習：論文テーマに関する文献調査、報告準備。指定された読書範囲をよく読むこと。(120 分) 事後学習：報告した内容の精査。(120 分)</p> <p>[科目の位置づけと他科目との関連] 経営学演習は、先生の指導の下、博士論文を仕上げるのが目的であり、先生と相談の上、他科目の受講等、行うべきである。</p> <p>[担当教員へのアクセス] 研究室：指導教員の指示に基づく。</p> <p>[オフィスアワー] 時間帯：指導教員の指示に基づく。 場所：指導教員の指示に基づく。</p>	

会計学原理特殊研究 A (Advanced Accounting Theory A)

担当者	教授 関根 慎吾
<p>[単位・開講期] 2 単位・前期</p> <p>[授業概要] 授業計画の内容に沿いながら、今日的企業分析の内容を体系的に究明する。</p> <p>[到達目標] 同分野についての博士資格水準への到達を目標とする。</p> <p><授業の方法></p> <p>[授業形態] 【対面形式】 授業内容の説明と報告による質疑応答。</p> <p>[授業計画]</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. [対面] 財務諸表を利用した企業分析のフレームワーク 2. [対面] 経営戦略分析 3. [対面] 会計分析の概要 4. [対面] 資産の分析 5. [対面] 負債および持分の分析 6. [対面] 収益の分析 7. [対面] 費用の分析 8. [対面] 安全性分析(1)－短期支払能力 9. [対面] 安全性分析(2)－長期支払能力 10. [対面] 安全性分析(3)－倒産予測の可能性 11. [対面] 効率性分析(1)－回転率 12. [対面] 効率性分析(2)－回転日数 13. [対面] 生産性分析 14. [対面] 収益性分析(1)－総資産事業利益率 15. [対面] 収益性分析(2)－自己資本当期純利益率 <p>[アクティブラーニングの取り入れ状況] 報告と質疑応答。</p> <p>[課題に対するフィードバック方法] 質疑によるフィードバック。</p> <p>[教科書・参考書等] K.G .パルプ、P.M ヒーラー、V.L バーナード著、斎藤静樹監訳「企業分析入門(最新版)」(東京大学出版会)を手がかりに、授業を進めたい。</p> <p>[評価方法]</p> <ol style="list-style-type: none"> (1)試験・テストについて 行わない。 (2)試験以外の評価方法 報告に関する質疑の内容。 (3)成績の配分・評価基準等 発表・討論等の状況を総合的に評価する。 	

[準備学習]

事前学習:報告準備のための文献調査。(120分)

事後学習:報告した内容の精査。(120分)

会計学関連の諸科目および経営学の隣接分野についても広く研究してほしい。

[科目の位置づけと他科目との関連]

本授業のテーマは会計学の応用分野であると同時に、隣接科学である経営戦略論、企業評価論も組み込んでいる。

[担当教員へのアクセス]

研究室:3号館2階 3218号室

[オフィスアワー]

時間帯:随時受け付ける。

場所:3号館2階 3218号室

会計学原理特殊研究 B (Advanced Accounting Theory B)

担当者	教授 関根 慎吾
<p>[単位・開講期] 2 単位・後期</p> <p>[授業概要] 授業計画の内容に沿いながら、今日的企業分析の内容を体系的に究明する。</p> <p>[到達目標] 同分野についての博士資格水準への到達を目標とする。</p> <p><授業の方法></p> <p>[授業形態] 【対面形式】 授業内容の説明と報告による質疑応答。</p> <p>[授業計画]</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. [対面] 成長性分析 2. [対面] 総合評価 3. [対面] 会計政策 4. [対面] 会計エンティティの分析 5. [対面] 将来性分析: 予測 6. [対面] 将来性分析: 評価理論と概念 7. [対面] 将来性分析: 企業評価の実際 8. [対面] 新たな企業評価指標(1) - 伝統的な財務諸表分析の限界 10. [対面] キャッシュ・フロー分析 11. [対面] EVA 12. [対面] 資本コスト 13. [対面] 分析の実例と活用(1) - IFRS と 日本基準 14. [対面] 分析の実例と活用(2) - 成長性分析 15. [対面] 分析の実例と活用(3) - グループ経営分析 <p>[アクティブラーニングの取り入れ状況] 報告と質疑応答。</p> <p>[課題に対するフィードバック方法] 質疑によるフィードバック。</p> <p>[教科書・参考書等] K.G. パルプ、P.M. ヒーラー、V.L. バーナード著、斎藤静樹監訳「企業分析入門(最新版)」(東京大学出版会)を手がかりに、授業を進めたい。</p> <p>[評価方法]</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 試験・テストについて 行わない。 (2) 試験以外の評価方法 報告に関する質疑の内容。 (3) 成績の配分・評価基準等 発表・討論等の状況を総合的に評価する。 	

[準備学習]

事前学習:報告準備のための文献調査。(120分)

事後学習:報告した内容の精査。(120分)

会計学関連の諸科目および経営学の隣接分野についても広く研究してほしい。

[科目の位置づけと他科目との関連]

本授業のテーマは会計学の応用分野であると同時に、隣接科学である経営戦略論、企業評価論も組み込んでいる。

[担当教員へのアクセス]

研究室:3号館2階 3218号室

[オフィスアワー]

時間帯:随時受け付ける。

場所:3号館2階 3218号室

簿記原理特殊研究 A (Advanced Theory of Book-keeping A)

担当者	教授 関根 慎吾
[単位・開講期] 2 単位・前期	
[授業概要] 経済のグローバル化ないしボーダーレス化に伴う会計基準の国際的調和化の動きなどによって、社会の基本的インフラとしての会計を取り巻く環境は大きく変貌している。その中で「簿記」に対する認識も大きく変わろうとしている。本講では「簿記」を主に、理論的、歴史的にどのような役割を担ってきたかを考えていくことにする。	
[到達目標] 財務会計分野の博士論文の作成を志す学生諸君に役立つ知識を身につけるとともに、税理士、公認会計士等の会計専門職の資格をねらう学生諸君の計算能力の向上ならびに、実務で直面するであろう会計情報システムへの考え方の基礎を涵養することも目標としている。	
<授業の方法>	
[授業形態] 【対面形式】 授業内容の説明と報告による質疑応答。	
[授業計画(前期)] (1) [対面] 複式簿記の基本構造 (2) [対面] 複式簿記の成立過程 (3) [対面] 複式簿記の伝搬 (4) [対面] 現代の複式簿記観(1)―概観 (5) [対面] 現代の複式簿記観(2)―個別見解 (6) [対面] 過去簿記(1) ―イギリス 1 (7) [対面] 過去簿記(2) ―イギリス 2 (8) [対面] 過去簿記(3)―イギリス 3 (9) [対面] 過去簿記(4)―日本 1 (10) [対面] 過去簿記(5)―日本 2 (11) [対面] 過去簿記(6)―日本 3 (12) [対面] 過去簿記(7)―韓国への導入 1 (13) [対面] 過去簿記(8)―韓国への導入 2 (14) [対面] 過去簿記(9)―公会計 1 (15) [対面] 過去簿記(10)―公会計 2	
[アクティブラーニングの取り入れ状況] 報告と質疑応答。	
[課題に対するフィードバック方法] 質疑応答によるフィードバック。	
[教科書・参考書等] 教科書: 中野常男編著『複式簿記の構造と機能』同文館出版、2007 年 参考書: 無し	
[評価方法] (1) 試験・テストについて 行わない。 (2) 試験以外の評価方法 報告に関する質疑の内容。	

(3)成績の配分・評価基準等

レポートと授業中のディスカッションを総合的に判断して評価する。

[準備学習]

事前学習:報告準備のための文献調査。(120分)

事後学習:報告した内容の精査。(120分)

事前に課題を提示し、その課題に対する自分なりの考えを纏めてもらい、授業終了後にその結果をレポートとして提示してもらおう。

[科目の位置づけと他科目との関連]

本授業は、会計学全般ならびに経営管理、財務論等の知識を基礎としているので、管理会計論特殊研究、会計学原理特殊研究、経営管理特殊研究等の授業をあわせて履修することが望ましい。

[担当教員へのアクセス]

研究室:3号館2階 3218号室

[オフィスアワー]

時間帯:随時受け付ける。

場所:3号館2階 3218号室

簿記原理特殊研究 B (Advanced Theory of Book-keeping B)

担当者	教授 関根 慎吾
[単位・開講期] 2 単位・後期	
[授業概要] 経済のグローバル化ないしボーダーレス化に伴う会計基準の国際的調和化の動きなどによって、社会の基本的インフラとしての会計を取り巻く環境は大きく変貌している。その中で「簿記」に対する認識も大きく変わろうとしている。本講では「簿記」を日本的なものとして捉えたときに、未来志向として IT 技術の進展の中でどのような役割を担っていくべきかを考える上で、重要となる簿記の本質観を、歴史的な研究から考察していく。	
[到達目標] 財務会計分野の博士論文の作成を志す学生諸君に役立つ知識を身につけるとともに、税理士、公認会計士等の会計専門職の資格をねらう学生諸君の計算能力の向上ならびに、実務で直面するであろう会計情報システムへの考え方の基礎を涵養することも目標としている。	
<授業の方法>	
[授業形態] 【対面形式】 授業内容の説明と報告による質疑応答。	
[授業計画(前期)]	
<ol style="list-style-type: none"> (1) [対面] ガイダンス:我が国に固有の会計制度 (2) [対面] 日本古代の初期荘園会計(1)－歴史的背景 (3) [対面] 日本古代の初期荘園会計(2)－決算報告制度 (4) [対面] 日本古代の初期荘園会計(3)－帳簿制度 (5) [対面] 日本古来の受託責任(会計責任)概念 (6) [対面] 日本古代の決算報告制度 (7) [対面] 簿記原理特殊研究総合演習(1)－日本古代の会計 (8) [対面] 中世荘園と寺院の会計(1)－歴史的背景 (9) [対面] 中世荘園と寺院の会計(2)－決算報告制度 (10) [対面] 中世荘園と寺院の会計(3)－帳簿制度 (11) [対面] 前近代の東アジアと日本帳合法(1)－歴史的背景 (12) [対面] 前近代の東アジアと日本帳合法(2)－中国の簿記研究 (13) [対面] 前近代の東アジアと日本帳合法(3)－朝鮮固有の簿記史 (14) [対面] 前近代の東アジアと日本帳合法(4)－日本固有の帳簿組織 (15) [対面] まとめ 	
[アクティブラーニングの取り入れ状況] 報告と質疑応答。	
[課題に対するフィードバック方法] 質疑応答によるフィードバック。	
[教科書・参考書等] 教科書:安藤英義監修 田中孝治著『古代・中世帳合法の研究』森山書店、2023年 参考書:無し	
[評価方法]	
<ol style="list-style-type: none"> (1) 試験・テストについて 行わない。 (2) 試験以外の評価方法 	

報告に関する質疑の内容。

(3)成績の配分・評価基準等

レポートと授業中のディスカッションを総合的に判断して評価する。

[準備学習]

事前学習:報告準備のための文献調査。(120分)

事後学習:報告した内容の精査。(120分)

事前に課題を提示し、その課題に対する自分なりの考えを纏めてもらい、授業終了後にその結果をレポートとして提示してもらう。

[科目の位置づけと他科目との関連]

本授業は、会計学全般ならびに経営管理、財務論等の知識を基礎としているので、管理会計論特殊研究、会計学原理特殊研究、経営管理特殊研究等の授業をあわせて履修することが望ましい。

[担当教員へのアクセス]

研究室:3号館2階 3218号室

[オフィスアワー]

時間帯:随時受け付ける。

場所:3号館2階 3218号室

租税法特殊研究 A (Advanced Tax Law A)

担当者	教授 岡野 知子
<p>[単位・開講期] 2 単位・前期</p> <p>[授業概要] ①租税法の意義と性質の理解 ②租税法の基本原則である租税法律主義、租税公平主義の内容の理解 ③租税実体法の課税要件の理解 ④租税判例研究 以上の 4 項目について下記の授業計画に従い修得する。</p> <p>[到達目標] 社会における租税の意義とその重要性を理解したうえで、理論と制度の両面から租税法を修得する</p> <p><授業の方法> [授業形態] 【対面形式】 授業計画に沿った内容の説明と質疑応答。</p> <p>[授業計画] (1) 租税の意義 [対面] (2) 租税の根拠 [対面] (3) 租税法の意義 [対面] (4) 租税制度の沿革 [対面] (5) 租税法の基本原則 ① (租税法律主義) [対面] (6) 租税法の基本原則 ② (租税公平主義) [対面] (7) 租税法の基本原則 ③ (自主財政主義) [対面] (8) 租税法の法源 [対面] (9) 租税法の解釈と適用 [対面] (10) 租税実体法の意義 [対面] (11) 租税要件総論 (納税義務者) [対面] (12) 租税法の基本原則 (課税物件) [対面] (13) 租税法の基本原則 (課税標準と税率) [対面] (14) 課税要件各論① (総説) [対面] (1) (15) 課税要件各論② (総説) [対面] 各授業では、事前学習 (授業のテーマに沿ったレジュメの作成および資料収集) 後、授業でディスカッションをおこない、事後学習 (授業で習得した内容の復習) をおこなうこと。</p> <p>[アクティブラーニングの取り入れ状況] 授業でレジュメ等をもとにディスカッションを行う。</p> <p>[課題に対するフィードバック方法] ディスカッション後の提出レポートにコメントを付し返却する。</p> <p>[教科書・参考書等] 教科書: 金子 宏著 『租税法』第 23 版 弘文堂 6,500 円+税 参考書: 適宜紹介する。</p> <p>[評価方法] (1) 試験・テストについて</p>	

実施しない。

(2) 試験以外の評価方法

レジュメ、報告内容、ディスカッション内容・参加度による評価方法。

(3) 成績の配分・評価基準等

レジュメ、報告、ディスカッションにより総合的に評価する。

[準備学習]

事前学習: 授業のテーマに沿ったレジュメの作成および資料収集。(120分)

事後学習: 授業で習得した内容の復習。(120分)

[授業以外の学習方法]

- ・雑誌掲載論文、書籍、新聞等の資料収集
- ・レジュメおよび論文作成方法の習得、Power Point による報告内容の作成およびプレゼンテーションの練習
- ・ディスカッションへの活発な参加

[科目の位置づけと他科目との関連]

会計科目、民法、会社法と密接な関係があるので、併せて受講または研究してほしい。

[担当教員へのアクセス]

研究室: 3号館2階 3209号室

[オフィスアワー]

時間帯: 授業終了後または昼休み

場所: 研究室(3号館2階 3209号室)

[備考]

質問はメールにでも受け付ける。

租税法特殊研究 B (Advanced Tax Law B)

担当者	教授 岡野 知子
[単位・開講期] 2 単位・後期	
[授業概要] ①租税法の意義と性質の理解 ②租税法の基本原則である租税法律主義、租税公平主義の内容の理解 ③租税実体法の課税要件の理解 ④租税判例研究 以上の 4 項目について下記の授業計画に従い修得する。	
[到達目標] 社会における租税の意義とその重要性を理解したうえで、理論と制度の両面から租税法を修得する	
<授業の方法>	
[授業形態] 【対面形式】 授業計画に沿った内容の説明と質疑応答。	
[授業計画] (1) 所得税総説 [対面] (2) 所得税の基本的仕組 [対面] (3) 各種所得の意義と範囲 [対面] (4) 法人税総説 [対面] (5) 法人所得の意義と計算 [対面] (6) 法人組織税制 [対面] (7) 国際取引と所得課税 [対面] (8) 相続税および贈与税総説① [対面] (9) 相続税および贈与税総説② [対面] (10) 財産評価 [対面] (11) 事業承継税制 [対面] (12) 消費税総説 [対面] (13) 消費税の基本的仕組 [対面] (14) 判例研究① [対面] (15) 判例研究② [対面] 各授業では、事前学習（授業のテーマに沿ったレジュメの作成および資料収集）後、授業でディスカッションをおこない、事後学習（授業で習得した内容の復習）をおこなうこと。	
[アクティブラーニングの取り入れ状況] 授業でレジュメ等をもとにディスカッションを行う。	
[課題に対するフィードバック方法] ディスカッション後の提出レポートにコメントを付し返却する。	
[教科書・参考書等] 教科書：金子 宏著 『租税法』第 23 版 弘文堂 6,500 円+税 参考書：適宜紹介する。	
[評価方法]	

(1)試験・テストについて
実施しない。

(2)試験以外の評価方法
レジュメ、報告内容、ディスカッション内容・参加度による評価方法。

(3)成績の配分・評価基準等
レジュメ、報告、ディスカッションにより総合的に評価する。

[準備学習]

事前学習:授業のテーマに沿ったレジュメの作成および資料収集。(120分)

事後学習:授業で習得した内容の復習。(120分)

[授業以外の学習方法]

- ・雑誌掲載論文、書籍、新聞等の資料収集
- ・レジュメおよび論文作成方法の習得、Power Point による報告内容の作成およびプレゼンテーションの練習
- ・ディスカッションへの活発な参加

[科目の位置づけと他科目との関連]

会計科目、民法、会社法と密接な関係があるので、併せて受講または研究してほしい。

[担当教員へのアクセス]

研究室:3号館2階 3209号室

[オフィスアワー]

時間帯:授業終了後または昼休み

場所:研究室(3号館2階 3209号室)

[備考]

質問はメールにでも受け付ける。

会計学演習 (Research in Accounting)

担当者	専任教員
<p>[単位・開講期] 12 単位 (3 年間)</p> <p>[授業概要] 博士論文の研究課題に関係する文献の調査、演習および討論等を行う。</p> <p>[到達目標] 研究書を読破し、プレゼンをできる。</p> <p><授業の方法></p> <p>[授業形態] 【対面形式】【非対面形式】指導教員に基づく。 演習。</p> <p>[授業計画] 論文テーマの選定と論文作成のための質疑応答を毎回行う。</p> <p>[アクティブラーニングの取り入れ状況] 報告とその質疑応答。</p> <p>[課題に対するフィードバック方法] 質疑応答によるフィードバック。</p> <p>[教科書・参考書等] 別途指示する。</p> <p>[評価方法] (1) 試験・テストについて 行わない。 (2) 試験以外の評価方法 報告に関する質疑の内容。 (3) 成績の配分・評価基準等 発表・討論等の状況を総合的に評価する。</p> <p>[準備学習] 事前学習: 論文テーマに関する文献調査、報告準備。(120 分) 事後学習: 報告した内容の精査。(120 分) 博士論文のテーマに関する調査研究は元より、会計学関連の諸科目についても広く研究してほしい。</p> <p>[科目の位置づけと他科目との関連] 同上</p> <p>[担当教員へのアクセス] 研究室: 指導教員の指示に基づく。</p> <p>[オフィスアワー] 時間帯: 指導教員の指示に基づく。 場所: 指導教員の指示に基づく。</p>	

経営統計学特殊研究A (Advanced Business Statistics A)

担当者	教授 岩浅 巧
[単位・開講期] 2 単位・前期	
[授業概要] 経済・経営で見られる様々なデータを適切に扱うために、データ収集、データの整理、可視化、確率、確率分布の基礎を学ぶ。多数の例を通じて統計の基本的な考え方を理解するとともに、実際のデータを処理するための基礎的なプログラム作成にも取り組む。これにより、データの特徴を把握し、得られた結果を経済・経営の文脈に即して説明するための基礎力を養う。	
[到達目標] ・経済・経営データの収集方法、整理方法、可視化の基本を理解し、説明できる。 ・確率および確率分布の基礎概念を理解し、統計分析の前提として位置づけることができる。 ・基礎的なプログラムを用いてデータの集計、可視化、基本的な統計量の計算ができる。	
<授業の方法>	
[授業形態]	
【対面形式】 対面形式の授業を行う。	
[授業計画] (1) ガイダンス (2) データ収集(1): 経済・経営データの種類と入手方法 (3) データ収集(2): 標本、調査、データ記録の基本 (4) データ収集(3): 欠測値、異常値、データの確認 (5) データのまとめ方とグラフ(1): 度数分布、表による整理 (6) データのまとめ方とグラフ(2): ヒストグラム、棒グラフ、散布図 (7) データのまとめ方とグラフ(3): 代表値、散布度、可視化による特徴把握 (8) 確率(1): 確率の考え方と事象 (9) 確率(2): 条件付き確率と独立 (10) 確率(3): 確率変数と期待値 (11) 確率(4): 分散、標準偏差、確率の応用 (12) 確率(5): 経済・経営データにおける確率的な見方 (13) 確率分布(1): 離散型確率分布 (14) 確率分布(2): 連続型確率分布と正規分布 (15) 確率分布(3): 標準化、分布の理解、まとめ	
[アクティブラーニングの取り入れ状況] 演習課題、分析結果の討議、事例に基づく検討を通じて、アクティブラーニングを実施する。	
[課題に対するフィードバック方法] 課題提出後に解説を行う。	
[教科書・参考書等] 教科書: 使用しない。 参考書: 参考書籍や参考論文については、適宜講義中に紹介する。	
[評価方法] (1) 試験・テストについて 実施しない。	

(2)試験以外の評価方法

講義内での発表と事前課題、討論への参加等。

(3)成績の配分・評価基準等

講義内での発表と事前課題(60%)、討論への参加状況(40%)等を総合的に評価する。

[準備学習]

事前学習:予習として指定書籍や指定論文の該当箇所について事前読了を求め、かつレジュメにまとめて講義時に発表してもらうことがある。各回の予習には90分~120分かかると想定される。

事後学習:復習として、指定書籍や指定論文の該当箇所を再読し、必要に応じてレジュメにまとめることを求めることがある。各回の復習には90分~120分かかると想定される。

[科目の位置づけと他科目との関連]

経営統計学特論で扱う内容を習得できていることを前提とする。

[担当教員へのアクセス]

研究室:3号館2階 3214号室

[オフィスアワー]

時間帯:随時。授業終了後でも可。

場所:研究室3号館2階 3214号室

[備考]

講義内容に関する質問は、随時受け付ける。

経営統計学特殊研究 B (Advanced Business Statistics B)

担当者	教授 岩浅 巧
[単位・開講期] 2 単位・後期	
[授業概要] 本授業は、経営統計学特殊研究 A で学んだ基礎を踏まえ、推定、検定、相関分析、回帰分析など、より実践的な統計分析を扱う科目である。経済・経営データを対象に、適切な統計手法を選択し、実際のデータを処理するプログラムを作成しながら分析を進める。分析結果を数値として示すだけでなく、その意味を解釈し、経済・経営の文脈に即して説明する力を養う。	
[到達目標] ・推定、検定、相関、回帰などの基本的な統計手法を理解し、目的に応じて使い分けができる。 ・実データに対して適切な統計解析を行うための基礎的なプログラムを作成できる。 ・分析結果を整理し、経済・経営の観点から論理的に説明・報告できる。	
<授業の方法>	
[授業形態]	
【対面形式】 対面形式の授業を行う。	
[授業計画]	
(1) ガイダンス (2) 特殊研究 A の復習: データ整理、確率、確率分布の確認 (3) 標本分布と推測統計の考え方 (4) 推定(1): 点推定の基礎 (5) 推定(2): 信頼区間の考え方 (6) 検定(1): 仮説検定の基本 (7) 検定(2): 平均に関する検定 (8) 検定(3): 比率、カテゴリデータの検討 (9) 相関分析: 相関係数と関係の読み取り (10) 回帰分析(1): 単回帰モデルの考え方 (11) 回帰分析(2): 重回帰モデルの基礎 (12) 分析プログラム作成(1): 実データの処理と結果の出力 (13) 分析プログラム作成(2): 結果の整理と可視化 (14) 事例分析・発表: 分析結果の報告と討論 (15) まとめ	
[アクティブラーニングの取り入れ状況] 演習課題、分析結果の討議、事例に基づく検討を通じて、アクティブラーニングを実施する。	
[課題に対するフィードバック方法] 課題提出後に解説を行う。	
[教科書・参考書等] 教科書: 使用しない。 参考書: 参考書籍や参考論文については、適宜講義中に紹介する。	
[評価方法] (1) 試験・テストについて 実施しない。	

(2)試験以外の評価方法

講義内での発表と事前課題、討論への参加等。

(3)成績の配分・評価基準等

講義内での発表と事前課題(60%)、討論への参加状況(40%)等を総合的に評価する。

[準備学習]

事前学習:予習として指定書籍や指定論文の該当箇所について事前読了を求め、かつレジュメにまとめて講義時に発表してもらうことがある。各回の予習には90分~120分かかると想定される。

事後学習:復習として、指定書籍や指定論文の該当箇所を再読し、必要に応じてレジュメにまとめることを求めることがある。各回の復習には90分~120分かかると想定される。

[科目の位置づけと他科目との関連]

経営統計学特論で扱う内容を習得できていることを前提とする。

[担当教員へのアクセス]

研究室:3号館2階 3214号室

[オフィスアワー]

時間帯:随時。授業終了後でも可。

場所:研究室3号館2階 3214号室

[備考]

講義内容に関する質問は、随時受け付ける。

情報ネットワーク論特殊研究 A (Advanced Study on Internet Programming A)

担当者	教授 佐々木 万亀夫
[単位・開講期]	2 単位・前期
[授業概要]	<p>現在、量子コンピュータのハードウェアやアルゴリズムが研究されている。量子コンピュータは今後世の中に普及していくものと思われる。授業では量子コンピュータを取り上げて基本から解説していく。また、量子コンピュータに関わるプログラミングについて実習を行う。</p> <p>量子力学に必要な数学について経営の学生にも理解できるように解説する。続いて量子力学の基本について解説する。最後に量子コンピュータの原理を理解できるところまで話を進める。</p>
[到達目標]	<ul style="list-style-type: none">・量子力学の考え方を理解できるようになる。・量子コンピュータの原理について理解できるようになる。・量子コンピュータを使用することを前提としたプログラミングを行うことができるようになる。・量子コンピュータに関わる用語を使って開発側と情報を共有しビジネスに活かせるようになる。
<授業の方法>	
[授業形態]	
【対面形式】	前期は教科書をもとに説明を行う。後期は教科書をもとに説明と実習を行う。
[授業計画]	<ol style="list-style-type: none">(1) 複素数 [対面](2) 数列 [対面](3) 行列 [対面](4) 行列の計算 [対面](5) 基本的な微分 [対面](6) 微分 (三角関数) [対面](7) 基本的な積分 [対面](8) 積分 (三角関数) [対面](9) 偏微分 [対面](10) 微分方程式 [対面](11) 量子的な性質 [対面](12) 波動的観点と粒子的観点 [対面](13) 確率振幅 [対面](14) スピン 1 [対面](15) スピン 1/2 [対面]
[アクティブラーニング取り入れ状況]	プログラミングの実習や、与えられた課題についてプレゼンテーションを行ってもらう。
[課題に対するフィードバック方法]	振り返り用のレポートをもとに学生が理解しやすいように実習を見直していく。
[教科書・参考書等]	<p>教科書:</p> <ul style="list-style-type: none">・丸山 耕司 (監修), 北野 章 翻訳、『動かして学ぶ量子コンピュータプログラミング —シミュレータとサンプルコードで理解する基本アルゴリズム』、Eric R. Johnston, Nic Harrigan, Mercedes Gimeno-Segovia, オライリー・ジャパン、2020

・その他プリントを配布する。

参考書：

・砂川重彦訳、『ファインマン物理学Ⅴ量子力学』、岩波書店、1986

・その他適宜指示する。

[評価方法]

(1) 試験・テストについて

試験は行わない。

(2) 試験以外の評価方法

毎回、授業の振り返りのために簡単なレポートを提出してもらう。また、専門用語の理解、質問に対する用語の適切な使い方、プログラミングの能力に対し評価を行う。

(3) 成績の配分・評価基準など

毎回のレポートと実習により評価を行う。毎回のレポートにおいては専門用語を理解しているか、実習においては作業の進行状況を見て評価を行う。量子コンピューティングに関わる用語の理解(60%)、プログラミング(40%)の配分となる。

[準備学習]

事前学習:この授業では、量子コンピュータという最新の話題を取り上げるため数学の知識が必要になってくる。授業では学生の進度に合わせて具体的に説明していくが予習や復習をして理解を深めるようにしてもらいたい。(120分)

事後学習:数学や量子力学の考え方について理解し慣れるためには復習を行う必要がある。疑問に思った点についてはすぐに質問してもらいたい。その時に自分がわからない部分について相手に質問の意図がはっきりわかるように説明してもらいたい。時間外においてはメールで質問してもらう。当日中に回答する予定である。(120分)

[科目の位置づけと他科目との関連]

数学、物理学、経済学、統計学の基本を身につけておくことが望ましい。またプログラミングに関わる授業や実習を履修し、プログラミングの基本を身につけておく必要がある。

[担当教員へのアクセス]

研究室:3号館1階3120号室

メールアドレス:msasaki@isenshu-u.ac.jp

[オフィスアワー]

時間帯:随時

場所:3120 研究室

[備考]

特になし。

情報ネットワーク論特殊研究 B (Advanced Study on Internet Programming B)

担当者	教授 佐々木 万亀夫
<p>[単位・開講期] 2 単位・後期</p> <p>[授業概要] 現在、量子コンピュータのハードウェアやアルゴリズムが研究されている。量子コンピュータは今後世の中に普及していくものと思われる。授業では量子コンピュータを取り上げて基本から解説していく。また、量子コンピュータに関わるプログラミングについて実習を行う。 量子コンピュータを使用することを前提としたプログラミングの実習を行う。プログラミング言語として Python を使用する。最後に経営においてどのようなデータ分析に利用することができそうかについて調べ発表してもらう。</p> <p>[到達目標] ・量子力学の考え方を理解できるようになる。 ・量子コンピュータの原理について理解できるようになる。 ・量子コンピュータを使用することを前提としたプログラミングを行うことができるようになる。 ・量子コンピュータに関わる用語を使って開発側と情報を共有しビジネスに活かせるようになる。</p> <p><授業の方法> [授業形態] 【対面形式】 前期は教科書をもとに説明を行う。後期は教科書をもとに説明と実習を行う。</p> <p>[授業計画] (1) 振幅の時間依存性 [対面] (2) ハミルトン行列 [対面] (3) 独立粒子近似 [対面] (4) 振幅の位置依存性 [対面] (5) 対称性と保存則 [対面] (6) 角運動量 [対面] (7) 演算子 [対面] (8) シュレーディンガー方程式 [対面] (9) 量子コンピュータについて [対面] (10) 量子ビット [対面] (11) 量子ゲート [対面] (12) 量子回路 [対面] (13) 量子アルゴリズム [対面] (14) 量子暗号について [対面] (15) 量子コンピューティングの現状について調べプレゼンテーションしてもらう [対面]</p> <p>[アクティブラーニング取り入れ状況] プログラミングの実習や、与えられた課題についてプレゼンテーションを行ってもらう。</p> <p>[課題に対するフィードバック方法] 振り返り用のレポートをもとに学生が理解しやすいように実習を見直していく。</p> <p>[教科書・参考書等] 教科書： ・丸山 耕司 (監修), 北野 章 翻訳、『動かして学ぶ量子コンピュータプログラミング —シミュレータとサンプルコードで理解する基本アルゴリズム』、Eric R. Johnston, Nic Harrigan, Mercedes Gimeno-</p>	

Segovia, オライリージャパン、2020

・その他プリントを配布する。

参考書:

・砂川重彦訳、『ファインマン物理学Ⅴ量子力学』、岩波書店、1986

・その他適宜指示する。

[評価方法]

(1) 試験・テストについて

試験は行わない。

(2) 試験以外の評価方法

毎回、授業の振り返りのために簡単なレポートを提出してもらう。また、専門用語の理解、質問に対する用語の適切な使い方、プログラミングの能力に対し評価を行う。

(3) 成績の配分・評価基準など

毎回のレポートと実習により評価を行う。毎回のレポートにおいては専門用語を理解しているか、実習においては作業の進行状況を見て評価を行う。量子コンピューティングに関わる用語の理解(60%)、プログラミング(40%)の配分となる。

[準備学習]

事前学習:この授業では、量子コンピュータという最新的话题を取り上げるため数学の知識が必要になってくる。授業では学生の進度に合わせて具体的に説明していくが予習や復習をして理解を深めるようにしてもらいたい。(120分)

事後学習:数学や量子力学の考え方について理解し慣れるためには復習を行う必要がある。疑問に思った点についてはすぐに質問してもらいたい。その時に自分がわからない部分について相手に質問の意図がはっきりわかるように説明してもらいたい。時間外においてはメールで質問してもらう。当日中に回答する予定である。(120分)

[科目の位置づけと他科目との関連]

数学、物理学、経済学、統計学の基本を身につけておくことが望ましい。またプログラミングに関わる授業や実習を履修し、プログラミングの基本を身につけておく必要がある。

[担当教員へのアクセス]

研究室:3号館1階3120号室

メールアドレス:msasaki@isenshu-u.ac.jp

[オフィスアワー]

時間帯:随時

場所:3120研究室

[備考]

特になし。

情報資源管理論特殊研究 A (Advanced Study in the Security of Information Resources A)

担当者	教授 工藤 周平
[単位・開講期]	2 単位・前期
[授業概要]	<p>情報はヒト・モノ・カネと同様に企業の重要な経営資源になっており、企業の経営者は情報資源の管理に主体的に関与することが求められている。情報資源は単なる業務効率化の道具としてだけでなく競争上の武器にもなりうる資源であり、情報資源から戦略的価値を獲得するためには経営者が経営資源を理解し、その管理においてリーダーシップを発揮していかなければならない。</p> <p>本講義では、情報や情報通信技術といった情報資源で構成される経営情報システムについて経営者の立場での管理方法について学習する。授業の各トピックについて現代的な考察を行い、経営者が情報資源をどのように管理する必要があるのかについて理解を深める。</p>
[到達目標]	<p>学生が、情報資源の戦略的な価値を理解し、経営者の立場に立ったときの情報資源の管理方法を理解する。現代の経営者による情報資源管理の問題について主体的に考え、実践的指針を示すことができる。</p>
<授業の方法>	
[授業形態]	
【対面形式】	板書とパワーポイントを活用しながら、講義形式ですすめる。
[授業計画]	<ol style="list-style-type: none">(1) ガイダンス(2) 情報の時代[対面](3) 情報システム戦略の策定に対する経営者の関与[対面](4) 経営情報システムの構成要素[対面](5) コンピュータ・ハードウェア[対面](6) コンピュータ・ソフトウェア[対面](7) トランザクション処理[対面](8) トランザクション処理システムの設計[対面](9) 意思決定支援システム[対面](10) アプリケーション・ソフトウェアの開発[対面](11) 高生産性開発ツール[対面](12) 情報の経済学[対面](13) システム概念[対面](14) MIS 戦略を成功させる基盤[対面](15) MIS 戦略を成功させる[対面]
[アクティブラーニングの取り入れ状況]	毎回の講義の内容について学生にプレゼンテーションを課す。講義テーマについて、ディスカッションを行う。
[課題に対するフィードバック方法]	提出課題にコメントを記入し返却する。
[教科書・参考書等]	<p>教科書：ジェームス・C・エメリ、『エグゼクティブのための経営情報システムー戦略的情報管理』、TBS ブリタニカ、1989年。</p> <p>参考書：必要に応じて講義中に紹介する</p>

[評価方法]**(1) 試験・テストについて**

試験・テストは実施しない

(2) 試験以外の評価方法

学生の報告の内容、レポートなどの提出物、議論やグループワーク等の評価する

(3) 成績の配分・評価基準等

報告内容の評価:50%、提出物の評価:30%、議論の評価:20%

報告内容:各授業テーマの理解度、プレゼン資料などの発表方法を見る。

提出物の評価:レポートや課題を課し、それらが指示通りの内容か、深く考えられているか、思考を発展させてまとめられているか、を見る。

議論の評価:論理性、妥当性、意欲を見る。

[準備学習]

事前学習:次回の授業内容に該当する部分について調査し、疑問点などをまとめる。(120分)

事後学習:授業内容に関連した最近の企業経営の現象について学習した知識を用いて分析する。(120分)

[科目の位置づけと他科目との関連]

情報資源管理論特論 A・B の理解が必要となる。

[担当教員へのアクセス]

研究室:3号館1階3116室

メールアドレス: s3467012@edu.isenshu-u.ac.jp

[オフィスアワー]

時間帯:火曜5限(16時50分~18時20分)

場所:研究室(3号館1階3116室)

※オフィスアワーなどで研究室を訪問する際は、前もって連絡すること

情報資源管理論特殊研究 B (Advanced Study in the Security of Information Resources B)

担当者	教授 工藤 周平
[単位・開講期]	2 単位・後期
[授業概要]	<p>情報はヒト・モノ・カネと同様に企業の重要な経営資源になっており、企業の経営者は情報資源の管理に主体的に関与することが求められている。企業を取り巻く環境は不確実性を増しており、経営戦略の立案とその管理はますます複雑化している。現代では情報資源の活用なくして有効な経営戦略を立案することはできなくなっている。</p> <p>本講義では、経営戦略支援システムに焦点を当てて経営者による経営戦略立案のための情報資源の管理方法について学習する。授業の各トピックについて現代的な考察を行い、経営戦略立案のために情報資源をどのように管理する必要があるのかについて理解を深める。</p>
[到達目標]	<p>学生が、経営戦略立案のための情報資源の管理方法を理解する。経営戦略立案のための情報資源管理の現代の問題について主体的に考え、実践的指針を示すことができる。</p>
<授業の方法>	
[授業形態]	
【対面形式】	板書とパワーポイントを活用しながら、講義形式ですすめる。
[授業計画]	<ol style="list-style-type: none">(1) ガイダンス(2) 経営トップとコンピューター[対面](3) ESSとは何か[対面](4) ESSと経営トップの業務の特徴[対面](5) 組織の計画立案・管理システム[対面](6) 事務作業への ESS の応用[対面](7) 計画立案と管理への ESS の応用[対面](8) ESS によるメンタル・モデルの強化[対面](9) ESS の導入と導入推進者の役割[対面](10) 情報システム資源:人的資源[対面](11) 情報システム資源:ESS の技術[対面](12) 情報システム資源:データ[対面](13) システムとビジネス目標の結合[対面](14) 社内の抵抗の予測と回避[対面](15) ESS の発展と普及の管理[対面]
[アクティブラーニングの取り入れ状況]	毎回の講義の内容について学生にプレゼンテーションを課す。講義テーマについて、ディスカッションを行う。
[課題に対するフィードバック方法]	提出課題にコメントを記入し返却する。
[教科書・参考書等]	教科書:John F. Rockart and David W. De Long、『経営戦略支援システム』、日経 BP 社、1989 年。 参考書:必要に応じて講義中に紹介する
[評価方法]	

(1)試験・テストについて

試験・テストは実施しない

(2)試験以外の評価方法

学生の報告の内容、レポートなどの提出物、議論やグループワーク等を評価する

(3)成績の配分・評価基準等

報告内容の評価:50%、提出物の評価:30%、議論の評価:20%

報告内容:各授業テーマの理解度、プレゼン資料などの発表方法を見る。

提出物の評価:レポートや課題を課し、それらが指示通りの内容か、深く考えられているか、思考を発展させてまとめられているか、を見る。

議論の評価:論理性、妥当性、意欲を見る。

[準備学習]

事前学習:次回の授業内容に該当する部分について調査し、疑問点などをまとめる。(120分)

事後学習:授業内容に関連した最近の企業経営の現象について学習した知識を用いて分析する。(120分)

[科目の位置づけと他科目との関連]

情報資源管理論特論 A・B、情報資源管理論特殊研究 A の理解が必要となる。

[担当教員へのアクセス]

研究室:3号館1階3116室

メールアドレス: s3467012@edu.isenshu-u.ac.jp

[オフィスアワー]

時間帯:火曜5限(16時50分~18時20分)

場所:研究室(3号館1階3116室)

※オフィスアワーなどで研究室を訪問する際は、前もって連絡すること

シミュレーション論特殊研究 A (Advanced Simulation A)

担当者	教授 佐々木 万亀夫
<p>[単位・開講期] 2 単位・前期</p> <p>[授業概要] シミュレーションモデルを作り上げるためには、多方面の分野にまたがる知識が重要であり、その多くが数学的な背景を持っている。そのため、本格的なシミュレーションを目指すためには、ここを避けては通れない。また、経営工学的な部分としてオペレーションズ・リサーチも欠かせない分野である。 このような見地から数量化、関数、確率などを含めて、総合的に演習を含めながら進め、経営学的に有用なシミュレーションとなるように作り上げていく</p> <p>[到達目標] 適切な手法の選択により、明確なモデル設計を目標とする。</p> <p><授業の方法></p> <p>[授業形態] 【対面形式】 資料に基づいて説明をした後に実習を行う。</p> <p>[授業計画] (1) 整数論1[対面] (2) 整数論2[対面] (3) 整数論3[対面] (4) 整数論4[対面] (5) 微積分1[対面] (6) 微積分2[対面] (7) 最適化1[対面] (8) 最適化2[対面] (9) 最適化3[対面] (10) シミュレーションモデル研究1[対面] (11) シミュレーションモデル研究2[対面] (12) シミュレーションモデル研究3[対面] (13) 暗号のアルゴリズム・プログラム1[対面] (14) 暗号のアルゴリズム・プログラム2[対面] (15) 暗号のアルゴリズム・プログラム3[対面]</p> <p>[アクティブラーニングの取り入れ状況] アクティブラーニングは実施しない。</p> <p>[課題に対するフィードバック方法] 課題提出後に解説を行う。</p> <p>[教科書・参考書等] 教科書:特に指定しない 参考書:関根智明・高橋磐郎・若山邦紘著「シミュレーション」日科技連 近藤次郎著「数学モデル入門」日科技連 石村園子著「やさしく学べる微分積分」共立出版 結城浩著「暗号技術入門」ソフトバンクパブリッシング 森雅夫・森戸進 他著「オペレーションズ・リサーチ I、II」朝倉書店</p>	

[評価方法]

- (1) 試験・テストについて
実施しない。
- (2) 試験以外の評価方法
レポートと課題モデルによる評価。
- (3) 成績の配分・評価基準等
毎回のレポート(50%)と課題モデル(50%)により評価する。

[準備学習]

事前学習: ソフトウェアの可読性、相互依存性について、事前学習しておくこと。(120分)
事後学習: 数学モデルについての理解が必要となるので、基礎的部分については、事前に復習しておく事。
(120分)

[科目の位置づけと他科目との関連]

経営学、オペレーションズ・リサーチ等、シミュレーションを行う上で、必要な部分を各自学んでおく事。

[担当教員へのアクセス]

研究室: 3号館1階 3120号館

[オフィスアワー]

時間帯: 随時。授業終了後でも可。
場所: 研究室3号館1階 3120号館

シミュレーション論特殊研究 B (Advanced Simulation B)

担当者	教授 佐々木 万亀夫
[単位・開講期] 2 単位・後期	
[授業概要] シミュレーションモデルを作り上げるためには、多方面の分野にまたがる知識が重要であり、その多くが数学的な背景を持っている。そのため、本格的なシミュレーションを目指すためには、ここを避けては通れない。また、経営工学的な部分としてオペレーションズ・リサーチも欠かせない分野である。 このような見地から数量化、関数、確率などを含めて、総合的に演習を含めながら進め、経営学的に有用なシミュレーションとなるように作り上げていく	
[到達目標] 適切な手法の選択により、明確なモデル設計を目標とする。	
<授業の方法>	
[授業形態]	
【対面形式】 資料に基づいて説明をした後に実習を行う。	
[授業計画]	
<ul style="list-style-type: none"> (1) 決定的モデルのシミュレーション[対面] (2) 経営モデルのシミュレーション[対面] (3) 経済モデルのシミュレーション[対面] (4) 確率的モデルのシミュレーションと乱数[対面] (5) モンテカルロ法[対面] (6) 在庫管理[対面] (7) 待ち行列[対面] (8) フラクタル[対面] (9) カオス[対面] (10) 機械学習1[対面] (11) 機械学習2[対面] (12) 遺伝的アルゴリズム1[対面] (13) 遺伝的アルゴリズム2[対面] (14) セルとエージェントによるシミュレーション1[対面] (15) セルとエージェントによるシミュレーション2[対面] 	
[アクティブラーニングの取り入れ状況] アクティブラーニングは実施しない。	
[課題に対するフィードバック方法] 課題提出後に解説を行う。	
[教科書・参考書等] 教科書：伊藤俊秀・草薙信照著、「コンピュータシミュレーション」、オーム社 参考書：中西俊男著、「コンピュータシミュレーション」、近代科学社 津田孝夫著、「モンテカルロ法とシミュレーション」、培風館	
[評価方法] (1) 試験・テストについて 実施しない。	

(2) 試験以外の評価方法

レポートと課題モデルによる評価。

(3) 成績の配分・評価基準等

毎回のレポート(50%)と課題モデル(50%)により評価する。

[準備学習]

事前学習: ソフトウェアの可読性、相互依存性について、事前学習しておくこと。(120分)

事後学習: 数学モデルについての理解が必要となるので、基礎的部分については、事前に復習しておく事。
(120分)

[科目の位置づけと他科目との関連]

経営学、オペレーションズ・リサーチ等、シミュレーションを行う上で、必要な部分を各自学んでおく事。

[担当教員へのアクセス]

研究室: 3号館 1階 3120号館

[オフィスアワー]

時間帯: 随時。授業終了後でも可。

場所: 研究室3号館 1階 3120号館

経営情報学演習 (Seminar of Business Information Theory)

担当者	専任教員
<p>[単位・開講期] 12 単位 (3 年間)</p>	
<p>[授業概要] 「経営情報学演習」では、「経営情報学」という専攻分野の枠内で、博士論文作成のための研究指導を行う。各々の研究テーマを設定した学生は、演習担当教員の指導のもと、文献の講読、資料の収集、調査分析等を行い、適当な時期に発表・討論しながら、さらにその研究を深めていき、最終的には博士論文の作成へと繋げる。</p>	
<p>[到達目標] 各演習担当教員の研究指導の下で研究能力を高め、各自の研究課題について博士論文をまとめる。</p>	
<p><授業の方法></p>	
<p>[授業形態] 【対面形式】を基本とする。 指導教員の指示に基づく。 文献講読、資料の分析、調査を行う。「授業・演習」形式である。</p>	
<p>[授業計画] 演習の初回到担当教員より説明があるが、概ね以下のような計画である。2年次には 1 年次の研究を深化し、3年次には博士論文執筆の指導を行なう。</p>	
<p>(前期)</p>	<p>(後期)</p>
(1) 研究テーマの決定	(16) 研究テーマの決定
(2) 研究計画作成	(17) 研究計画作成
(3) 研究テーマに関する文献の講読1	(18) 研究テーマに関する文献の講読1
(4) 研究テーマに関する文献の講読2	(19) 研究テーマに関する文献の講読2
(5) 研究テーマに関する文献の講読3	(20) 研究テーマに関する文献の講読3
(6) 研究テーマに関する文献の講読4	(21) 研究テーマに関する文献の講読4
(7) 研究テーマに関する文献の講読5	(22) 研究テーマに関する文献の講読5
(8) 研究テーマに関する資料の精査1	(23) 研究テーマに関する資料の精査1
(9) 研究テーマに関する資料の精査2	(24) 研究テーマに関する資料の精査2
(10) 研究テーマに関する資料の精査3	(25) 研究テーマに関する資料の精査3
(11) 研究テーマに関する資料の精査4	(26) 研究テーマに関する資料の精査4
(12) 研究テーマに関する資料の精査5	(27) 研究テーマに関する資料の精査5
(13) 研究テーマに関する調査分析1	(28) 研究テーマに関する調査分析1
(14) 研究テーマに関する調査分析2	(29) 研究テーマに関する調査分析2
(15) 研究テーマに関する調査分析3	(30) 研究テーマに関する調査分析3
<p>ディスカッションを適宜授業中に行う。</p>	
<p>[アクティブラーニングの取り入れ状況] ディスカッション、資料の分析、調査は、アクティブラーニングそのものである。</p>	
<p>[課題に対するフィードバック方法] 授業中に適宜フィードバックをする。</p>	
<p>[教科書・参考書等] 担当教員より別途指示する。</p>	
<p>[評価方法] (1) 試験・テストについて</p>	

担当教員より別途指示する。

(2)試験以外の評価方法

担当教員より別途指示する。

(3)成績の配分・評価基準等

討論の状況(20%)、論文内容(60%)、論文発表(20%)により評価する。

[準備学習]

担当教員より別途指示するが、合計で240分必要。

事前学習:事後学習と合わせて240分。

事後学習:事前学習と合わせて240分。

[授業以外の学習方法]

博士論文を執筆するにあたり、授業以外の時間を十分に活用して、必要な資料の収集、調査分析等を継続的に行なう必要がある。また、大学院生相互に研究に関する議論を活発に行なうこと。

[科目の位置づけと他科目との関連]

各学生が設定したテーマの博士論文作成のための研究指導を行うが、そのために履修が必要な科目については別途指示する。

[担当教員へのアクセス]

研究室:担当教員より別途指示する。

メールアドレス:担当教員より別途指示する。

[オフィスアワー]

時間帯:担当教員より別途指示する。

場所:担当教員より別途指示する。

[備考]

研究進行状況等について、各演習担当教員とのコミュニケーションを欠かさないこと。

外国語専門文献研究 A (Advanced Foreign Treatises A)

担当者	教授 丸岡 泰
[単位・開講期] I 単位・前期	
[授業概要] この科目では外国語の専門の文献を通して、国際観光の問題を理解することを目標とする。国際観光にかかわる基本問題の他、オーバーツーリズムの問題を取り上げる。参加学生は取り上げる各回の問題について英語文献を読み内容について発表を行い、教員との間で議論を行うことが求められる。適宜補助教材を使用する。文献の理解と議論により諸問題への理解を深化させる。	
[到達目標] 外国語の文献の読解になれることは勿論のこと、受講者が議論と意見交換を通して、国際観光について新しい知見を得ることができるようになることが目標である。	
<授業の方法>	
[授業形態]	
【対面形式】 文献講読が中心の「授業・演習」形式である。	
[授業計画]	
(1) 授業形態予定 [対面] What is international tourism? (2) 授業形態予定 [対面] International tourism definitions (3) 授業形態予定 [対面] Why is international tourism important? (4) 授業形態予定 [対面] Value to the economy (5) 授業形態予定 [対面] Foreign exchange earnings (6) 授業形態予定 [対面] Contribution to government revenues (7) 授業形態予定 [対面] Employment generation (8) 授業形態予定 [対面] Contribution to local economies (9) 授業形態予定 [対面] Overall economy boost (10) 授業形態予定 [対面] Value to society (11) 授業形態予定 [対面] International tourism statistics (12) 授業形態予定 [対面] What is overtourism and how can we overcome it? (13) 授業形態予定 [対面] What is overtourism? (14) 授業形態予定 [対面] Overcoming overtourism excesses (15) 授業形態予定 [対面] Solutions to address overtourism	
[アクティブラーニングの取り入れ状況] ディスカッションを行う。	
[課題に対するフィードバック方法] 授業中に適宜フィードバックをする。	
[教科書・参考書等] 教科書: What is international tourism and why is it important? (配布共有) What is overtourism and how can we overcome it? (配布共有) 参考書: 適宜指示する。	
[評価方法] (1) 試験・テストについて 実施しない。	

(2)試験以外の評価方法

教科書の内容理解等の平常点。

(3)成績の配分・評価基準等

受講者は毎回予め決められた講読部分を全訳して授業に参加することになるので、その訳出の仕方及び授業中のディスカッションの仕方を平常点(100%)として評価する。

[準備学習]

教科書の予習および復習が必要である。外国書がテキストであるため、予習には多くの時間を割いてもらいたい。

事前学習:教科書の予習(180分)

事後学習:教科書の予習および復習(60分)

[科目の位置づけと他科目との関連]

外国文献を講読する訓練であると同時に国際観光の基本的な問題のディスカッションの場である。

[担当教員へのアクセス]

研究室:3号館2階3215号室

メールアドレス:maruoka@isenshu-u.ac.jp

[オフィスアワー]

時間帯:随時

場所:3215研究室

[備考]

特になし。

外国語専門文献研究 B (Advanced Foreign Treatises B)

担当者	教授 丸岡 泰
[単位・開講期]	Ⅰ 単位・後期
[授業概要]	<p>この科目では外国語の専門の文献を通して、国際観光の問題を理解することを目標とする。国際観光にかかわる基本問題の他、オーバーツーリズムの問題を取り上げる。参加学生は取り上げる各回の問題について英語文献を読み内容について発表を行い、教員との間で議論を行うことが求められる。適宜補助教材を使用する。文献の理解と議論により諸問題への理解を深化させる。</p>
[到達目標]	<p>外国語の文献の読解になれることは勿論のこと、受講者が議論と意見交換を通して、国際観光について新しい知見を得ることができるようになることが目標である。</p>
<授業の方法>	
[授業形態]	
【対面形式】	文献講読が中心の「授業・演習」形式である。
[授業計画]	<ol style="list-style-type: none">(1)授業形態予定 [対面] What is international tourism?(2)授業形態予定 [対面] International tourism definitions(3)授業形態予定 [対面] Why is international tourism important?(4)授業形態予定 [対面] Value to the economy(5)授業形態予定 [対面] Foreign exchange earnings(6)授業形態予定 [対面] Contribution to government revenues(7)授業形態予定 [対面] Employment generation(8)授業形態予定 [対面] Contribution to local economies(9)授業形態予定 [対面] Overall economy boost(10)授業形態予定 [対面] Value to society(11)授業形態予定 [対面] International tourism statistics(12)授業形態予定 [対面] What is overtourism and how can we overcome it?(13)授業形態予定 [対面] What is overtourism?(14)授業形態予定 [対面] Overcoming overtourism excesses(15)授業形態予定 [対面] Solutions to address overtourism
[アクティブラーニングの取り入れ状況]	ディスカッションを行う。
[課題に対するフィードバック方法]	授業中に適宜フィードバックをする。
[教科書・参考書等]	教科書: What is international tourism and why is it important? (配布共有) What is overtourism and how can we overcome it? (配布共有) 参考書: 適宜指示する。
[評価方法]	(1)試験・テストについて 実施しない。

(2)試験以外の評価方法

教科書の内容理解等の平常点。

(3)成績の配分・評価基準等

受講者は毎回予め決められた講読部分を全訳して授業に参加することになるので、その訳出の仕方及び授業中のディスカッションの仕方を平常点(100%)として評価する。

[準備学習]

教科書の予習および復習が必要である。外国書がテキストであるため、予習には多くの時間を割いてもらいたい。

事前学習:教科書の予習(180分)

事後学習:教科書の予習および復習(60分)

[科目の位置づけと他科目との関連]

外国文献を講読する訓練であると同時に国際観光の基本的な問題のディスカッションの場である。

[担当教員へのアクセス]

研究室:3号館 2階 3215号室

メールアドレス:maruoka@isenshu-u.ac.jp

[オフィスアワー]

時間帯:随時

場所:3215研究室

[備考]

特になし。